

め、底部調整は見られない。

外面調整は縦ハケ、内面調整は口縁部に横ハケを施し、下半部に指撫でを施すものが主体を占める。少数ながら28のように内面に斜めハケを施すものが存在する。ハケ目は2cmあたり8～10本と目の粗いものが主体をしめる。

ヘラ記号は29の内面に認められた。×印の一部かと思われる。

胎土は赤色・白色粒子、小礫を混入し、焼成は硬質のものと、やや軟質のものが認められる。色調は橙褐色から褐色のものが50%以上で、次いで淡褐色のものが30%程の割合を占める。

本古墳の円筒埴輪の大きな特徴として、最上段の外面と口縁部内面に赤彩を施す点が指摘できる。赤彩の確認できたものは、19～22・30・47・49・52・55である。同様に赤色顔料を塗布した例は、全長約40mの前方後円墳であるD区第60号墳からも出土しており、関連性が窺われる。また県内では比企・入間地域に類例の分布が多く、埴輪生産技術の系譜関係についても重要な問題を提起している。

55・56は朝顔形埴輪の破片である。55は肩部の破片で、外面に赤彩を施す。外面にやや斜めのハケを施し、内面は横ハケを施す。56は頸部の破片である。

築造時期については、周溝覆土中層にFA粒子の混入が確認されていることから、FA降下以前の築造であることが判る。また出土遺物のうち円筒埴輪は、底部から直線的に開く形態の2条突帯のものと想定される。その特徴は生出土塚遺跡I期の様相に位置づけられ、外面に赤彩を施す特徴などやや古相を示す。

なお、D区の調査の際、周溝西側のブリッジ付近から多量の埴輪が検出されたほか、溝底面に土師器の壺が置かれていた。

第44号墳（第197～199図）

調査区中央部西際のR・S-17～19、T-18グリッドに位置する。ブリッジをもたない周溝の全周するタイプの円墳である。確認面における規模は、周溝内径15.04m、周溝外径18.56mを測り、群中では中規模に

属する。墳丘部及び周溝部分は第80号溝、第28号井戸、その他多数の土壌によって壊されており、大きく旧状を損なっていた。

墳丘盛土は既に削平されており、内部主体を確認することはできなかった。墳丘部はやや歪んだ円形を呈し、周溝外縁部の平面形態は中・近世の遺構との重複でかなり乱れていた。周溝の幅は2.24～1.28mを測り、深さは一定でなく、全体として南半分が浅く掘り込まれ、北半分が深い傾向が認められ、最深部で0.8mである。周溝断面形は逆台形を呈し、墳丘側は急角度で立ち上がる。

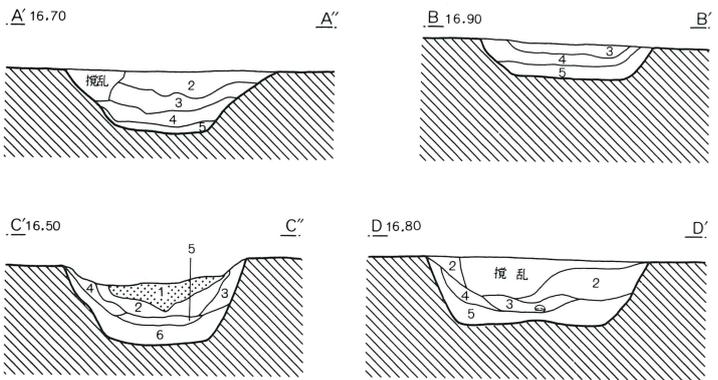
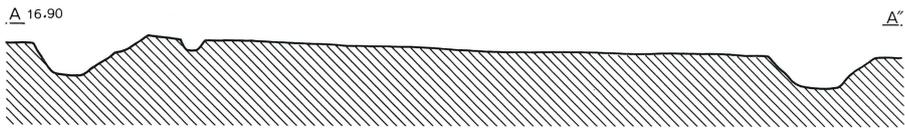
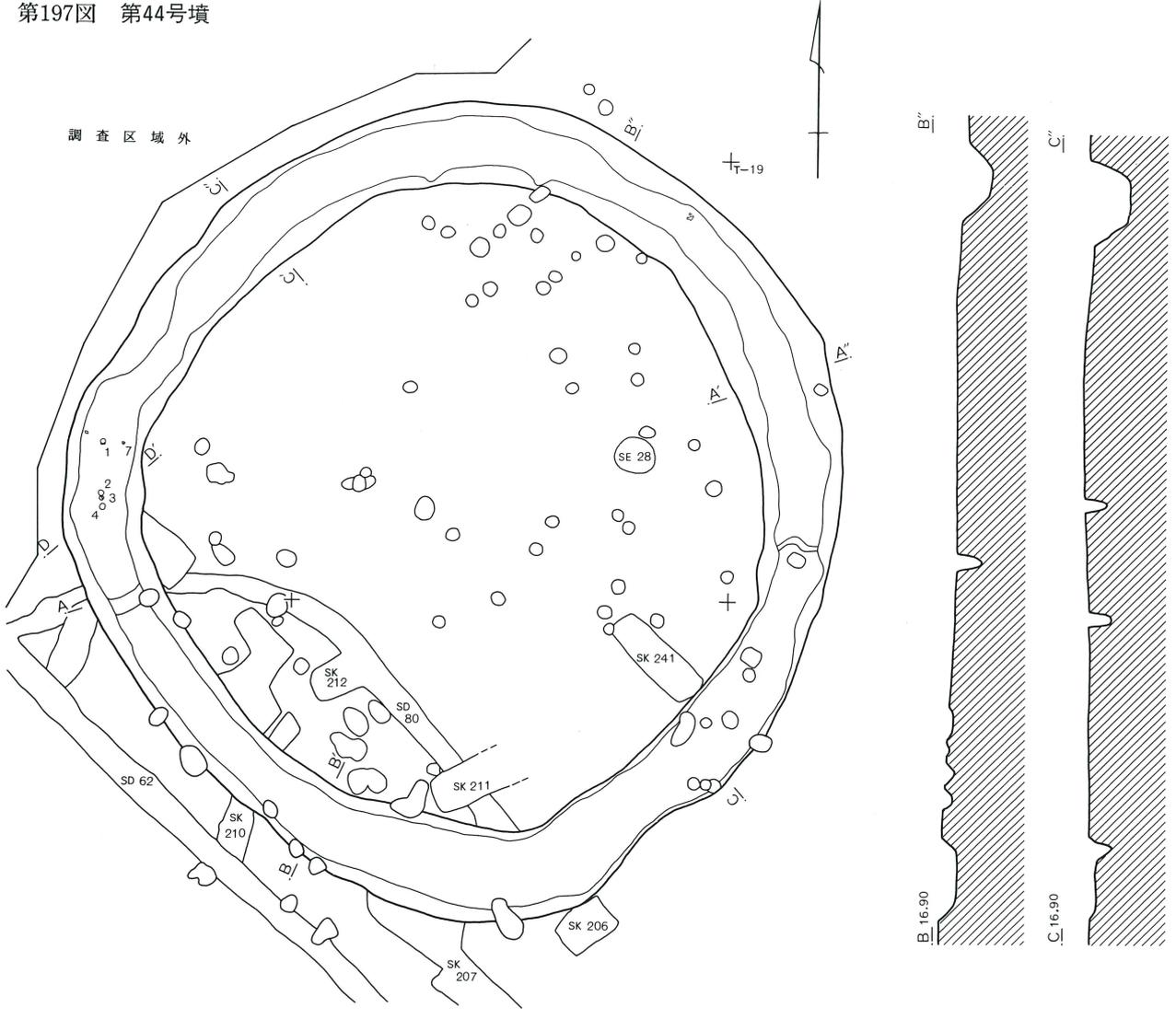
周溝覆土は基本的に6層に区分される。最下層の第5・6層は多量のロームブロックを含む1次堆積土で周溝西側ではその上面から土師器坏が置かれた状況で出土した。第1～4層は基本的には墳丘の崩落土で墳丘側から流入している。このうち北西側の周溝の上層にはFA粒子を微量混入する暗褐色土（第1層）が確認された。

遺物は、周溝西側から土師器坏4点と滑石製紡錘車1点がまとまって出土した。1の坏と7の紡錘車が並んで出土し、南へ1mほど離れた位置から2～4の坏が3個並んで出土した。1の坏は周溝中央の底面から16cmほど浮いた位置に正位の状態で置かれ、7の紡錘車は墳丘寄りの同じ高さから出土し、下面を上に向け斜めに傾いていた。2～4の坏は周溝中央に縦一列に並べられ、2・3は接するように正位で、4は僅かに離れ逆位の状態で置かれていた。土層断面D-D'の観察によれば4の坏は第5層の上面に位置しており、周溝の埋没が少し始まった段階に周溝底面に供献されたようである。他の古墳の供献土器の出土状況を考え合わせれば、この付近に入口部が想定される。

なお、周溝内の覆土中から円筒埴輪の破片が僅かに出土しているが、量的にみて到底、本墳に直接伴うものとは考えられず、隣接する古墳からの混入と推定される。

第199図1～4は土師器坏でいわゆる模倣坏である。いずれも形態、胎土、焼成、色調等の特徴が類似して

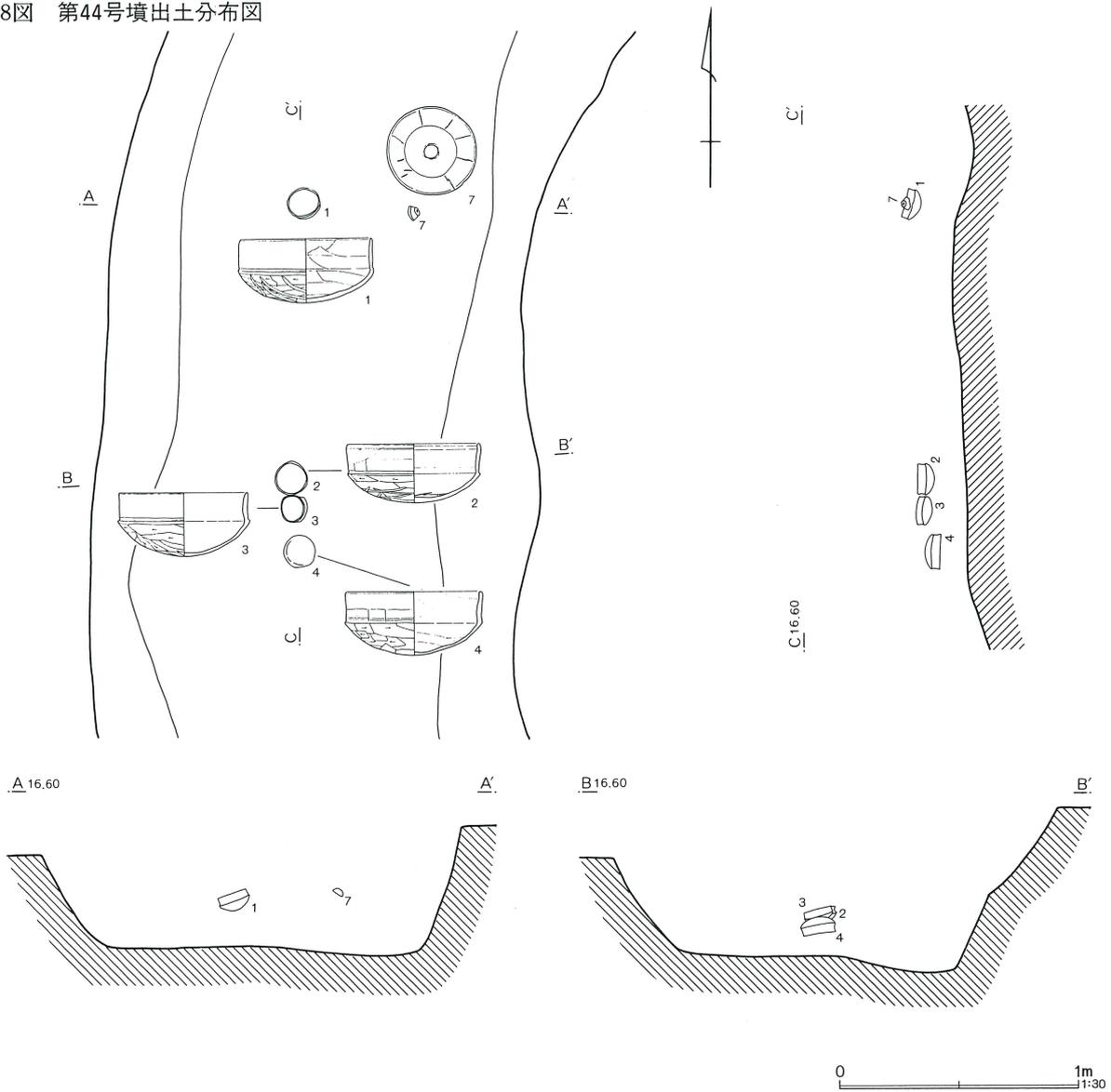
第197図 第44号墳



- SS 4 4
- 1 暗褐色土 F A粒子微量、ローム粒子多量
 - 2 茶褐色土 ロームブロック少量
 - 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量
 - 4 黄褐色土 ロームブロック少量
 - 5 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
 - 6 黒褐色土 ロームブロック多量



第198図 第44号墳出土分布図



いる。口径12.0~12.9cm、器高5.5~6.1cmを測る。5は土師器甕の口縁部の破片で、頸部からくの字状に大きく外反して立ち上がる。

6は須恵器甕の胴部片で、外面に目の粗い擬格子状の平行叩きを施し、内面には彫りの浅い同心円文の当具痕を残す。胎土、焼成、色調等の特徴から在産と考えられる。周溝覆土出土。

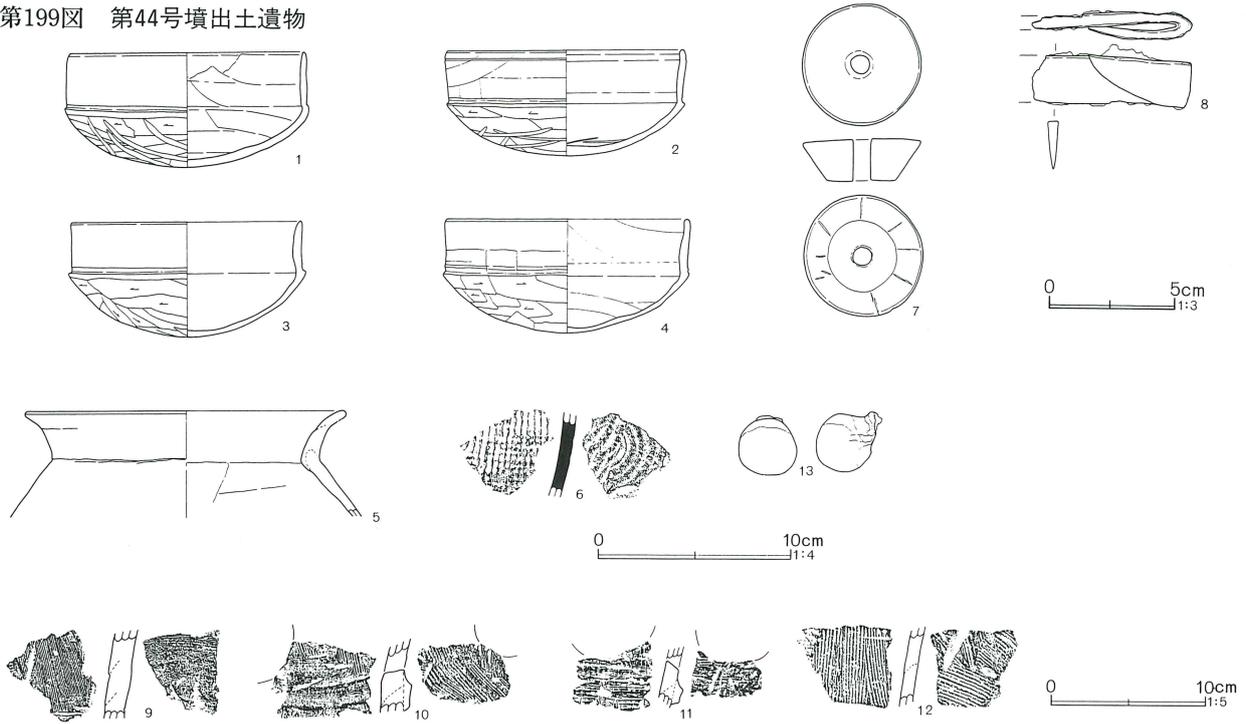
7は滑石製紡錘車である。外径4.7cm、厚さ1.6cm、孔径0.7cmを測り、重量は48.91gである。色調は濃緑色。上面は平滑に仕上げられているため、整形痕は見えないが、孔の周囲が僅かに盛り上がっていた。側面

は整形痕が良く残り、彫りの浅い線刻が放射状に刻まれていた。

8は人為的に切先が折り曲げられた刀子の破片である。周溝覆土中から出土したものである。明確な出土状況は不明であるが、第4号墳やA区第13号墳からも供献土器に伴って刀子が出土しており、古墳に伴うものと考えられる。葬送儀礼に伴って故意に副葬品を破砕・変形した例であろうか。

13は馬形埴輪の胸繫等に付けられた馬鈴と考えられるもので、鈴口を表現した切り込みがなく、残存部全体に撫でを加える。

第199図 第44号墳出土遺物



第44号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.4	6.0		BCE	A	橙褐	100	
2	坏	12.4	5.5		BEF	A	橙褐	100	
3	坏	12.0	6.1		BEF	A	橙褐	100	
4	坏	12.9	6.0		BCEF	A	橙褐	90	
5	甕	(16.8)	(5.6)		ABFIJ	B	暗灰	15	
6	甕				BG	A	灰		
7	紡錘車								外径4.7 孔径0.7 厚さ1.6cm
8	刀子								長さ(6.3) 身幅1.9 棟幅0.4cm

築造時期については、周溝覆土の上層に FA 混入層が確認されたことや、出土した坏の特徴にも模倣坏としては古い様相が窺われることから、古墳群形成初期の段階の築造と推定される。

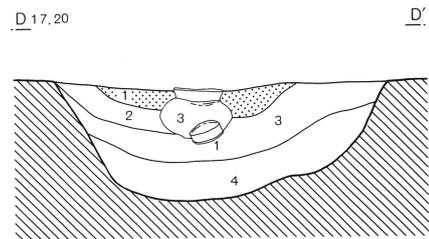
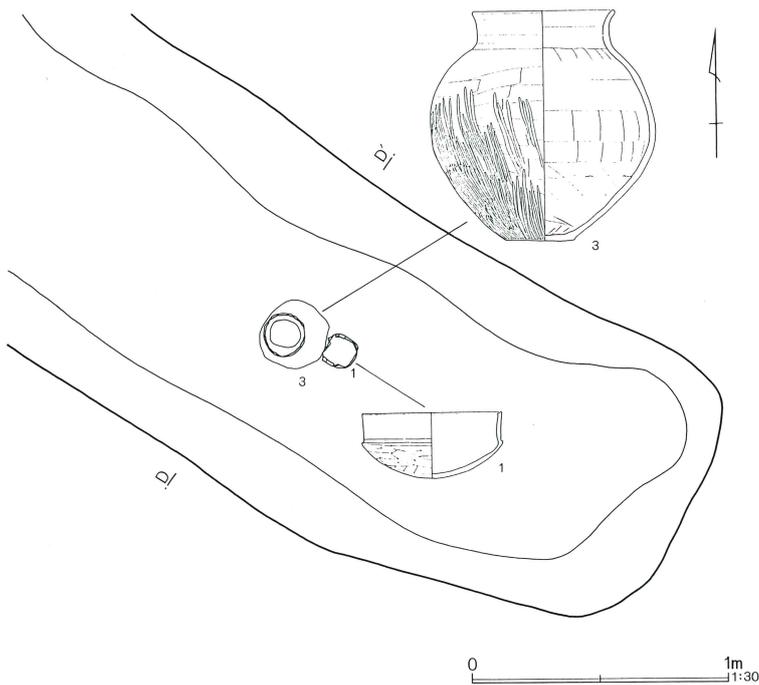
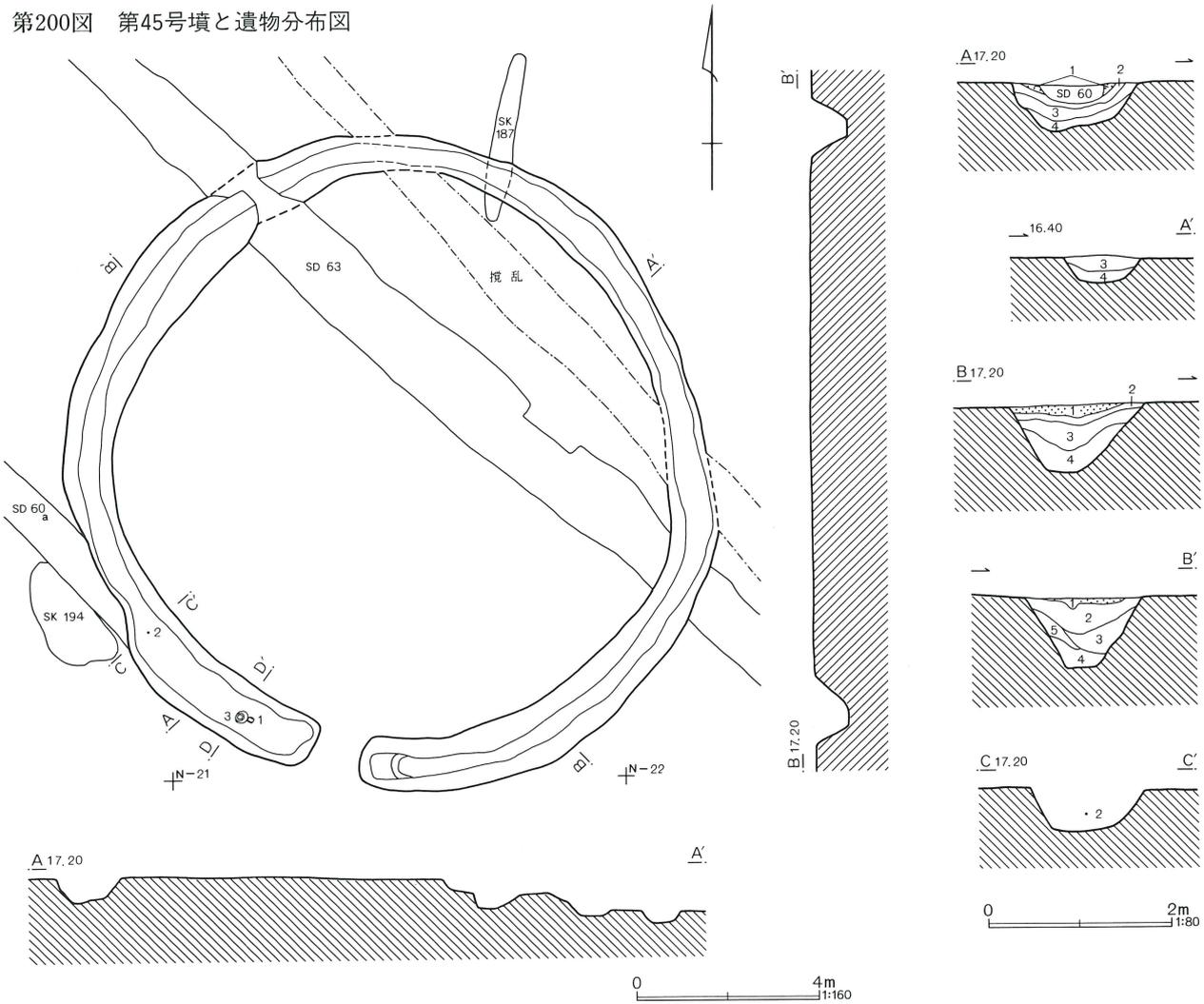
第45号墳 (第200・201図)

調査区中央部のN・O-20~22グリッドに位置し、周囲には北側に第39号墳が、南側に第59号土壙が所在する。地形的には低位面から移行する台地肩部の標高16.5m付近に立地する。周溝南側にブリッジをもつ中規模の円墳で、規模は周溝内径12.8m、周溝外径14.88mを測る。墳丘部は第63号溝によって切られ、ブリッジ左側は第60号溝と一部重複していた。また周溝南側では、縄文時代のTピットと考えられる第187号土壙を壊して、周溝が掘削されていた。

墳丘部は比較的整った円形を呈する。確認面が後世の削平によって北側が低くなっているため、周溝は北側から東側にかけて相対的に幅が狭まり、浅くなっている。周溝幅1.52~0.64m、深さ0.8m前後を測る。周溝の断面形は逆台形を呈し、ブリッジ右側は溝底面が狭く、立ち上がり角度が急であるが、ブリッジ左側は溝底面が広く、立ち上がり角度も緩やかである。ブリッジは南西に向き、主軸方位はN-168°-Wを指す。

周溝覆土は基本的に4層に区分される。最下層の第4層はローム小ブロックを多量に含む明褐色土で、1次堆積土である。その上に墳丘流入土と考えられる第3層が堆積し、その上面にブリッジ左側部分では土師器壺と坏が置かれた状況で検出された。最上層の第1層はFAブロックを多量に含む暗褐色土で、これによ

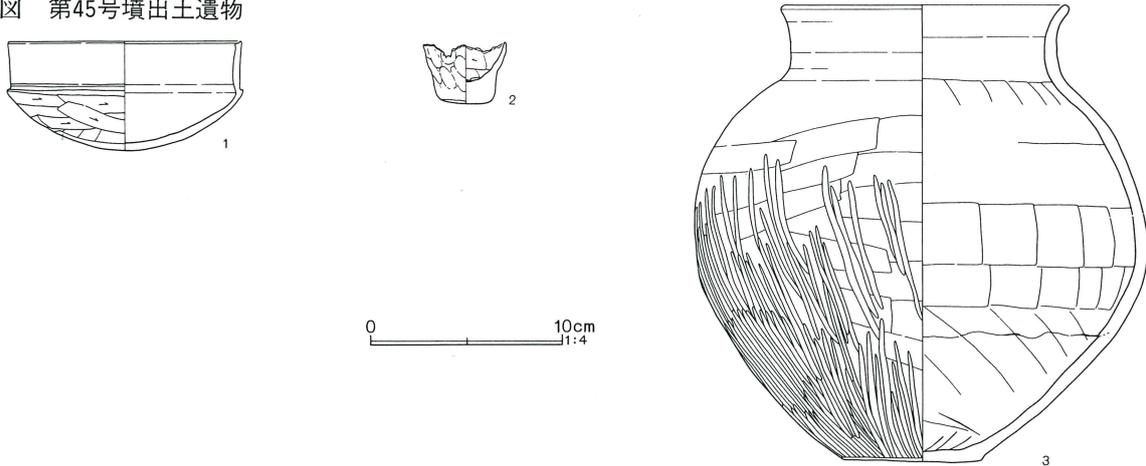
第200図 第45号墳と遺物分布図



SS 45

- | | | |
|---|------|-----------------|
| 1 | 暗褐色土 | FAブロック多量 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子多量、焼土粒子少量 |
| 3 | 褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量 |
| 4 | 明褐色土 | ローム小ブロック多量 |
| 5 | 明褐色土 | ローム粒子多量 |

第201図 第45号墳出土土遺物



第45号墳出土土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.2	5.8		B E F	A	赤褐	70	
2	ミニチュア	4.3	3.2		B F	D	黒褐	90	
3	壺	14.8	24.2	7.3	A B E F	A	褐	90	

り周溝がある程度埋まった段階に FA が降下した状況を示唆している。

遺物は、ブリッジの左側から土師器坏と壺が周溝底面から24cmほど浮いた状態で出土したほか、その西側の周溝覆土下層からはコップ形のミニチュア土器が出土した。ブリッジ左脇に置かれた坏1と壺3は、周溝中央部分の第3層上面に、正位の状態で接するように置かれ、FAブロックを混入する第1層に覆われていた。これらの土器は溝底面からかなり浮いた位置に据え置かれており、当初埋葬に伴い供献されたものか、追葬段階のものか検討を要する資料と考えられる。

なお、周溝内から埴輪はほとんど出土していないことから本来樹立されていなかったものと思われる。

第210図1は土師器坏で、いわゆる模倣坏である。口縁部は直立し、体部は半球形で深い。口径12.2cm、器高5.8cmを測る。2は手捏ねのミニチュア土器である。体部外面に指頭圧痕を残し、内面は撫でを施す。底部が厚く、口唇部は薄くつまみ出される。口径4.3cm、器高3.2cmを測る。3は土師器の壺で、胴部は篋削りを施した後に、胴部下半に縦位の篋磨きを加える。胴部内面は木口状工具による撫でを丁寧に施す。口縁部は頸

部から直立して立ち上がり、緩やかに外反する。口径14.8cm、器高24.2cm、底径7.3cmを測る。

第46号墳 (第202・203図)

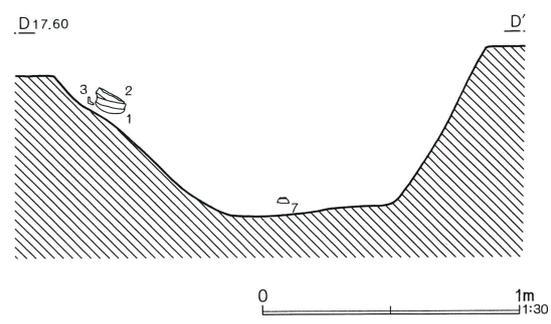
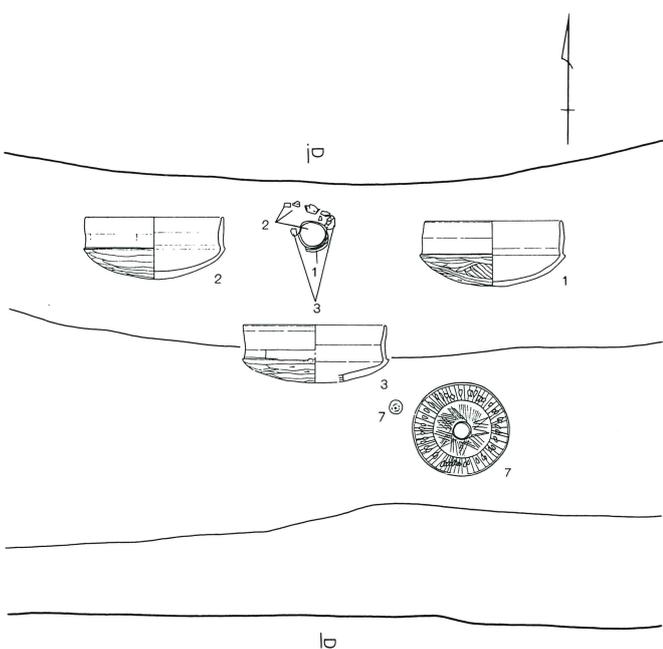
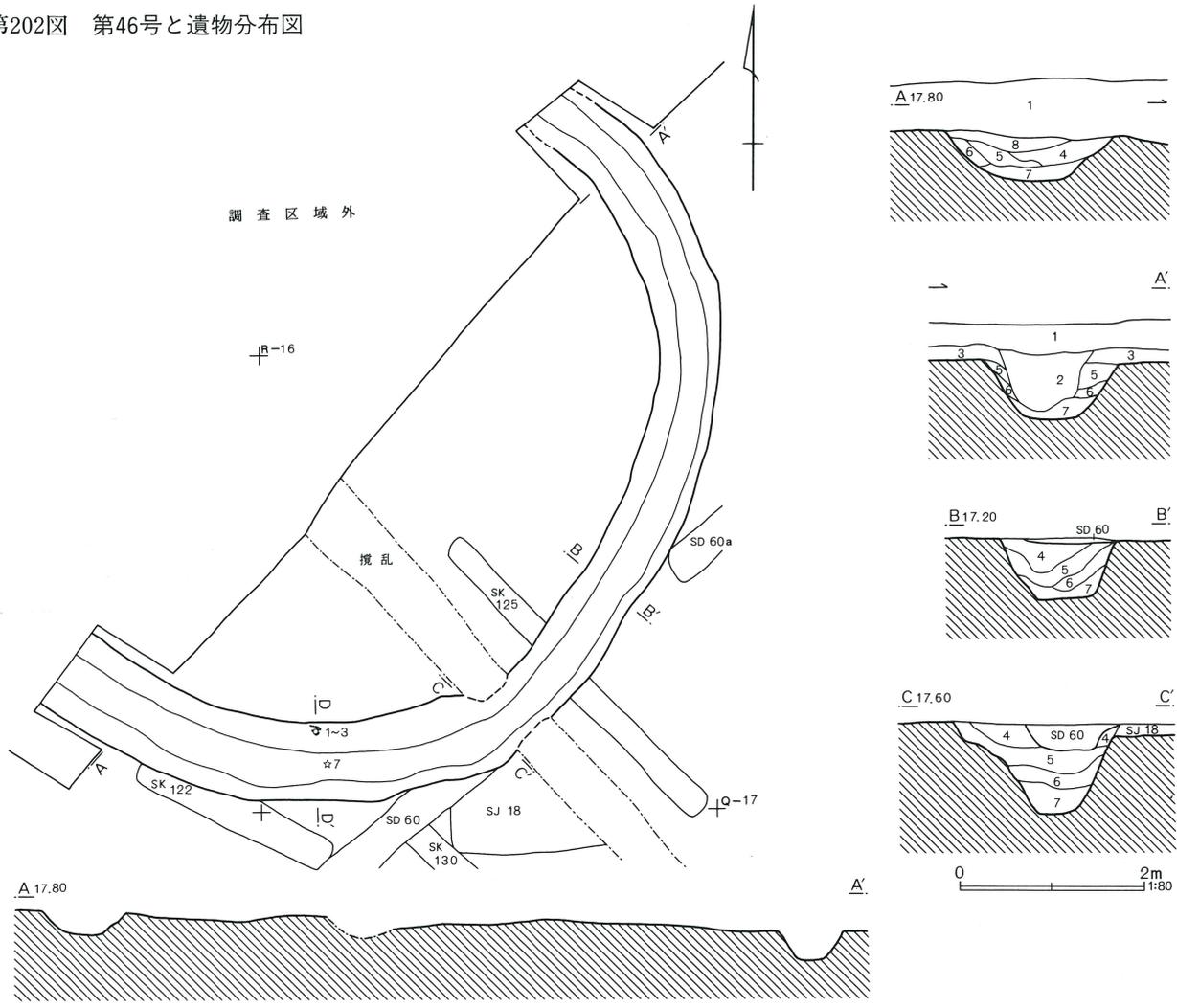
調査区中央部西際のQ-15・16、R-16グリッドに位置し、西半分は調査区域外にかかる。今回の調査では全体の約2分の1を調査しただけであったが、その後、平成6・7年度に隣接地(D区)を調査した結果、南西方向に開口するブリッジをもつ円墳であることが明らかとなった。確認面における規模は周溝内径14.64m、周溝外径18.08mを測る。周囲には北東側に第44号墳、南西側に第47号墳がそれぞれ位置している。

墳丘中央部は後世の攪乱によって大きく削平され、周溝の南側に接するように第60号溝が走る。また古墳の南側には古墳前期の第18号住居跡が重複し、古墳の築造によってその大部分が壊されていた。

墳丘部は、調査部分の観察では比較的整った円形を呈するものと推定される。墳丘盛土は既に削平され、内部主体は確認できなかった。周溝はほぼ一定した幅で巡り、周溝幅1.92~1.28m、深さ1.04mを測る。周溝断面形は逆台形を呈し、底面は概ね平坦である。

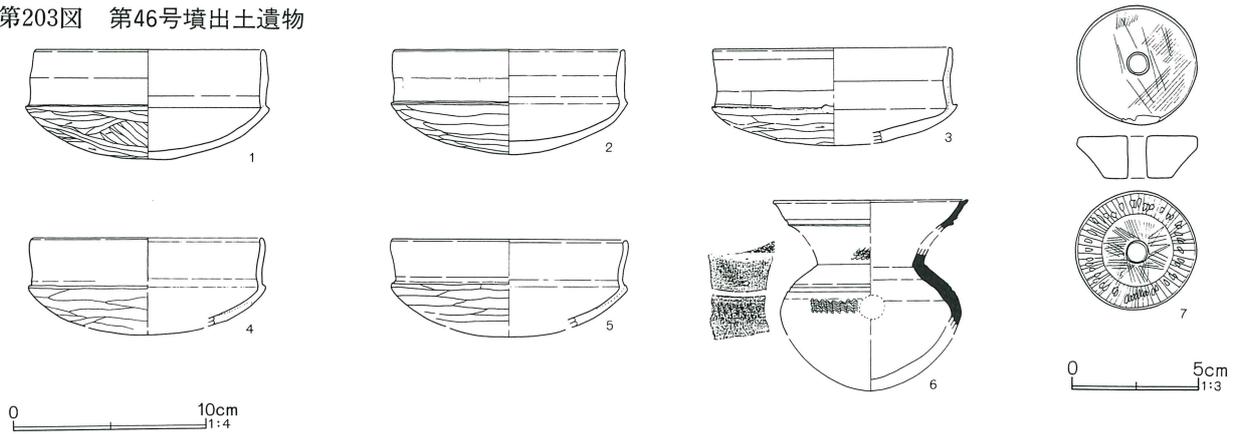
周溝覆土は大きく4層に区分される。最下層の第7

第202図 第46号と遺物分布図



- SS 4 6
- 1 表 土
 - 2 攪 乱
 - 3 暗 褐 色 土 ローム粒子多量
 - 4 暗黄褐色土 ローム粒子少量
 - 5 暗黄褐色土 ローム粒子多量
 - 6 暗 褐 色 土 ローム粒子少量
 - 7 暗 褐 色 土 ローム小ブロック多量

第203図 第46号墳出土遺物



第46号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.9	5.7		B F	A	赤褐	100	
2	坏	12.0	5.5		B F	A	赤褐	80	
3	坏	(12.5)	5.1		B F	A	赤褐	40	
4	坏	(12.0)	(4.8)		B E F	A	橙褐	30	
5	坏	(12.3)	4.6		B E F	A	淡褐	20	
6	甗	(10.2)			B G	A	暗灰	10	
7	紡錘車								外径4.8 孔径0.85 厚さ1.7cm

層はローム小ブロックを多量に混入した暗褐色土で、この層からは遺物はまったく出土していない。おそらく築造当初の溝底面を形成していたものと考えられる。第4～6層は墳丘側からの流れ込みを示しており、基本的には墳丘盛土の流入土と考えられる。なお土層の断面観察ではFA等の火山灰粒子の混入は確認できなかったが、出土遺物の様相からFA降下以前に築造された古墳群形成初期の段階の所産と推定される。

遺物は、周溝南側から土師器坏3点と滑石製紡錘車1点がまとめて出土した。1～3の模倣坏は周溝の墳丘側の上端から僅かに下がった斜面部に重なった状態で出土した。1の中に2が重なり、3はその周囲に破片となって検出された。本来は墳丘部に重ねた状態で置かれていたものが周溝内に落ち込んだものと推定される。7の紡錘車は、坏が出土した地点の周溝中央部の底面に近い位置から下面を上にして出土した。築造当初に周溝底に置かれたものか、墳丘部から転落したものかは明確でない。他に東側の周溝覆土中から須恵器甗の破片が出土した。

第203図6の甗は、口縁部と肩部の小破片からの復

元実測である。頸部と胴部中央に楕円波状文を巡らしている。器形等の特徴からTK47型式に比定される。7は滑石製紡錘車で、側面には整形痕が良く残り、刺突による列点文を施す。

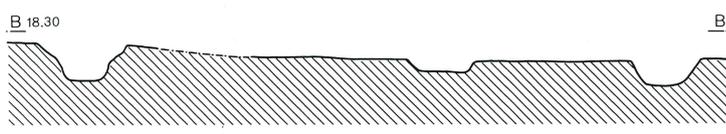
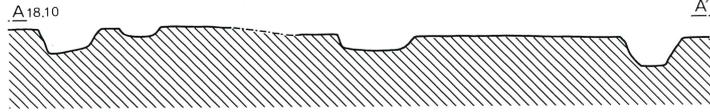
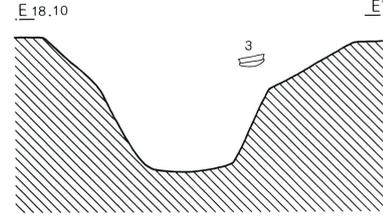
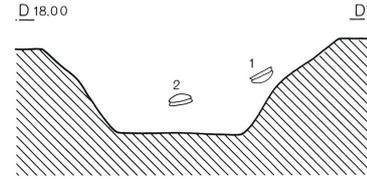
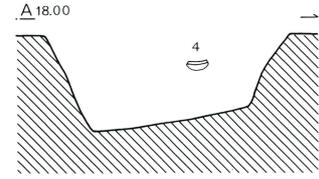
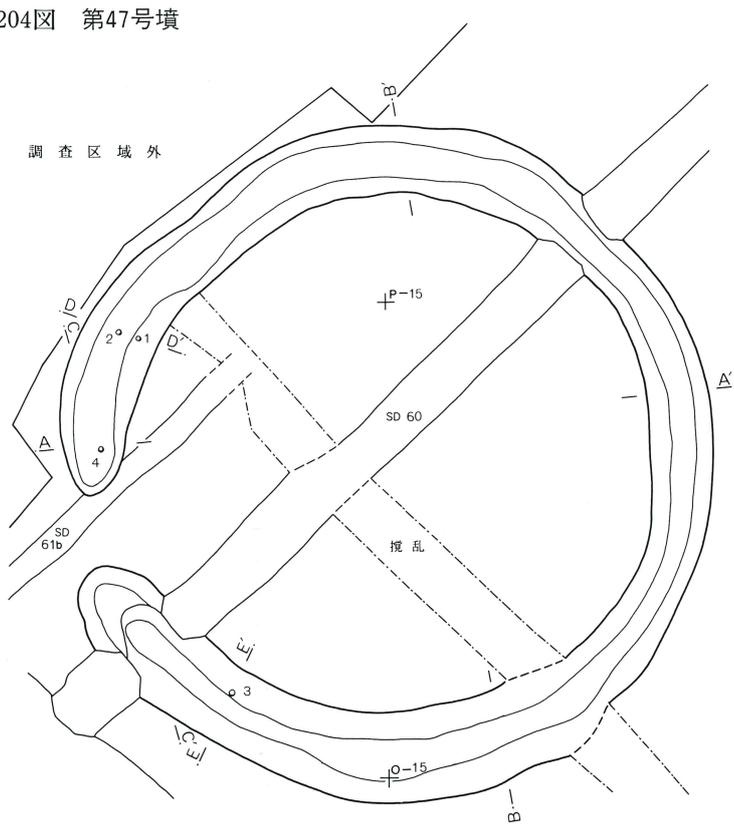
なお、周溝覆土中には埴輪片の出土がほとんど見られなかったことから、本来樹立されていなかったものと考えられる。

第47号墳（第204・205図）

調査区西寄りのO・P-14・15グリッドに位置し、北東側に第46号墳が、南側には第48号墳が隣接する。第48号墳との間隔は約1.6mまで接近している。西に向くブリッジを有する中規模の円墳で、周溝内径11.2m、周溝外径14.4mを測る。墳丘部の中央を第60・61号溝が南東から南西に向かって走り、周溝北側を第227号土溝が切っている。

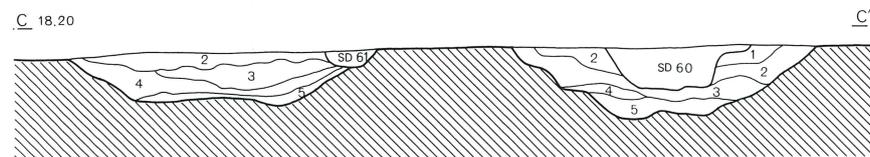
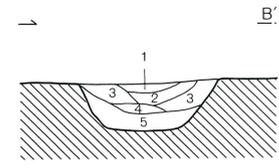
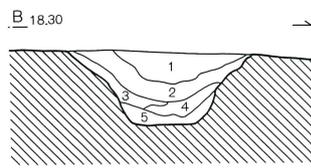
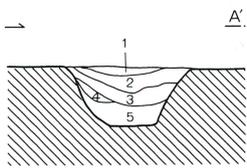
墳丘は既に削平されており、内部主体は確認されなかった。墳丘の平面形態は、西側がやや直線的となるが全体としては形の整った円形を呈する。周溝は東側でやや幅を狭めるが、比較的均一に巡り、周溝幅2.08～1.12mを測る。周溝底面は概ね平坦で、最も深

第204図 第47号墳

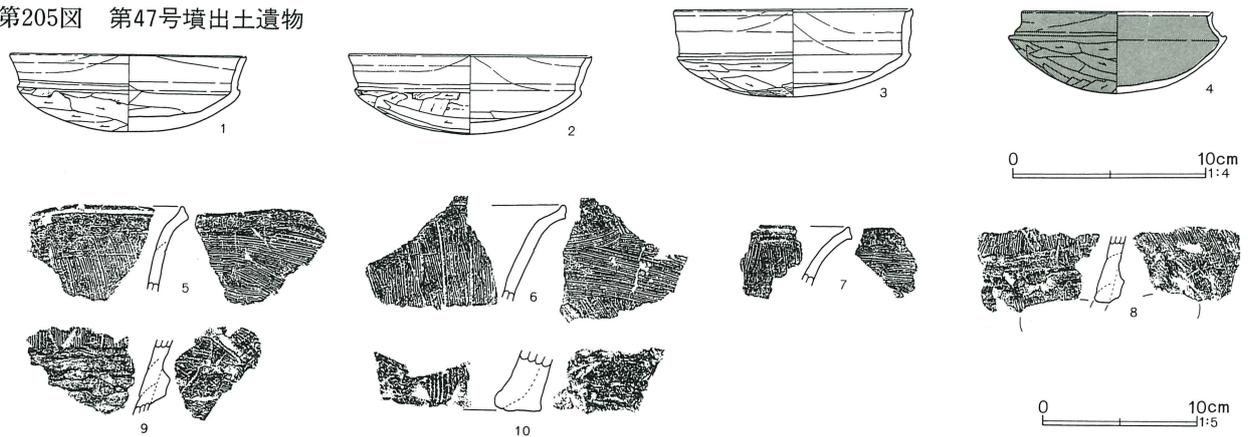


SS 47

- 1 黒色土 ローム粒子多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量
- 4 暗灰褐色土 ローム粒子多量
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量



第205図 第47号墳出土遺物



第47号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.4	4.0		B E F	A	乳白	100	
2	坏	12.8	4.2		B E F	A	乳白	100	
3	坏	12.5	4.6		A B F	B	橙褐	100	
4	坏	10.0	4.3		A B	A	黒褐	85	黒色処理

い部分で0.8mを測り、断面形は基本的に逆台形を呈し、墳丘側が急傾斜である。ブリッジは、第61号溝と重複しているため一部壊されていたが、幅広く直線的に開口し、主軸方向はN-105°-Wを示す。またブリッジ左脇にはステップ状の造作が作られていた。これは周溝掘削時の作業用のものであろうか。

周溝覆土は、大きく5層に区分される。最下層の第5層はロームブロックを多量に混入する暗褐色土で、この層からは遺物はほとんど出土しなかった。第1～4層は基本的には墳丘盛土の流入土で、レンズ状に堆積し、第3層には多量のロームブロックが含まれていた。また覆土中にはFA等の火山灰の混入は観察できなかった。出土した土師器坏の型式的特徴からFA降下以後の築造と推定される。

遺物は、ブリッジ付近を中心に土師器坏4点が出土した。ブリッジ左の周溝北西側から1・2の坏が溝底面からやや浮いた状態で検出され、1は正位、2は逆位で出土した。さらに、ブリッジ左脇からは黒色処理を施した坏身模倣の4が出土した。またブリッジ右側からは模倣坏の3が墳丘側から流れ込んだ状態で出土した。

他に周溝内の覆土中から円筒埴輪の破片が少量検出

されているが、量的に少なく、隣接する古墳からの混入と推定される。

第48号墳 (第206・207図)

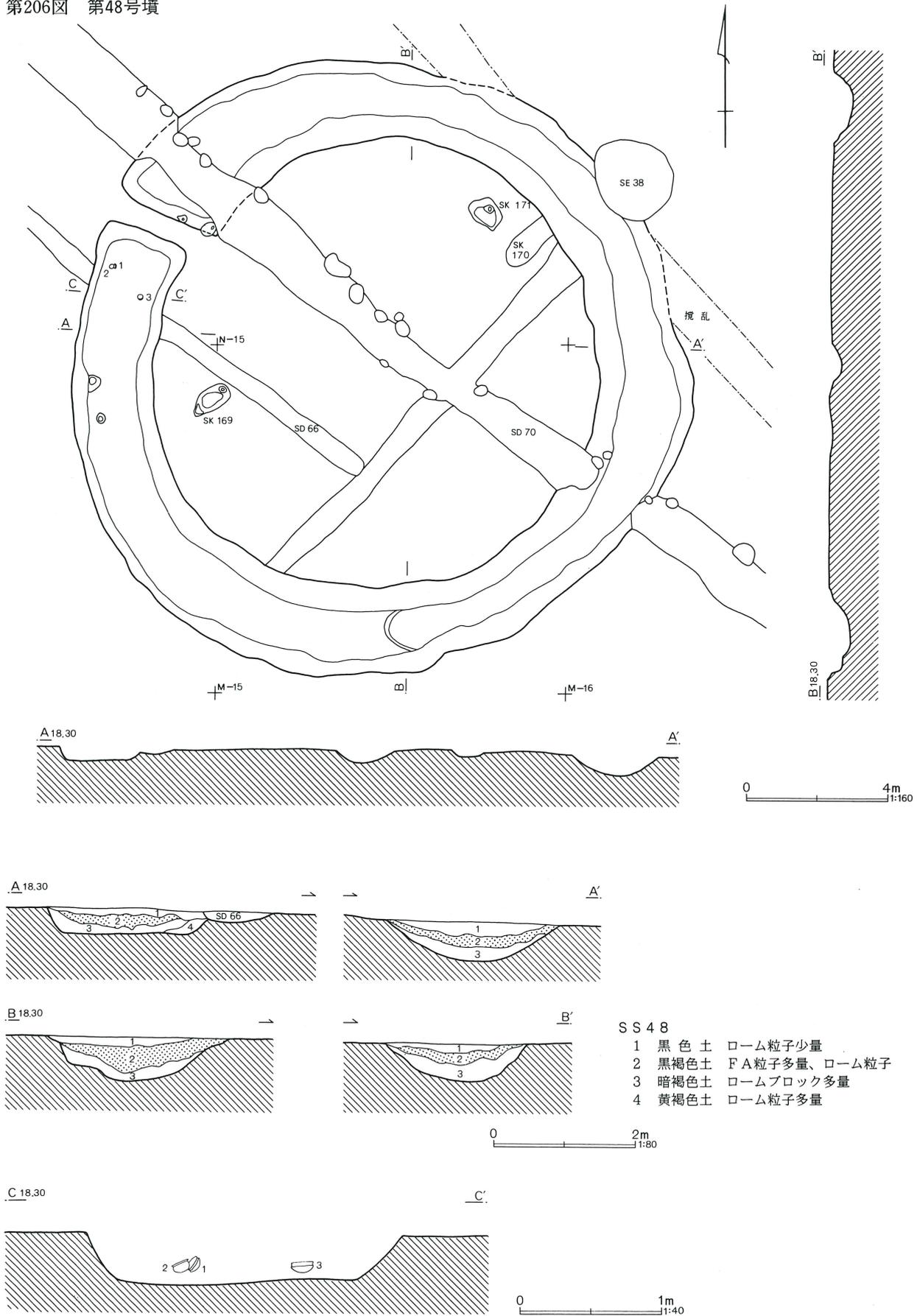
調査区中央部西寄りのM・N-14～16グリッドに位置し、北側には第47号墳が存在する。ブリッジを西に向けた中規模の円墳である。確認面における規模は、周溝内径13.12m、周溝外径17.92mを測る。墳丘部は第66・70号溝、第38号井戸、第169～171号土壙等の中・近世の遺構によって大きく削平されていた。

墳丘部の平面形態は、整った円形を呈する。周溝は比較的に幅広く、溝底面も平坦で、断面形はレンズ形に近い。周溝幅2.96～1.92m、深さ0.64mを測る。ブリッジは北西を向き、細長く直線的に開口する。主軸方向はN-58°-Wである。ブリッジ部分は、周溝の幅を広くし、溝底面も平坦に作り出し、墓前祭祀を執り行う空間として特別に意識されていたようである。

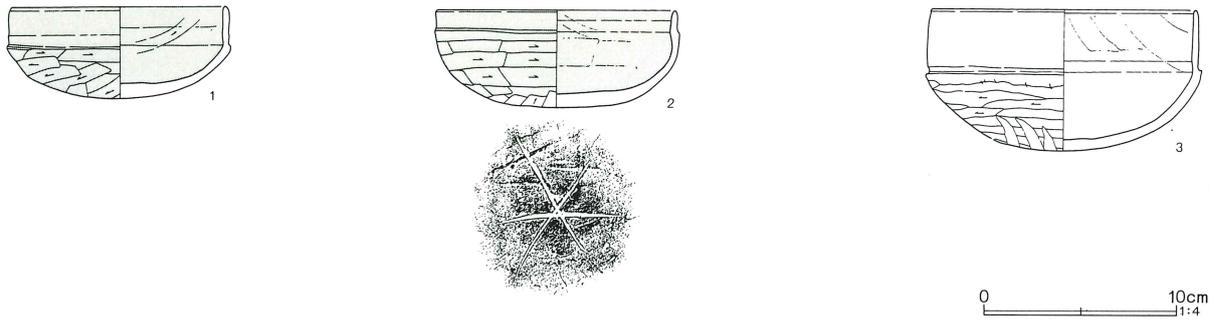
周溝覆土は大きく4層に分けられる。最下層の第3層はロームブロックを多量に含む暗褐色土で、ブリッジ右側では、この面に供献土器が置かれていた。第2層はFA粒子を多量に含む黒褐色土で、レンズ状に薄く堆積していた。

遺物は、ブリッジ右側の周溝底面から土師器坏3点

第206図 第48号墳



第207図 第48号墳出土遺物



第48号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.3	4.8		B C E F	A	赤褐	100	赤彩 ヘラ記号
2	坏	12.5	5.1		B C F	A	赤褐	100	赤彩
3	坏	14.0	7.5		B E F	A	橙褐	100	

が出土した。1・2はブリッジ右脇の周溝外側寄りから重なった状態で検出された。赤彩を施した模倣坏1に重なるように、椀形の2が出土し、南東方向に離れた位置から3の大型坏が正位の状態で出土した。これらの土器はいずれも完形品であることから、築造当初から埋葬儀礼に伴って、周溝底面に配置されたものと想定される。

第207図1は内外面に赤彩を施した「比企型」の模倣坏である。口径11.3cm、器高4.8cmを測り、胎土に白色針状物質を少量含む。2は内外面に赤彩を施し、半球形の体部から短く直立する口縁部に移行する椀タイプの坏である。底部外面に×印のヘラ記号が認められる。口径12.5cm、器高5.1cmを測り、胎土に白色針状物質を混入する。3は口径14cm、器高7.5cmを測る大型の模倣坏である。なお、周溝覆土からは埴輪片がほとんど出土していないことから、本来埴輪は樹立されていなかったものと推定される。

第49号墳（第208・209図）

調査区中央部のM・N-17・18グリッドに位置し、西側に第48号墳、南側に第50号墳が所在する。南西に向くブリッジをもつ中規模の円墳で、周溝内径13.52m、周溝外径17.52mを測る。墳丘部の南東側を第72号溝が斜めに走り、またブリッジの中央を第70号溝によって壊されていた。

墳丘盛土は既に削平されており、内部主体は確認で

きなかった。墳丘部の平面形態は、比較的整った円形を呈し、周溝をほぼ均一に巡らす。周溝幅2.40~1.64m、深さ0.64mを測り、底面はほぼ平坦で、断面逆台形を呈する。ブリッジは南西方向に向き、直線的に開口する。主軸方向はN-141°-Wを示す。

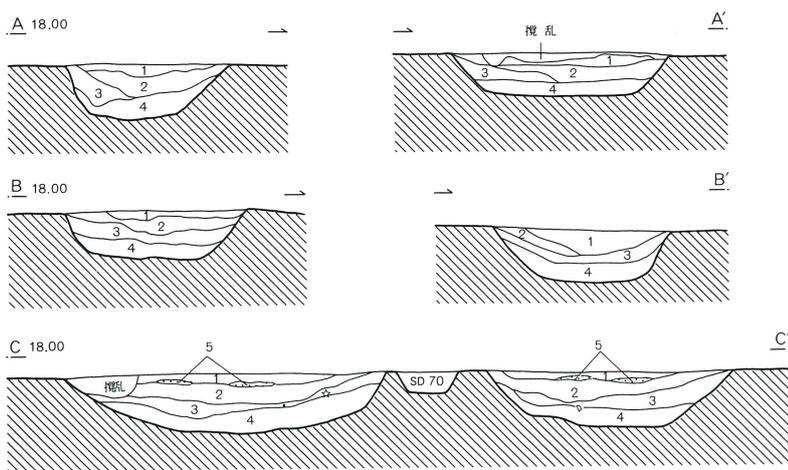
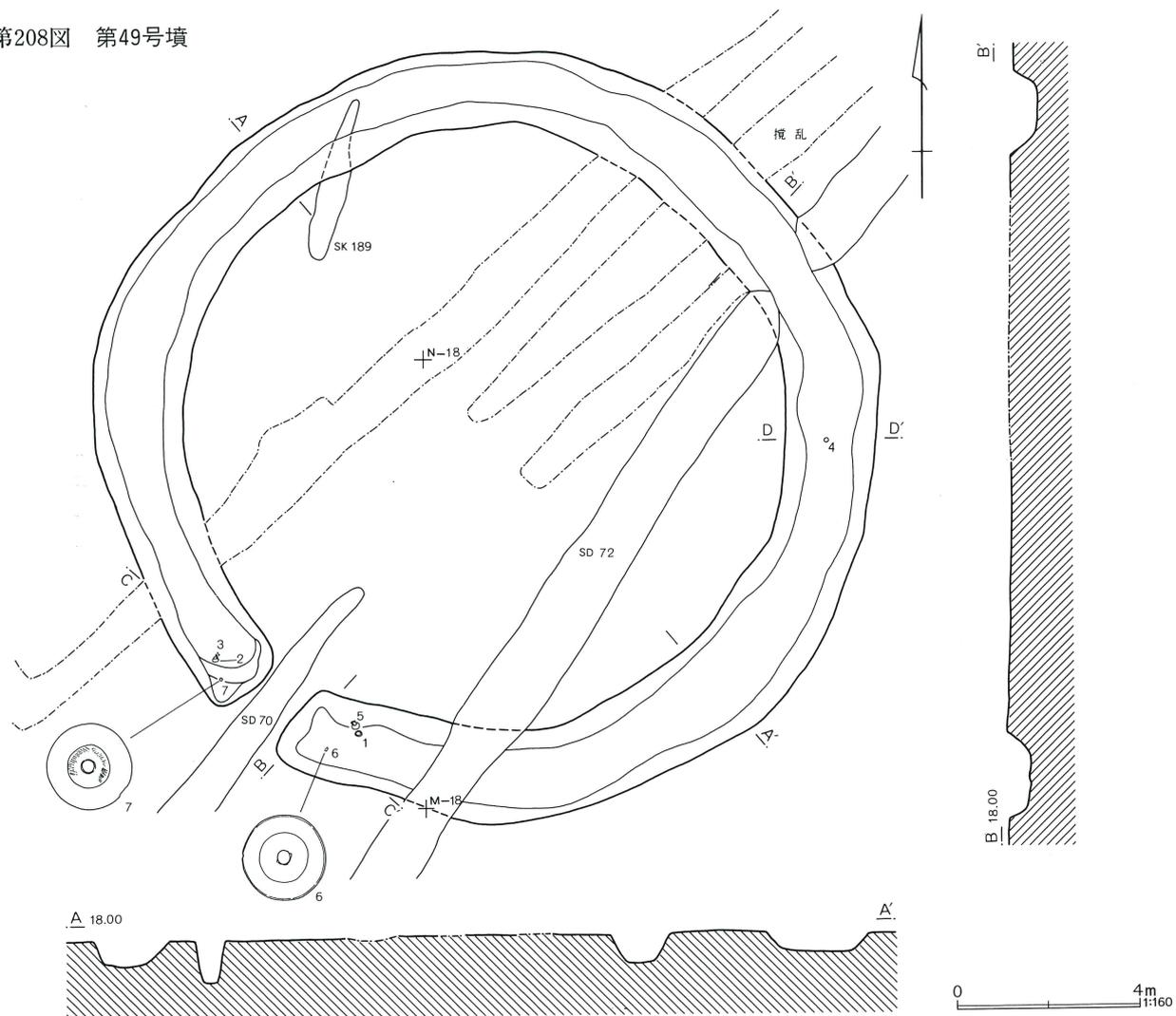
周溝覆土は大きく4層に分かれる。最下層の第4層はローム小ブロックを多量に含む暗黄褐色土である。ブリッジの両脇では、この層の上面から供献土器が出土しており、築造当初の溝底面を形成していたものと推定される。ブリッジ部分の土層断面の観察では、第1層と第2層の間に、FAブロックを多量に混入した第5層が検出されている。他の古墳に比べ、FA層の層位が、最上層付近に位置しており、FAの降下時期よりも、築造時期はかなり遡るものと考えられる。

遺物はブリッジの両側から土器器坏4点、壺1点、滑石製紡錘車2点が出土している。

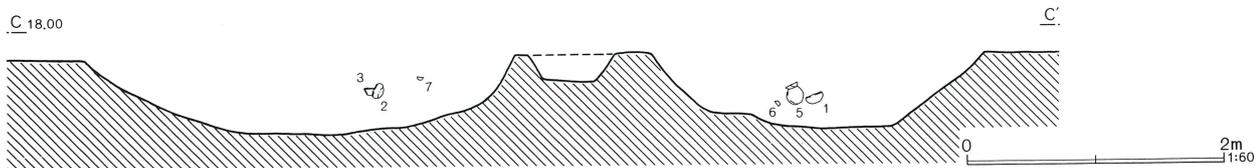
ブリッジの左脇からは2・3の坏と7の紡錘車が検出された。縦位に出土した2の中に、3が重なって入っていた。7の紡錘車は、南に少し離れた位置から上面を上にして出土した。

ブリッジ右脇からは1の坏と5の壺が墳丘側から出土し、6の紡錘車は少し離れた位置から検出された。1と5は概ね正位の状態を示していた。6の紡錘車は上面を西に向け縦位の状態で出土した。これらの遺物は、土層断面C-C'の観察によれば、第4層の上面に

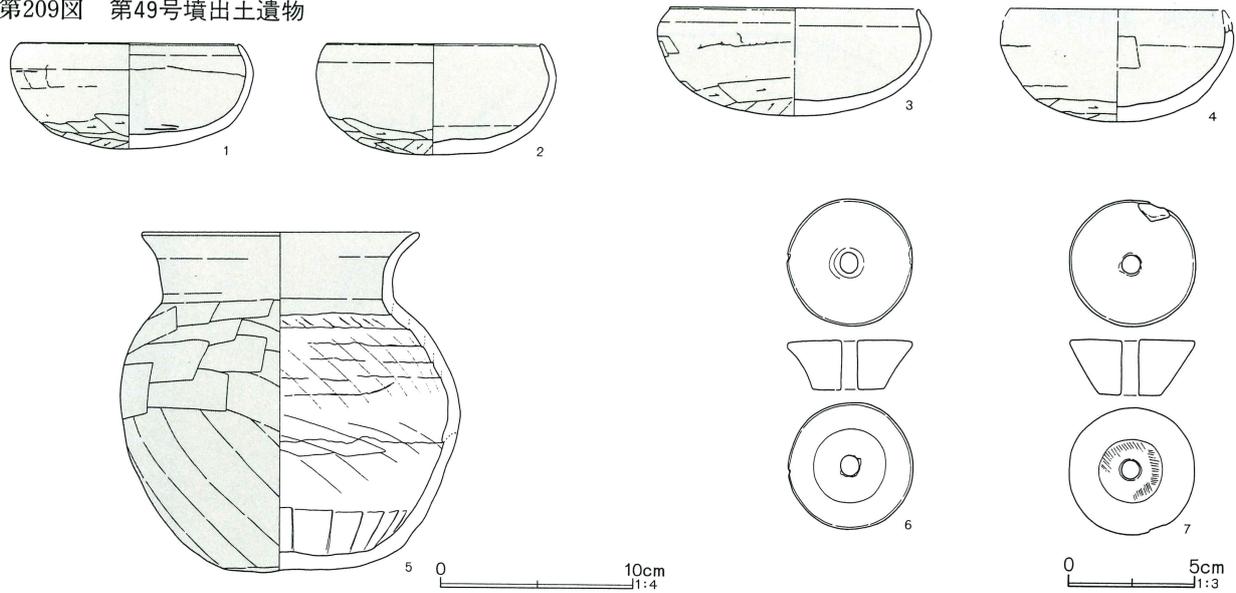
第208図 第49号墳



- SS 49
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物粒子少量
 - 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量
 - 4 暗黄褐色土 ローム小ブロック多量
 - 5 黒褐色土 F Aブロック多量



第209図 第49号墳出土遺物



第49号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.5	5.5		ABEFI	A	赤褐	100	赤彩
2	坏	11.2	5.8		ABEI	A	赤褐	80	赤彩
3	坏	(13.1)	5.6		ABFI	B	赤褐	40	赤彩
4	坏		(5.3)		ABEFI	B	淡褐	40	赤彩
5	壺	14.5	17.8		ABEFI	B	赤褐	80	赤彩
6	紡錘車						濃い緑		外径5.0 孔径0.7 厚さ2.0cm
7	紡錘車						濃い緑		外径5.0 孔径0.7 厚さ2.2cm

置かれていたものと推定される。出土した土器は概ね共通した特徴を示しており、あまり時期差はないものと思われる。

他に周溝東側から4の土師器坏が単独で、覆土の中層から出土している。なお、周溝覆土中からは埴輪片がほとんど出土していないことから、本来埴輪は樹立されていなかったものと推定される。

第209図1～4の坏は、法量や口唇部の形状など細部の特徴は異なるが、いずれも赤彩を施し、半球形の体部から内湾する口縁部に移行するものである。5は赤彩を施した小型の壺で、底部は平底に近い。

6・7は滑石製紡錘車である。6は側面が湾曲し、上面の孔の周囲に同心円状についた使用痕がある。7は整った断面逆台形を呈し、下面に整形時の擦痕が見られる。

築造時期については、定形化した模倣坏が伴わず、赤彩した内湾するタイプの坏が出土しており、鬼高I

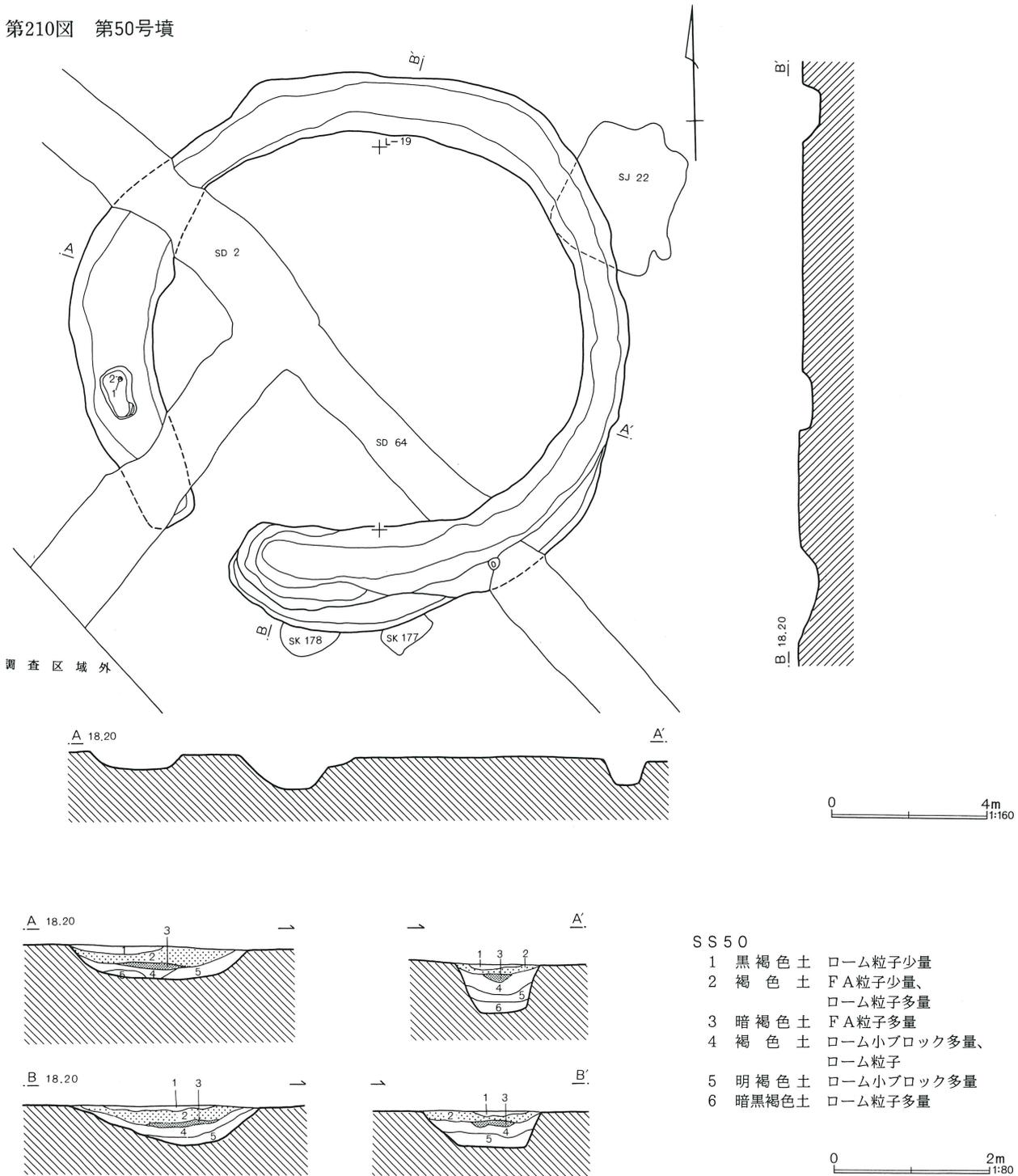
式の古段階の様相を示すことから、古墳群形成初期の段階に築造されたものと推定される。

第50号墳（第210・211図）

調査区中央東寄りのJ～L-18・19グリッドに位置する。周囲には北西に第49号墳、東に第4号墳、南西にA区第7号墳がある。南西を向くブリッジをもつ円墳で、規模は周溝内径11.28m、周溝外径14.72mを測る。墳丘部は第2・64号溝によって大きく壊され、周溝東側は平安時代の第22号住居跡に切られていた。

墳丘の平面形態は比較的整った円形を呈する。周溝はブリッジ右側の外縁部にテラス面が作り出され、幅広くなっているが、東側は幅がやや狭まり、周溝幅2.72～1.09m、深さ0.65mを測り、断面箱形である。周溝底面は概ね平坦であるが、北側から東側にかけては深く掘り込まれ、ブリッジ付近は全体に掘り込みが浅い。ブリッジは第2号溝によって右側先端部が壊されていたが、幅広で直線的に開き、主軸方向はN-140°

第210図 第50号墳



-Wを指す。

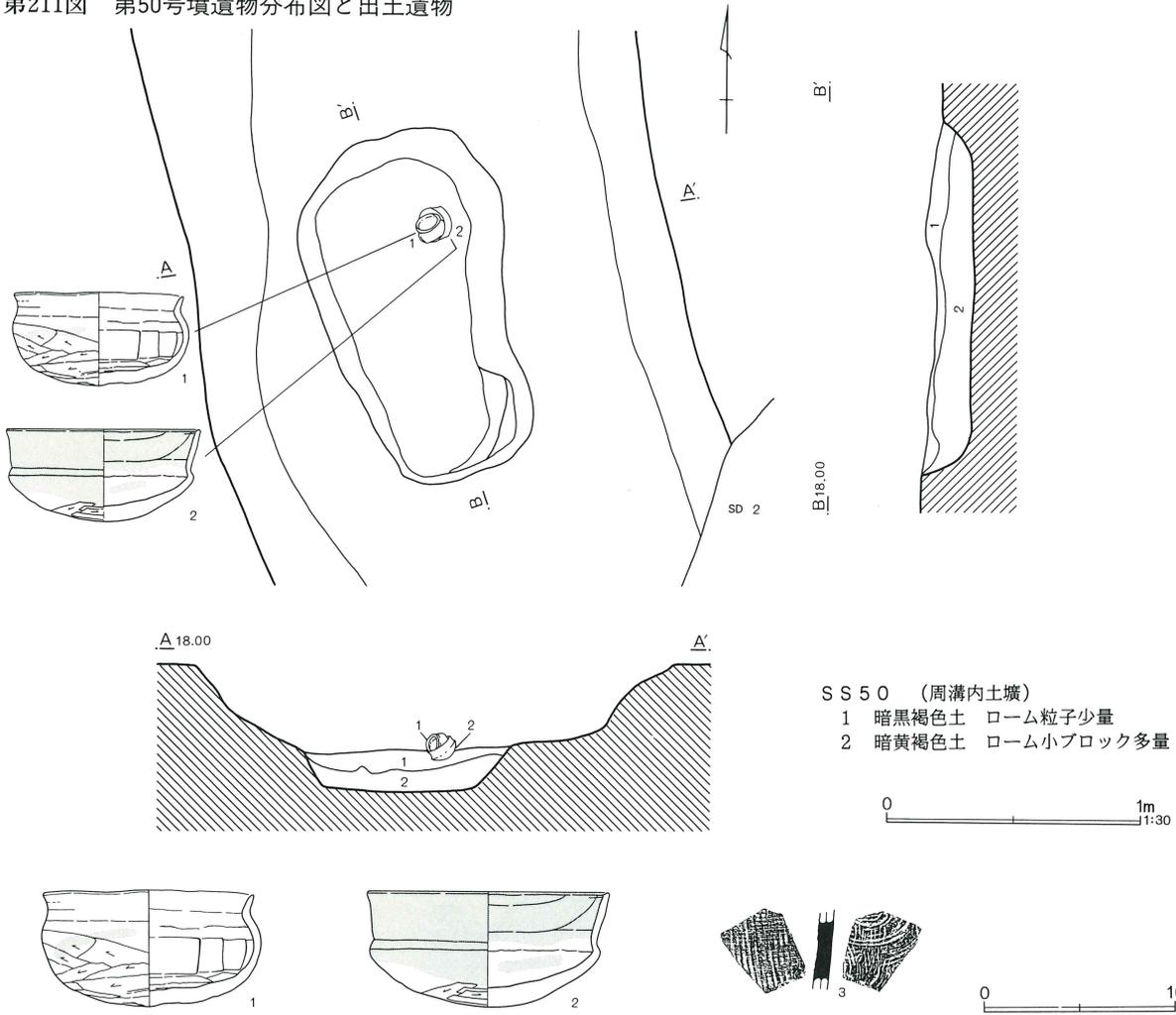
周溝覆土は大きく6層に区分される。最下層にあたる第5・6層はローム小ブロック・ローム粒子を多量に含む土砂が堆積していた。その上に墳丘流入土と考えられる第1～4層がレンズ状に堆積し、このうち第2・3層にはFA粒子の混入が確認された。

ブリッジ左側の周溝底面の中央に長方形の土壌が検

出された。この土壌は、調査時覆土下層面からの掘り込みが確認されており、周溝がある程度埋没した段階に掘り込まれたものと考えられる。平面形態は北側に最大幅をもつ長台形を呈し、規模は長軸1.4m、最大幅0.84m、最小幅0.6m、溝底面からの深さ0.2mを測り、主軸方向はN-18°-Wを示す。

覆土は2層に区分され、第2層はローム小ブロック

第211図 第50号墳遺物分布図と出土遺物



第50号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	椀	11.0	6.2		BFI	A	褐	100	赤彩(線状)
2	坏	12.8	6.1		ABFI	A	赤褐	100	赤彩
3	甕				BG	A	青灰		

を多量に含む暗黄褐色土で、人為的な埋め戻しと考えられる。土壌の北東隅から2の坏の中に1の椀が重なった状態で出土した。その性格については埋葬施設の蓋然性が高いものと考えられる。なおFA降下との先後関係は、切り合いでは確認できなかった。おそらく、追葬段階の所産と考えられる。

遺物は、溝内土壌から出土した土師器以外には、周溝覆土から少量の土師器・須恵器片が出土しているだけで、埴輪片の出土はほとんどなかった。

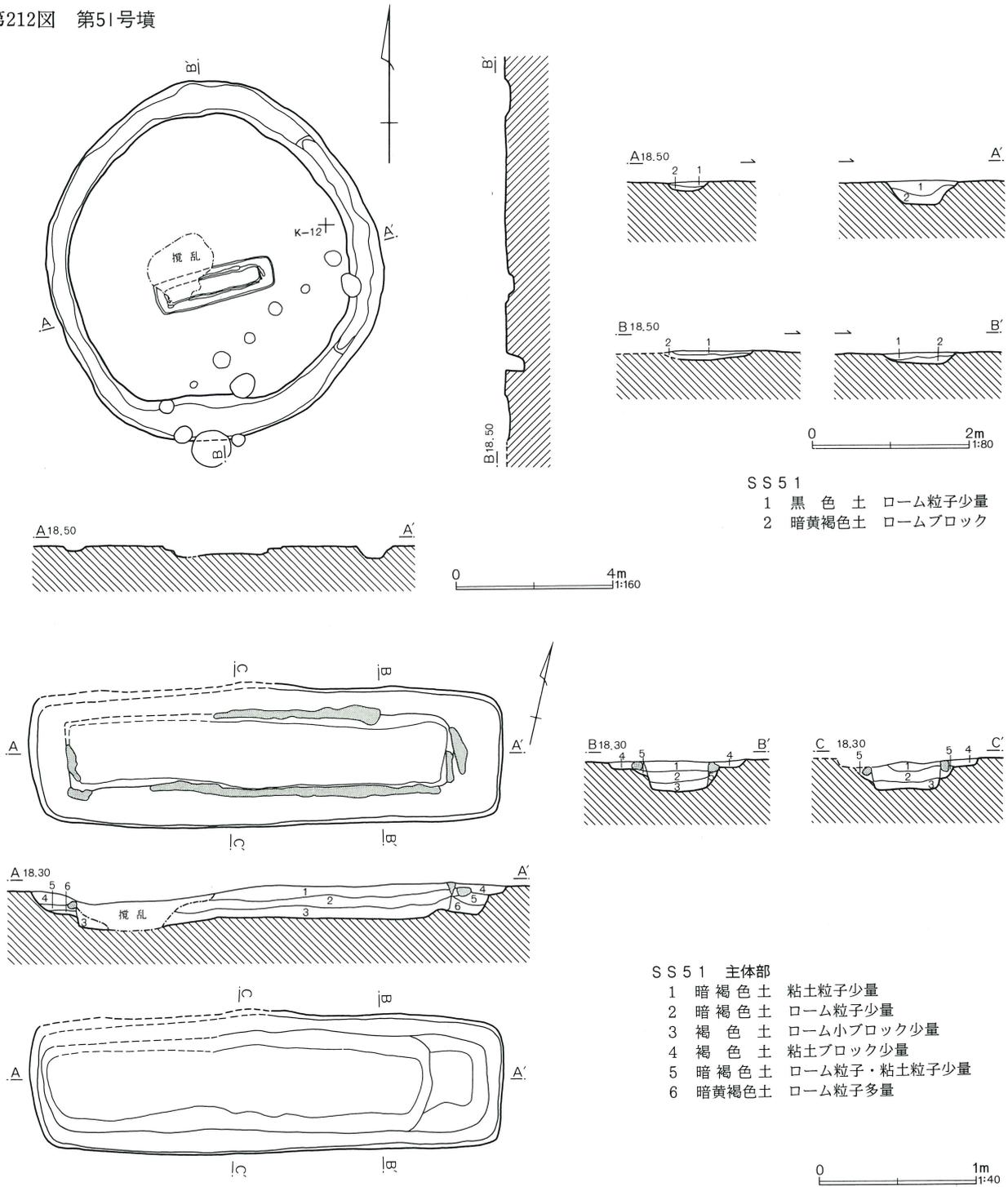
第211図1・2は周溝内土壌から出土した完形の土師器椀と坏である。1は器肉の厚い底部から内湾して

立ち上がり、くの字状に外反する口縁部に移行する。体部外面に部分的な赤彩が見られる。2は模倣坏で、口縁部の外反が大きく、底部の器肉が厚いのが特徴である。内外面に赤彩を施す。両者とも胎土中に片岩粒の混入が顕著である。

3は須恵器甕の胴部の破片である。周溝覆土の上層から出土した。外面には擬格子状の叩きを施し、内面には目の細かい同心円文の当具痕を残す。

築造時期については周溝覆土中にFAの堆積が確認されたことから、FA降下以前の築造であることが判明した。出土遺物は、溝内土壌に副葬されていた土

第212図 第51号墳



師器の椀と環が存在するだけで、追葬に伴う資料と考えられる。

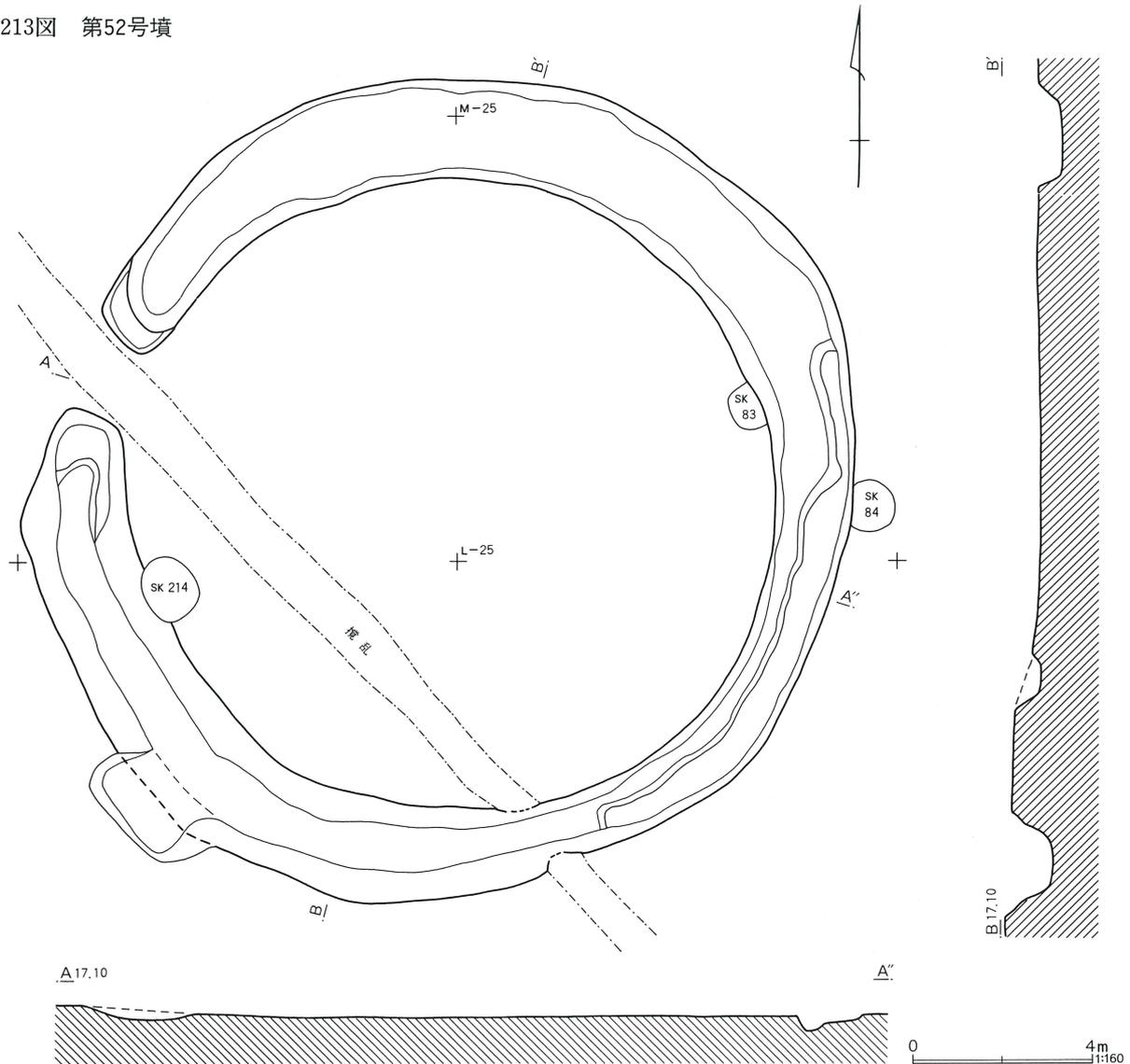
第51号墳 (第212図)

調査区南側のK-12・13グリッドに位置し、今回の調査では最も南側に築造されていた。周囲の古墳の分布はやや稀薄で、北東側に位置する第48号墳でも約21

mの距離がある。周溝内径7.28m、周溝外径9.28mを測る小規模な円墳で、今回の調査では唯一内部主体が検出された。

墳丘部は北側にやや張り出した円形を呈し、やや南に片寄った位置に東西方向に主軸を向けた木棺直葬と推定される埋葬施設が検出された。

第213図 第52号墳



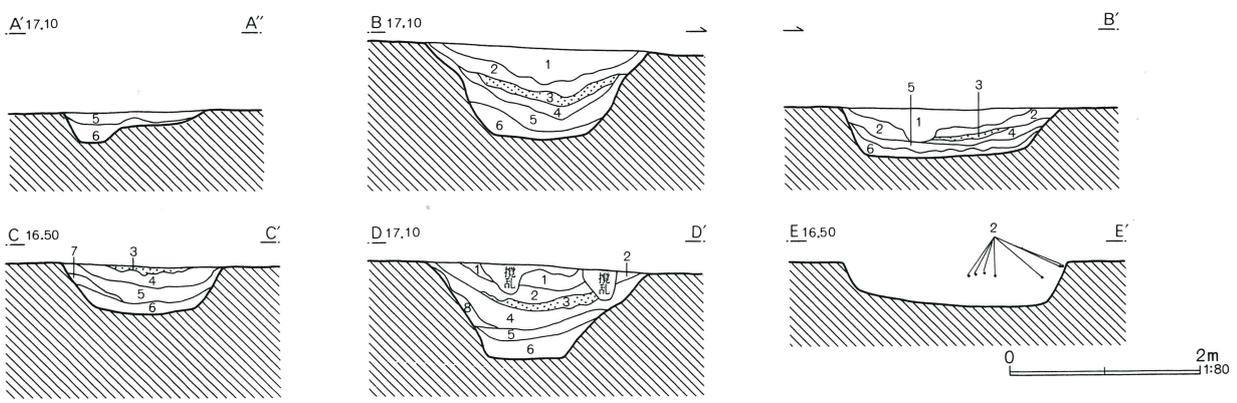
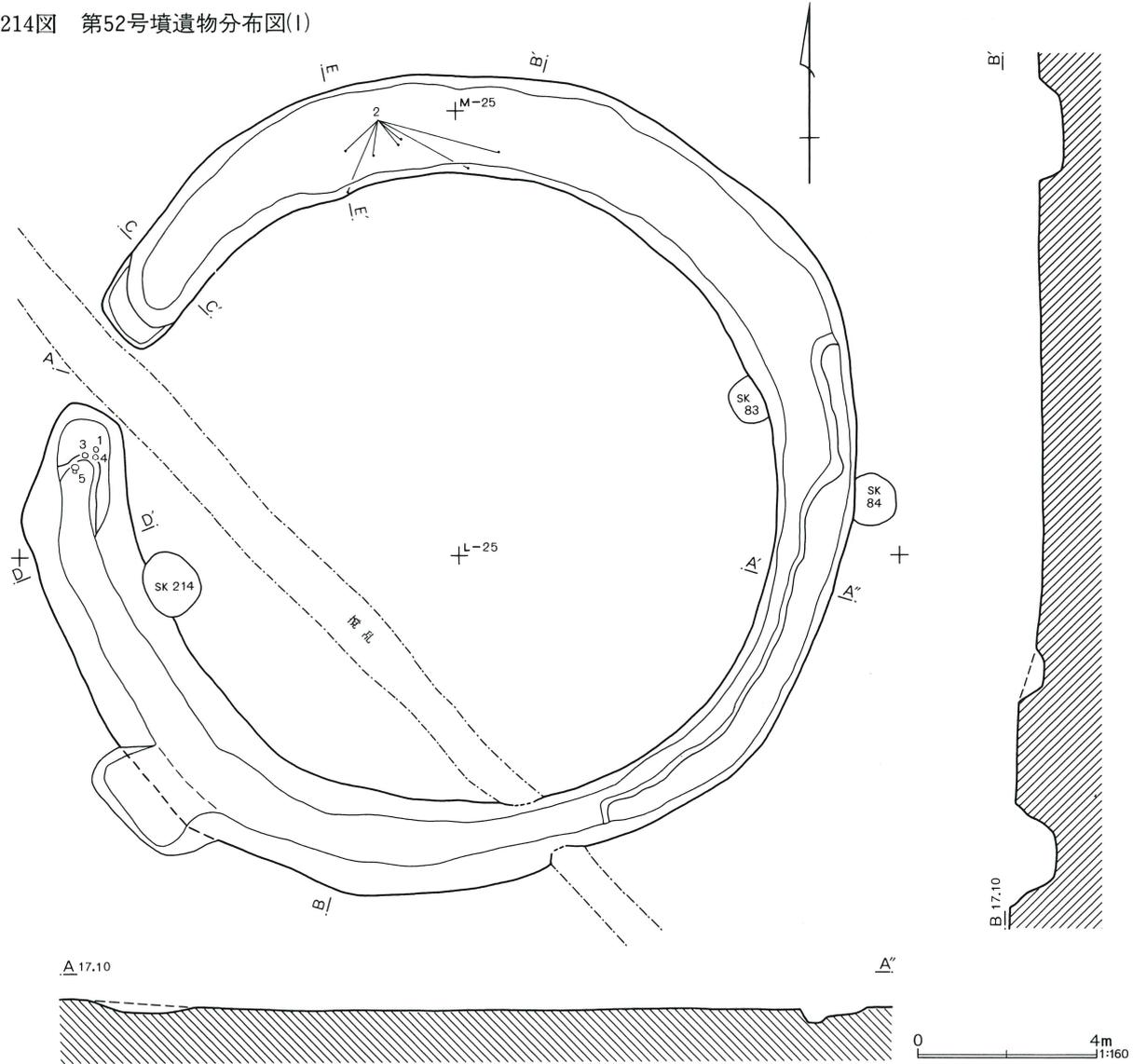
内部主体は西側の一部を後世の攪乱によって壊されていたが、その全容を把握することができた。内部主体が遺存した大きな原因として、墳丘盛土の大部分が周溝掘削土によっていたため盛土量に限界があり、築造当初の墳丘の高さが極めて低く、そのため旧地表面から掘り込まれた内部主体が完全に削平されずに残ったものと考えられる。

内部主体の構造は、長軸3.06m、短軸0.91m、深さ0.1mの長方形の掘り方を穿ち、その底面の中央を長軸2.5m、短軸0.47m、深さ0.2mの平面長方形に掘りくぼめて、遺骸を納める部分を作り出していた。さらに、上面のみに灰白色粘土を薄く周囲に貼っていた。壁面は直に立ち上がっているが、土層断面の観察では

明確な木棺等の痕跡を確認することはできなかった。断面形が箱形を呈することから考えると、組み合せ式の木棺を内蔵していた可能性が強いが、釘、鏝等の遺物がまったく存在していないことから本格的な木棺を想定することは難しい。おそらく、簡略化した組み合せ式の木棺を使ったか、あるいは布などで遺骸をくるんで埋葬し、上部を粘土で被覆するような簡単な構造であったと想定される。内部主体の主軸方向はN-85°-Wを示し、埋葬頭位については副葬品がまったく検出されなかったため明確でない。

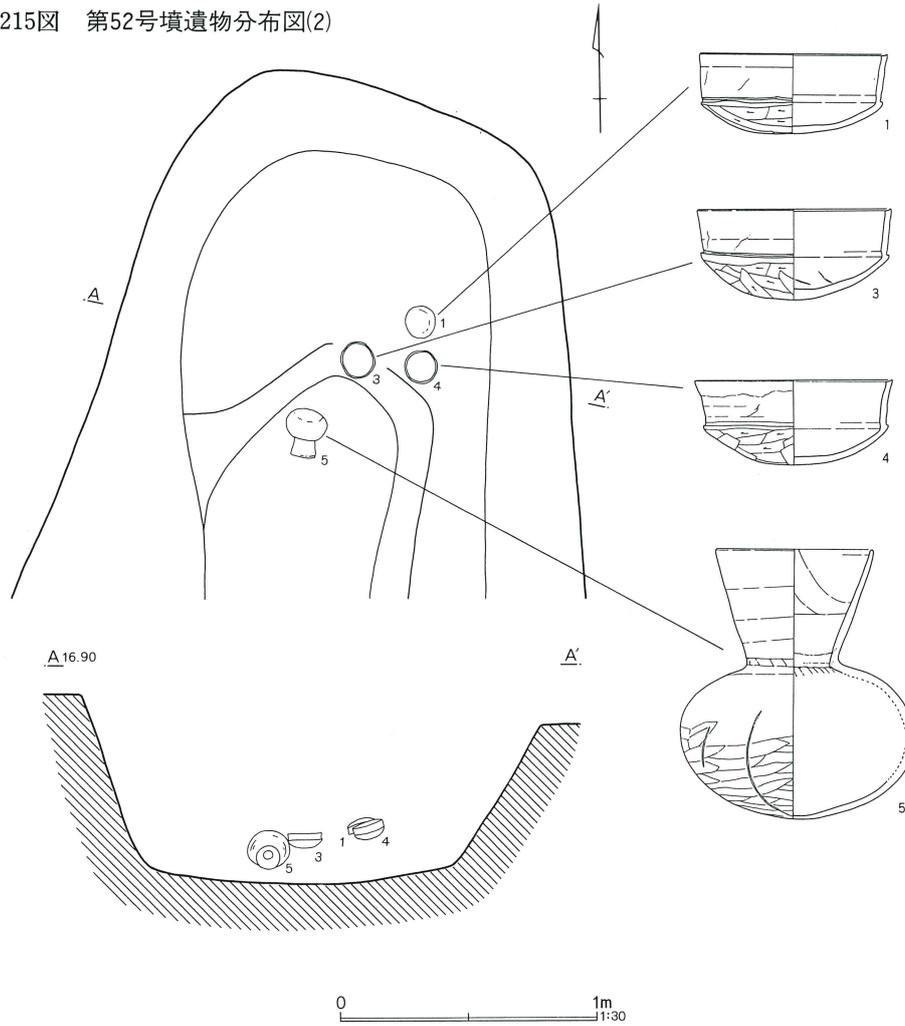
周溝はブリッジをもたない全周するタイプである。全体に幅が狭く、浅く掘り込まれており、周溝幅1.12~0.56m、深さ0.32mを測る。底面は概ね平坦で

第214図 第52号墳遺物分布図(1)



- SS 5 2
- | | | | |
|---------|------------------|---------|-----------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 5 暗黄褐色土 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子少量 | 6 暗黄褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量 |
| 3 暗灰褐色土 | F A小ブロック・ロームブロック | 7 暗黄褐色土 | ロームブロック・ローム粒子少量 |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒子多量 | 8 暗黄褐色土 | ロームブロック多量 |

第215図 第52号墳遺物分布図(2)



あるが、東側は一段深くなっていた。

遺物は周溝覆土中からほとんど出土していない。

第52号墳 (第213~220図)

調査区中央東寄りのK・L-24・25グリッドに位置し、北西側に第37号墳が2 mほど離れて近接する。西に向くブリッジをもつ比較的大型の円墳である。規模は周溝内径15.1m、周溝外径19.36mを測る。

墳丘の平面形態は比較的形の整った円形を呈する。墳丘部の攪乱を境に北側の確認面が一段深く削平されているため、周溝の掘り込みが全体に浅くなっていた。東側の周溝部分でやや幅を狭め、墳丘裾を取り巻くように底面を一段深く掘り込んでいた。周溝は幅2.64~1.36m、深さ1.08mを測り、断面形は逆台形を呈する。ブリッジは緩やかにハの字に開き、主軸方向はN-70°-Wを指す。ブリッジの両脇は周溝の掘り込み

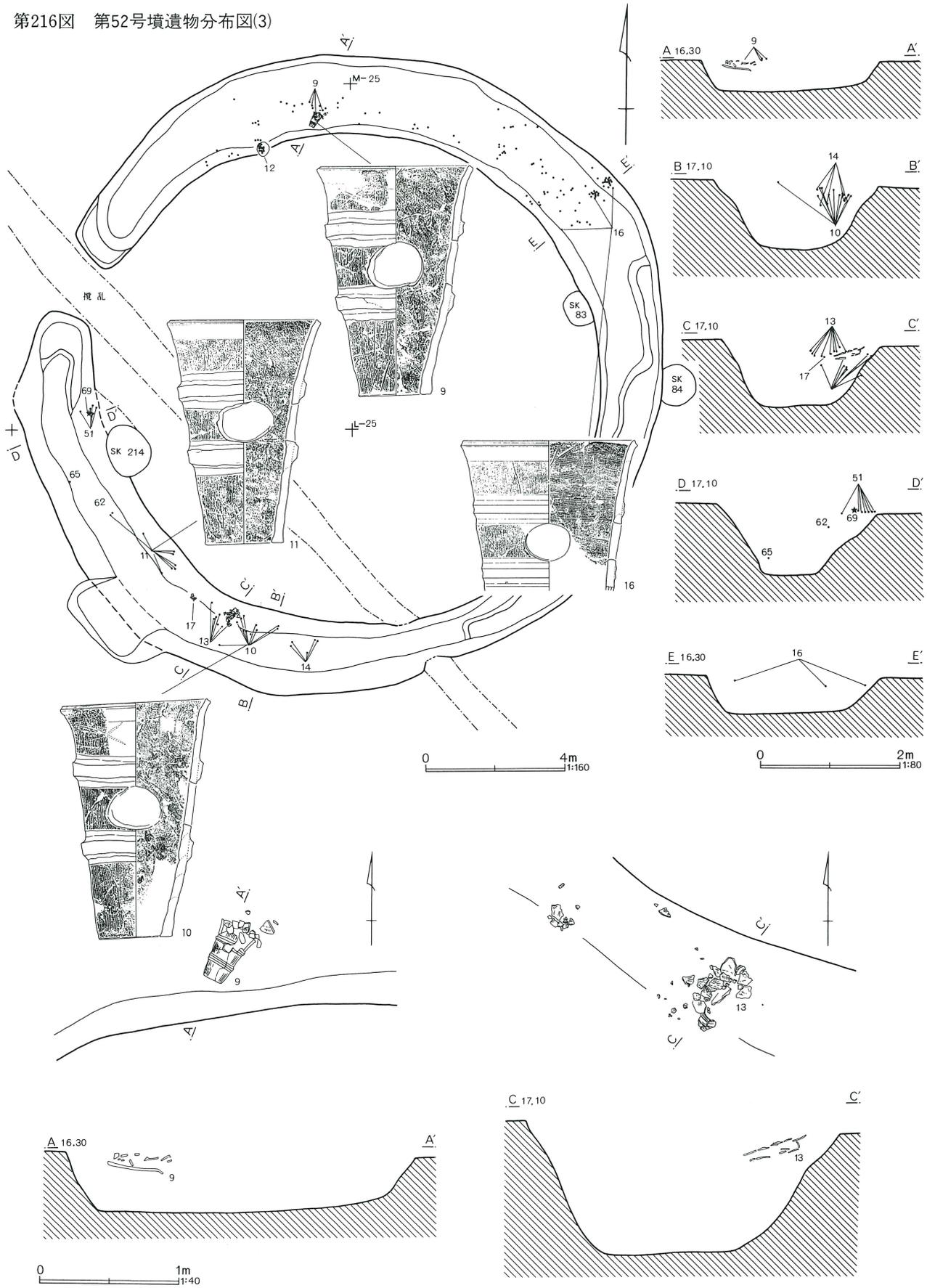
が浅く、底面にステップ状の造作が認められた。

周溝覆土は基本的には6層に区分される。最下層の第6層はロームブロックを多量に含む暗黄褐色土で、この層からは遺物はほとんど出土していない。底面から20~50cmほどの高さには、厚さ最大で10cmほどのFA小ブロックを混入した暗灰褐色土(第3層)のレンズ状堆積が確認された。

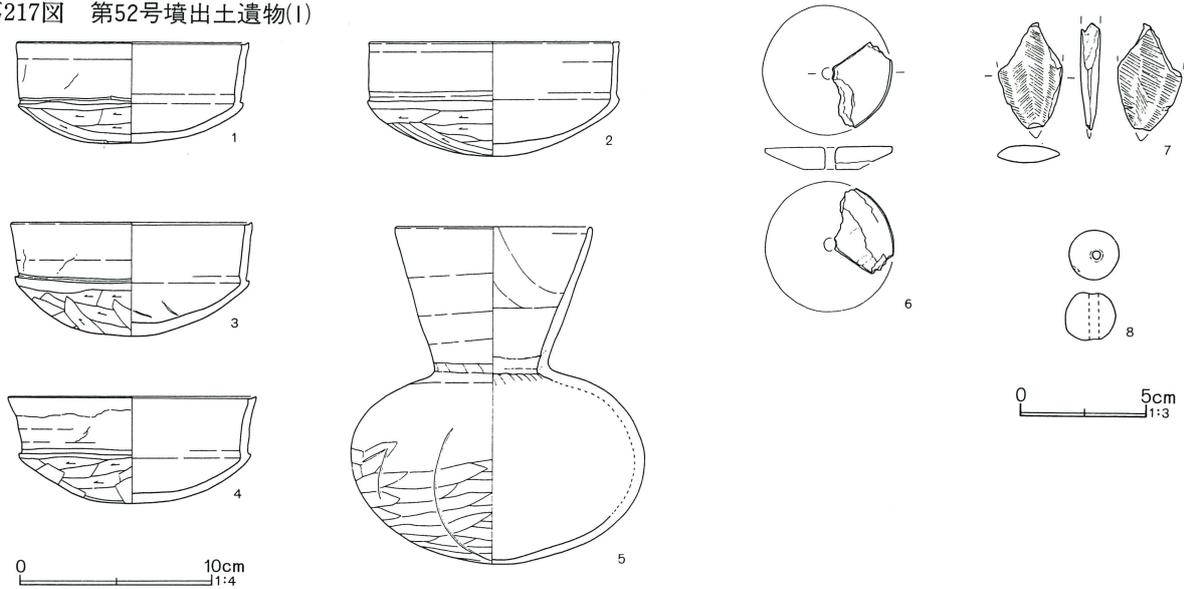
遺物は周溝内から土師器坏、直口壺、滑石製紡錘車、剣形模造品、土玉、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物、馬)等が出土した。

ブリッジ右脇の周溝底面から土師器坏3点と直口壺1点が原位置で出土した。坏は三角形に並べられ、1は伏せた状態で、3・4は口縁を上に向けた状態で置かれていた。また5の直口壺は坏の南側から横倒りの状態で出土した。

第216图 第52号墳遺物分布图(3)



第217図 第52号墳出土遺物(1)



第52号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.3	5.3		B E F	A	橙褐	100	
2	坏	13.2	6.0		E F	A	橙褐	60	
3	坏	12.6	6.0		B E F	A	橙褐	100	
4	坏	13.0	5.6		B E F	A	橙褐	100	
5	直口壺	10.0	17.07		A B F	A	橙褐	100	
6	紡錘車						黄褐		外径(5.1) 孔径(0.5) 厚さ0.6cm
7	剣形模造品						濃緑		長さ(4.2) 幅2.6 厚さ0.7cm
8	土玉				B	A	淡橙		外径1.9 孔径0.3 厚さ1.9cm

埴輪はすべて周溝に流れ込んだ状態で出土しており、原位置をとどめるものはなかった。分布状況は周溝の南東側にやや少ないものの、ほぼ満遍なく出土している。特に北側と南側の2か所に完形に近い円筒埴輪のまとまりが見られた。

円筒埴輪は、全体の形の判るものは2条突帯3段構成が主体を占め、大きく4類に分類される。

A類(9・12・14・17・20・21・51)は、幅広い台形の突帯が特徴で、赤褐色を基調とする。口径22~24cm、底径10.7~11.6cm、器高34~35.5cmを測る。

B類(16・22・35~40・55~57)は、突帯が極めて低いM字形で、底部調整(外面板押圧、内面篋削り)を施すものである。色調は暗赤褐色を基調とする。16は口径25.7cmを測り、3条突帯の可能性もある。全体に新しい様相を示し、混入の可能性が強い。

C類(15・19・25・34・54・58)は、突帯形状等はA類に類似し、橙褐色を主体とする。54は底径14.1cm

を測り、底部下端に板目の圧痕が観察される。

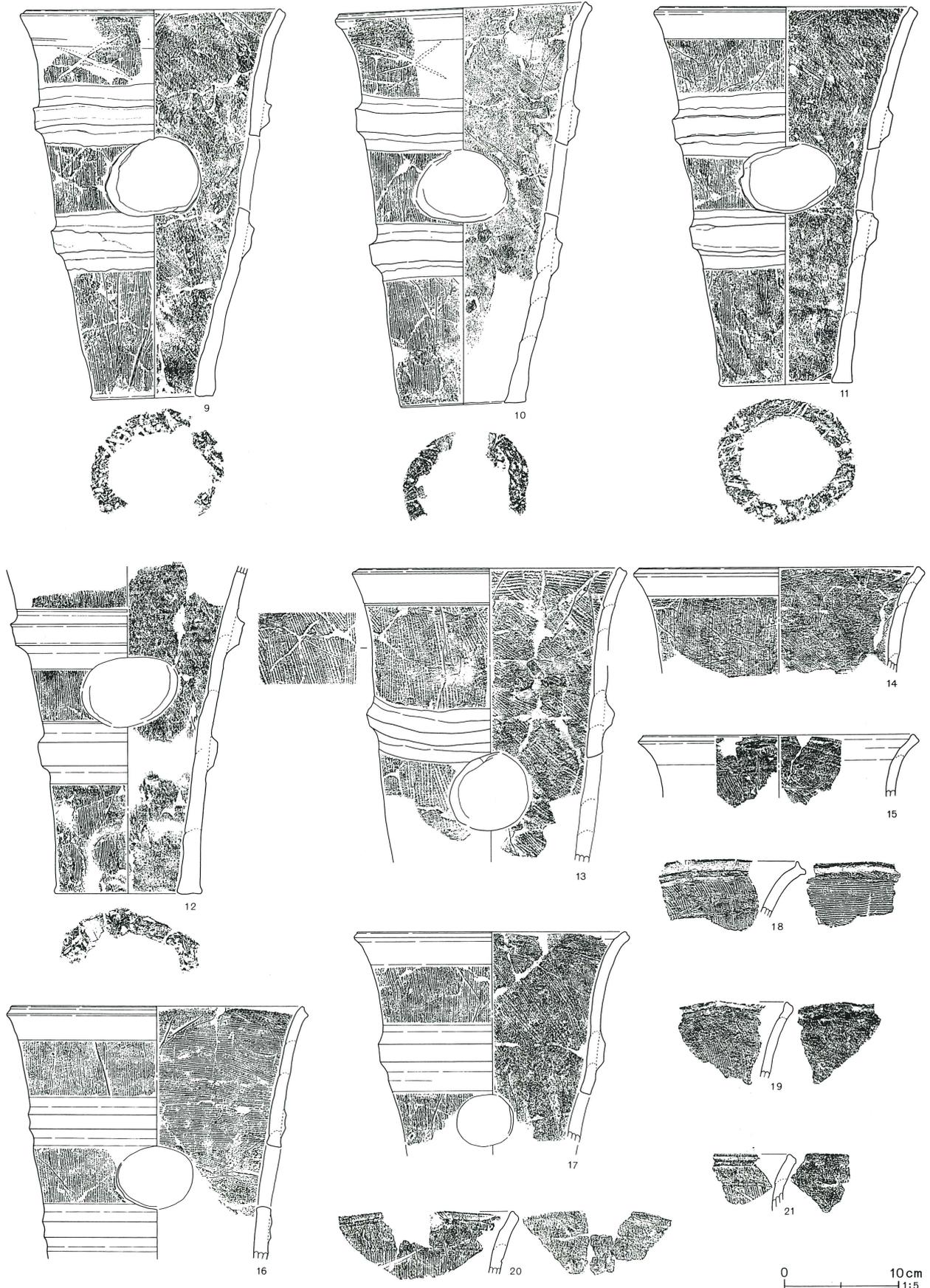
D類(13・24・30・33・41・52)は淡褐色を基調とし、全体に柔らかい焼き上がりである。13は口径23.2cm、52は底径12.4cmを測り、A類に比べ一回り大きい。

ヘラ記号(9・10・13・20・21・41~45・47~50)は、いずれも×印、ないしはその一部と思われるものである。その施文位置は、A類の9・10では透孔の真上より少し左にずれた口縁部外面に描かれ、D類の13では透孔の真上から左へ約90°ずらした口縁部外面に描かれていた。

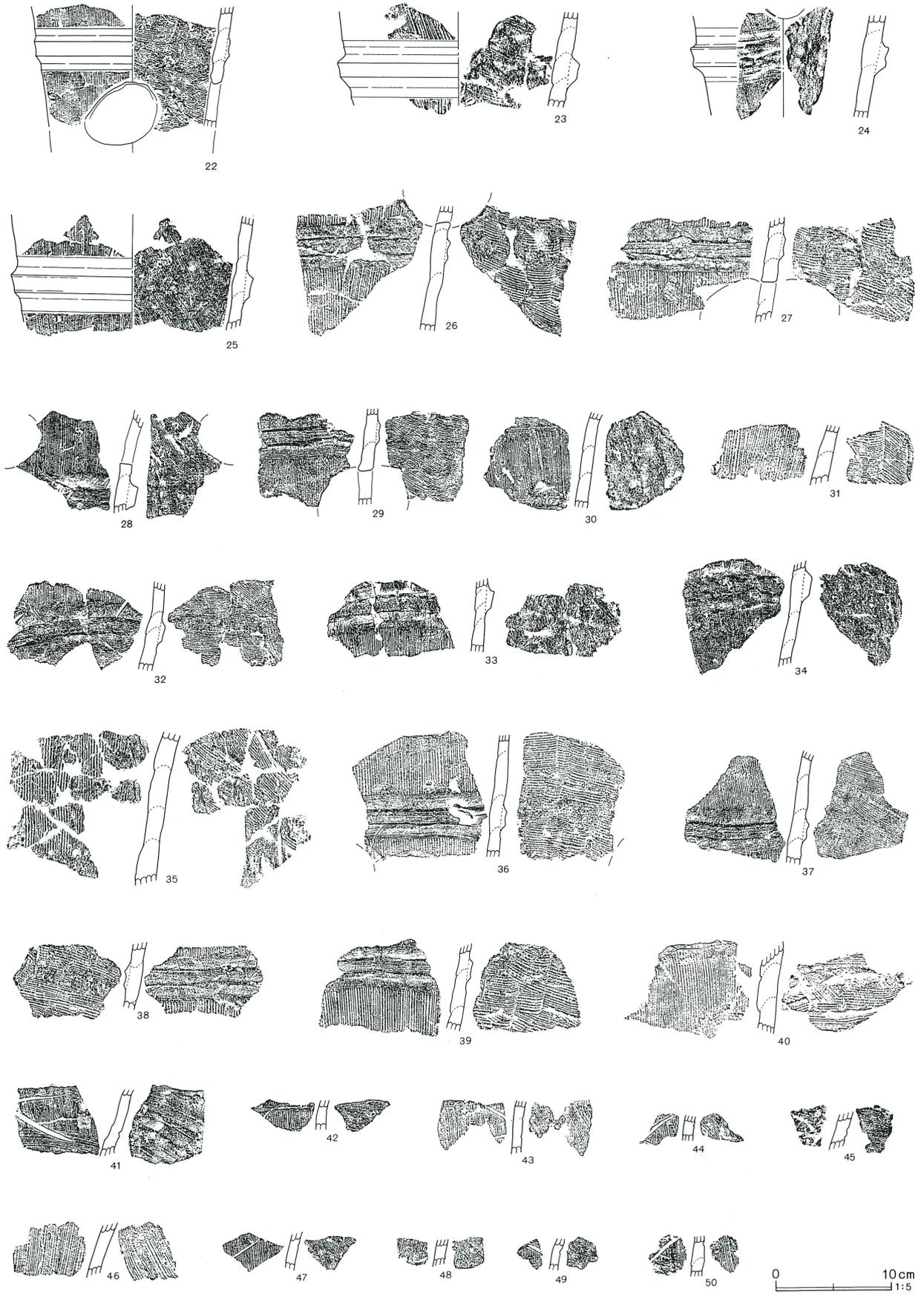
53は朝顔形埴輪の口縁部の破片である。口径約30cmを測り、外面に赤彩を施す。

形象埴輪は、ブリッジの右側から人物・馬の破片が少量出土した。また墳丘部に重複する第214号土壌の覆土中からも、この古墳に伴うと考えられる形象埴輪が出土しており、ブリッジの右側を中心に形象埴輪が

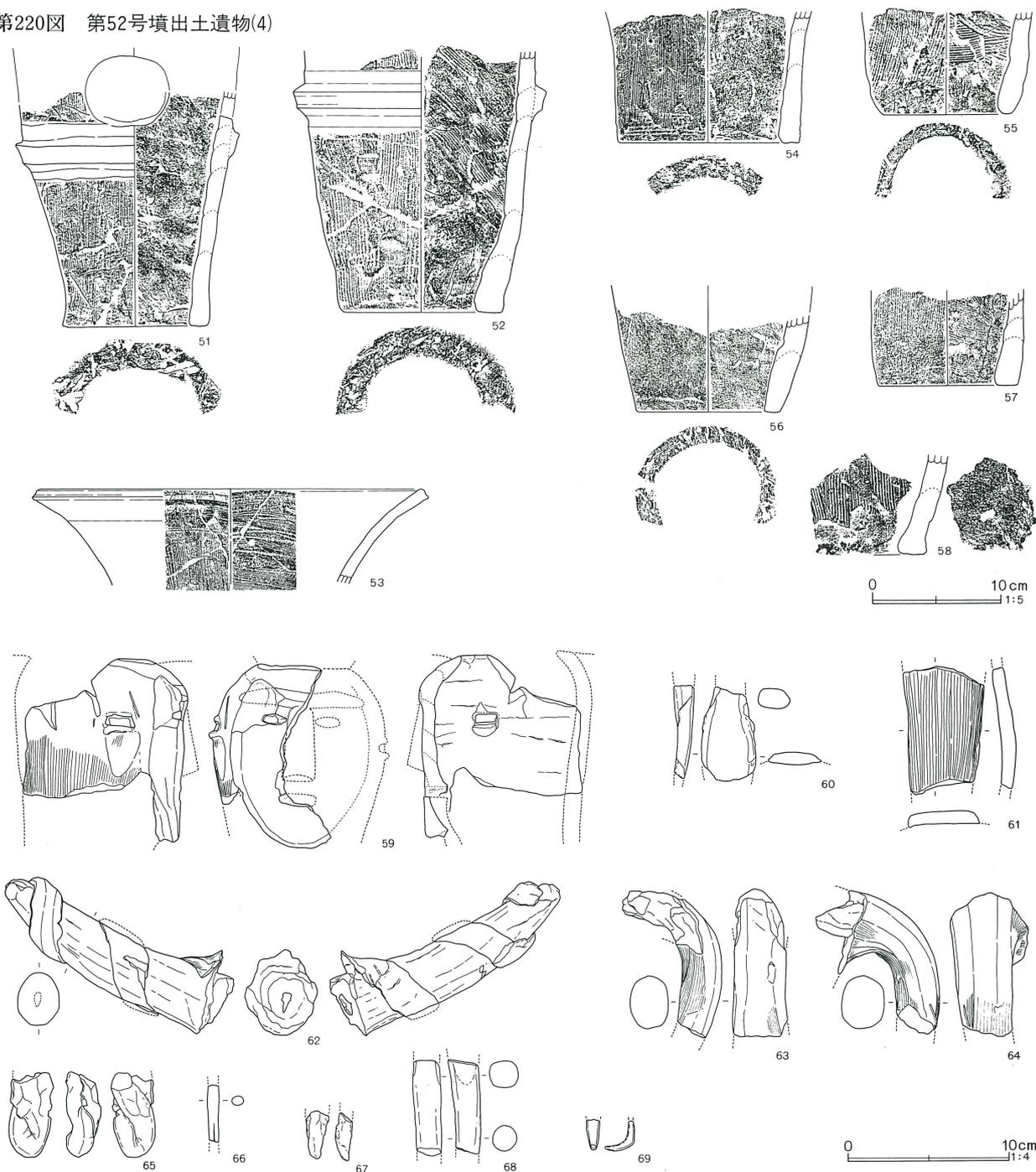
第218図 第52号墳出土遺物(2)



第219图 第52号墳出土遺物(3)



第220図 第52号墳出土遺物(4)



樹立されていたものと想定される。

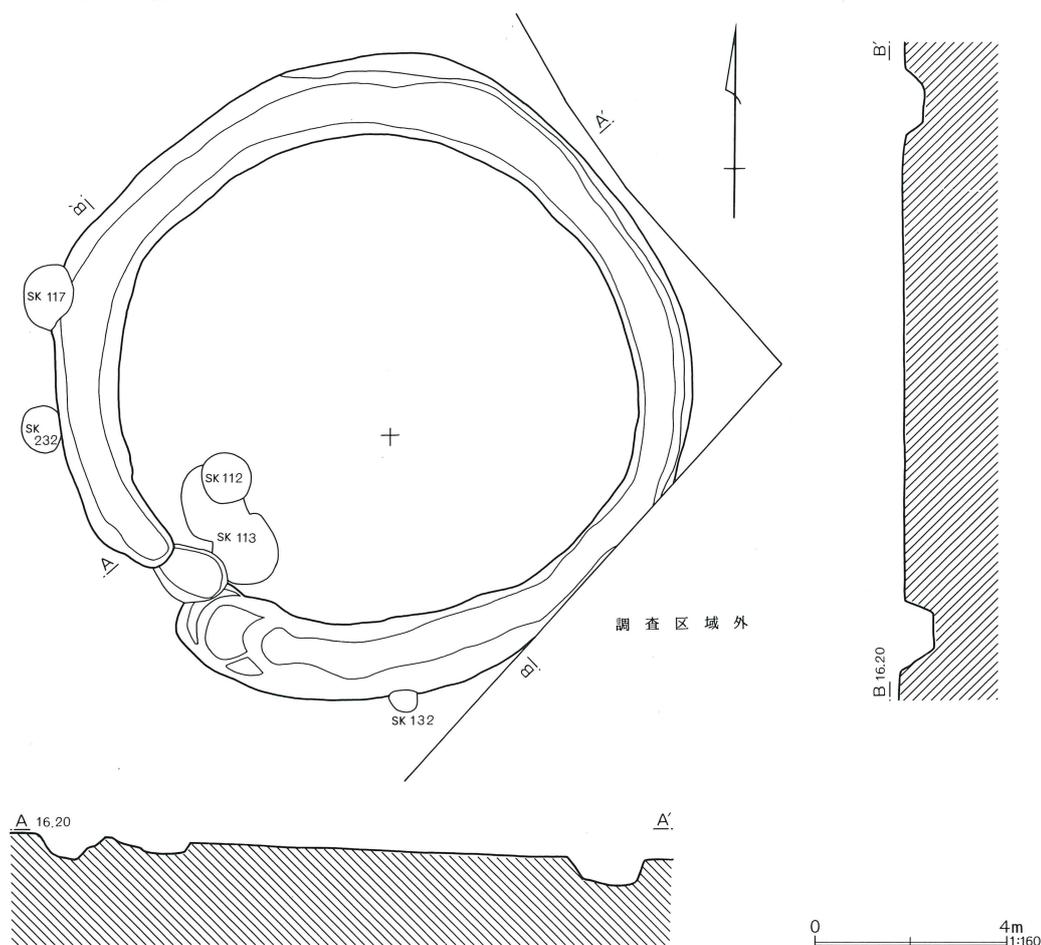
第220図59は女子人物埴輪の頭部の破片である。後頭部よりも顔面の輪郭が小さい特徴を示す。第214号土壙出土。63・64は第214号土壙から出土した人物埴輪の腕の破片で、左右の区別は判然としない。胴部に挿入するためのホヅをもち、中実作りである。59の女子と同一個体と推定される。60は人物埴輪の右の掌部分であろう。61は男子人物埴輪の後方に垂らした束髪が

剥離したものと考えられる。68は棒状の下げ美豆良である。69は頸飾りに付けられた勾玉の破片であろう。

62は馬の尻尾の部分で、尾に巻き付けられた革帯を粘土紐で表現している。成形は中空作りで、細く潰れた孔が基部から先端まで貫通している。65は粘土紐を撚り合わせたものである。本体から剥離しており付属部位は明確でないが、馬形埴輪の一部であろう。

66・67は不明形象埴輪である。66は直径0.8cmの棒状

第221図 第53号墳



を呈する。67は棒状に形作られた部品の基部である。焼成が悪く、黒く変色していることから、円孔に挿入されていたものと推定される。

第53号墳（第221～223図）

調査区中央部東寄りのK・L-27・28グリッドに位置する。周囲には北側に第31・32号墳、南側に第1号墳、東側に第1次調査で検出された第3号墳が隣接する。南西を向くブリッジをもつ中規模の円墳である。規模は周溝内径11.12m、周溝外径13.92mを測る。地形的には埋没谷に面する緩斜面地に立地し、標高15.5mである。墳丘部分はブリッジ付近を中心に多数の円形土壙が重複していた。

墳丘平面形態は比較的形の整った円形を呈する。周溝は南東側が調査区域外にかかるため一部検出できなかったが、ほぼ均一に巡っており、幅1.87～0.96m、

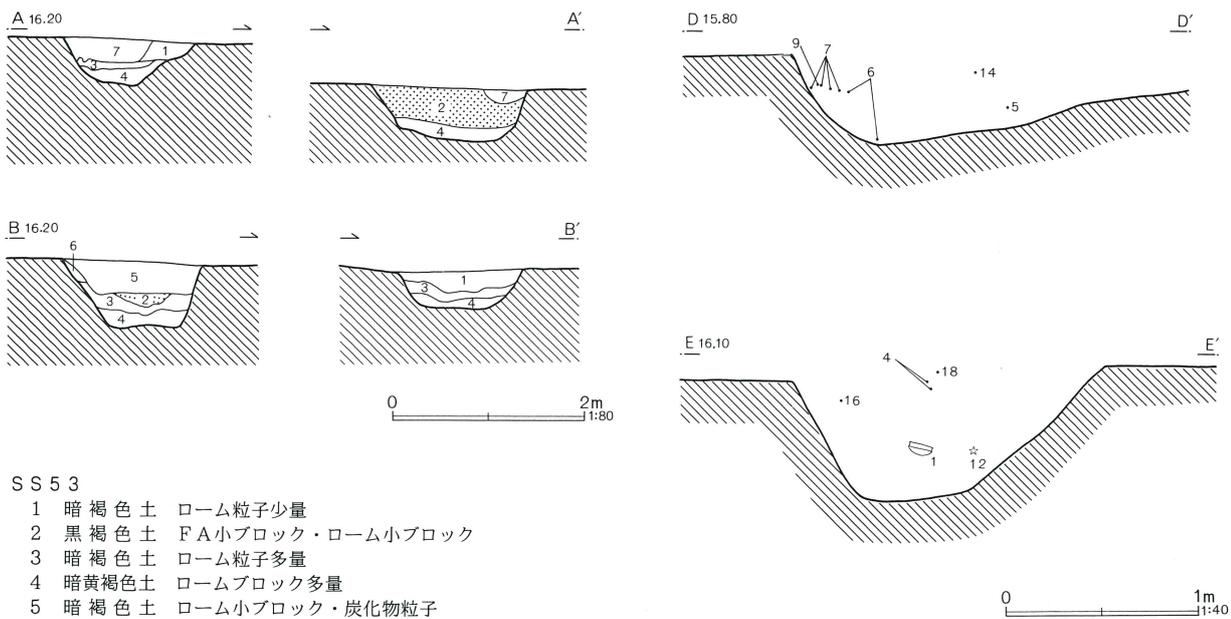
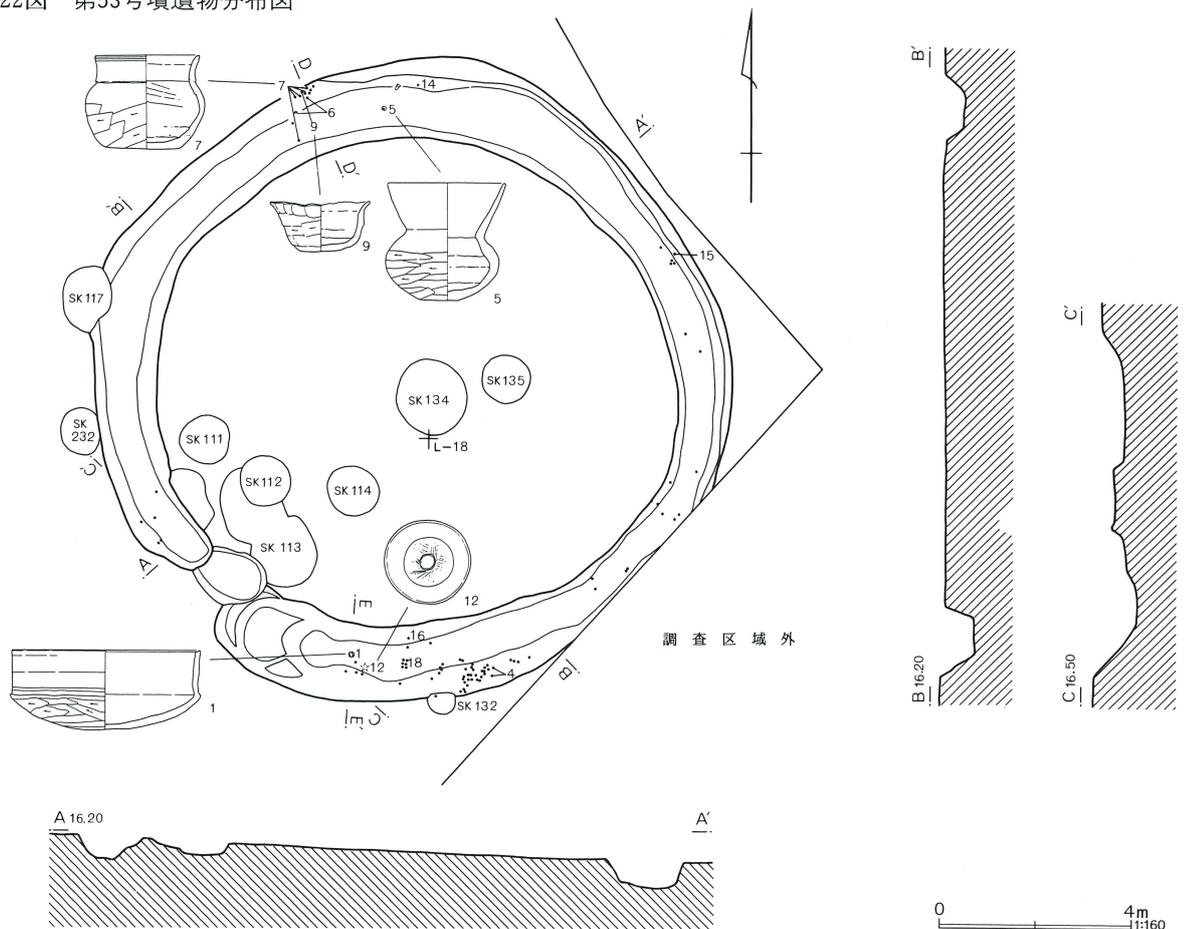
深さ0.76mを測り、断面逆台形を呈する。ブリッジは中・近世の土壙と重複しているため本来の形態は明確でない。主軸方向は概ねN-134°-Wを指し、ブリッジ右脇の周溝底面には階段状の掘り込みが作り出されていた。

周溝覆土は基本的に4層に区分される。最下層の第4層は多量のロームブロックを含む暗黄褐色土で、その上にローム粒子を多量に含む暗褐色土の第3層が堆積し、その上層にFA小ブロックを含む黒褐色土の第2層がレンズ状に堆積していた。

遺物は、ブリッジの右側と北側周溝の2か所に集中して出土した。

ブリッジの右側からは1の土師器坏が周溝底面からやや浮いた位置に口縁部を上にした状態で置かれていた。その南側の40cmほど離れたところからは、12の紡

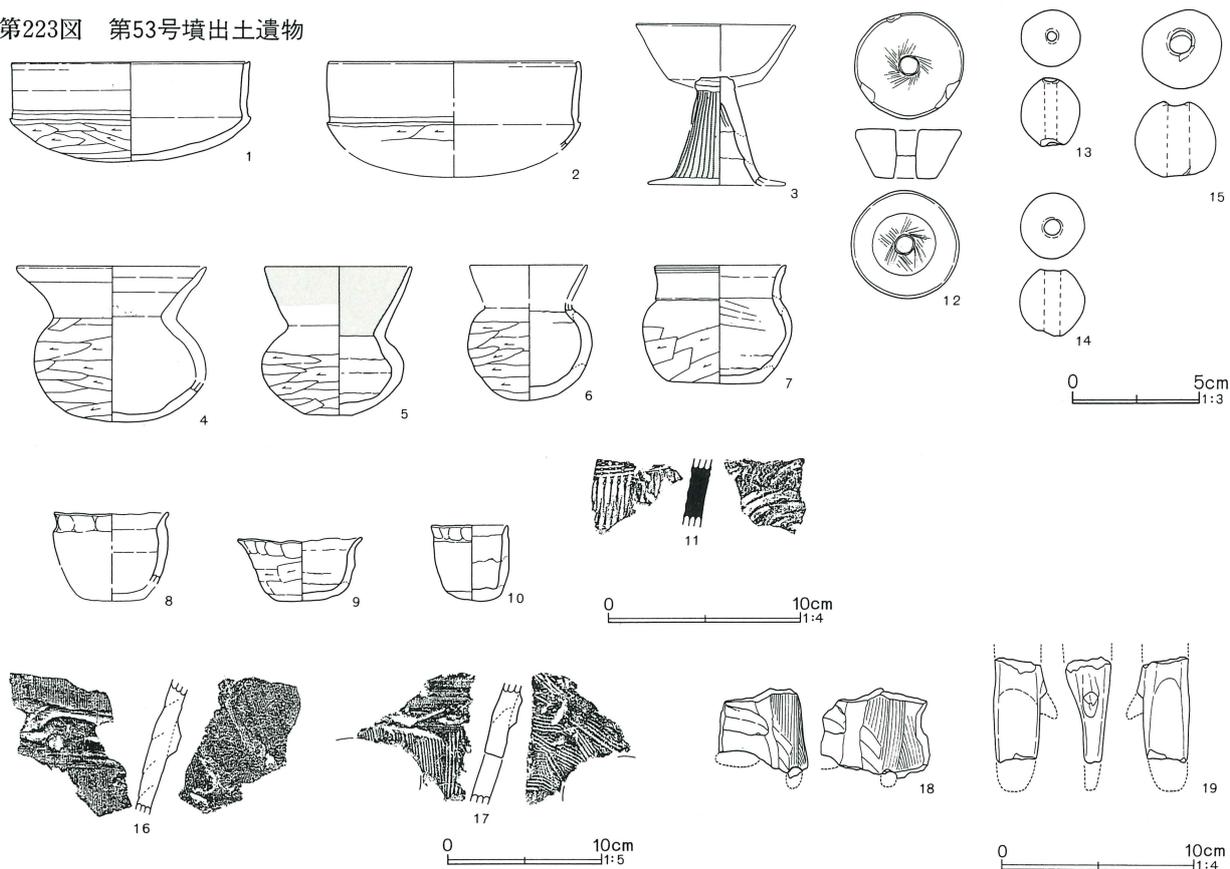
第222図 第53号墳遺物分布図



SS 5 3

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 黒褐色土 FA小ブロック・ローム小ブロック
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック多量
- 5 暗褐色土 ローム小ブロック・炭化物粒子
- 6 暗褐色土 ローム小ブロック少量
- 7 灰褐色土 浅間A粒子・炭化物粒子

第223図 第53号墳出土遺物



第53号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.4	5.3		B E F	A	赤褐	90	
2	坏	(13.1)	(4.7)		B E F	A	橙褐	30	
3	高坏		(5.7)		B E F	B	淡褐	60	赤彩
4	埴	9.9	8.2		B F	A	赤褐	70	
5	埴	7.7	7.8		B E F	A	淡褐	70	赤彩
6	埴		(5.0)		B F	A	灰褐	80	
7	埴	6.8	6.3	5.0	B F	B	淡褐	80	
8	ミニチュア	4.0	4.0		B F	B	赤褐	90	
9	ミニチュア	6.4	3.3		B E	B	淡褐	90	
10	ミニチュア	6.0	3.7		B F	B	赤褐	70	
11	甕				B G	B	暗灰		
12	紡錘車						黒		外径4.3 孔径0.8 厚さ1.9cm
13	土玉				B F	A	淡褐		外径2.4 孔径0.4 厚さ2.7cm
14	土玉				B	A	淡褐		外径3.1 孔径0.9 厚さ3.0cm
15	土玉				B	A	淡褐		外径2.6 孔径0.7 厚さ2.7cm

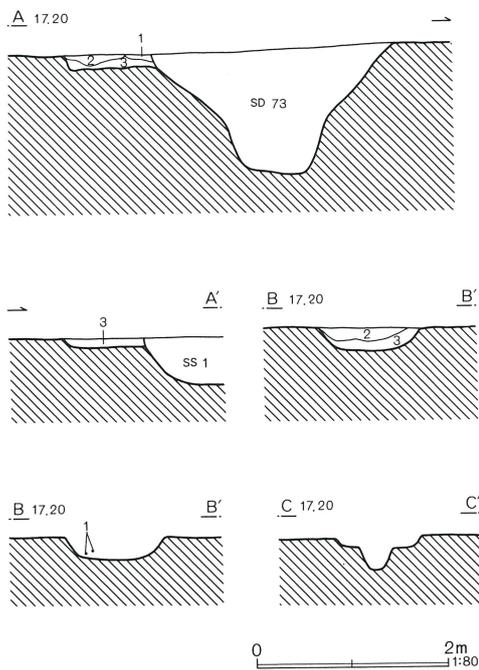
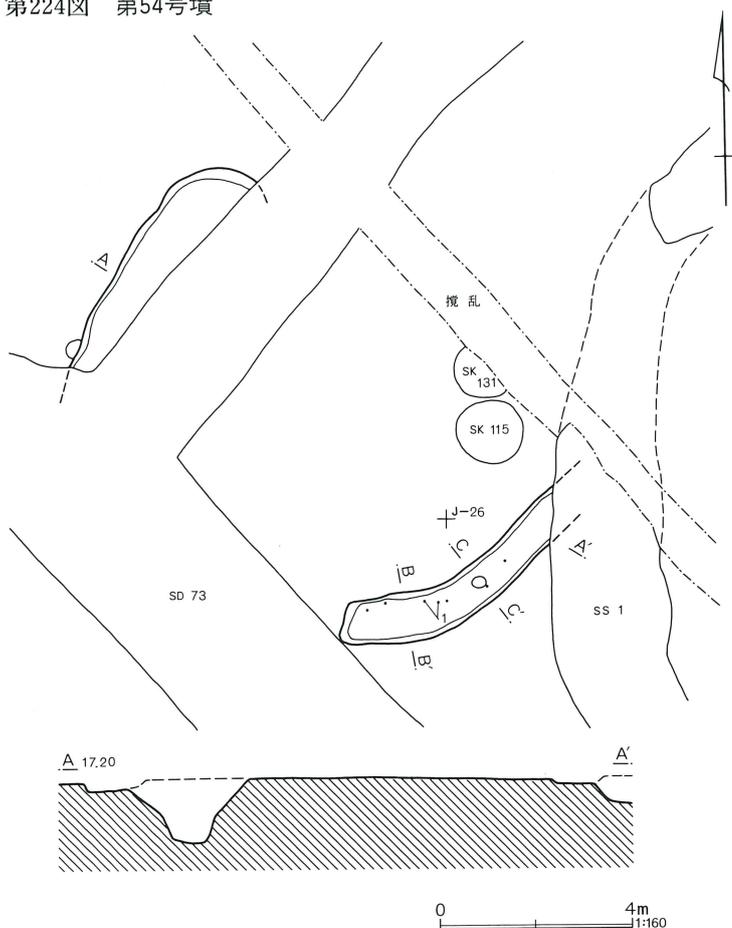
錘車が上面を上にして出土している。両者は第4層上面に置かれていたものと推定される。他に周囲から4の埴、16の円筒埴輪片、18の人物埴輪片が覆土上層から出土している。

周溝北側からは5～7の埴、9のミニチュア土器、14の土玉等が出土した。周溝外側の覆土上層に集中しており、混入と考えられる。他に東側の周溝からは15

の土玉が出土している。

形象埴輪は2点出土している。第223図18は人物埴輪の顔面部の破片である。左目と耳孔が開けられている。19は人物埴輪の左手部分の破片である。ミトン形を呈し、指先部分を欠損する。埴輪は図化したもの以外に小片しかなく、量的に少ないことからみて、埴輪の樹立を想定することは難しい。

第224図 第54号墳



SS 54

- 1 灰褐色土 浅間A粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量

第225図 第54号墳出土遺物

築造時期については、FA混入土層が周溝底面に近い位置にあり、出土した坏の形態的な特徴からFA降下直前の時期に近いものと想定される。

第54号墳 (第224・225図)

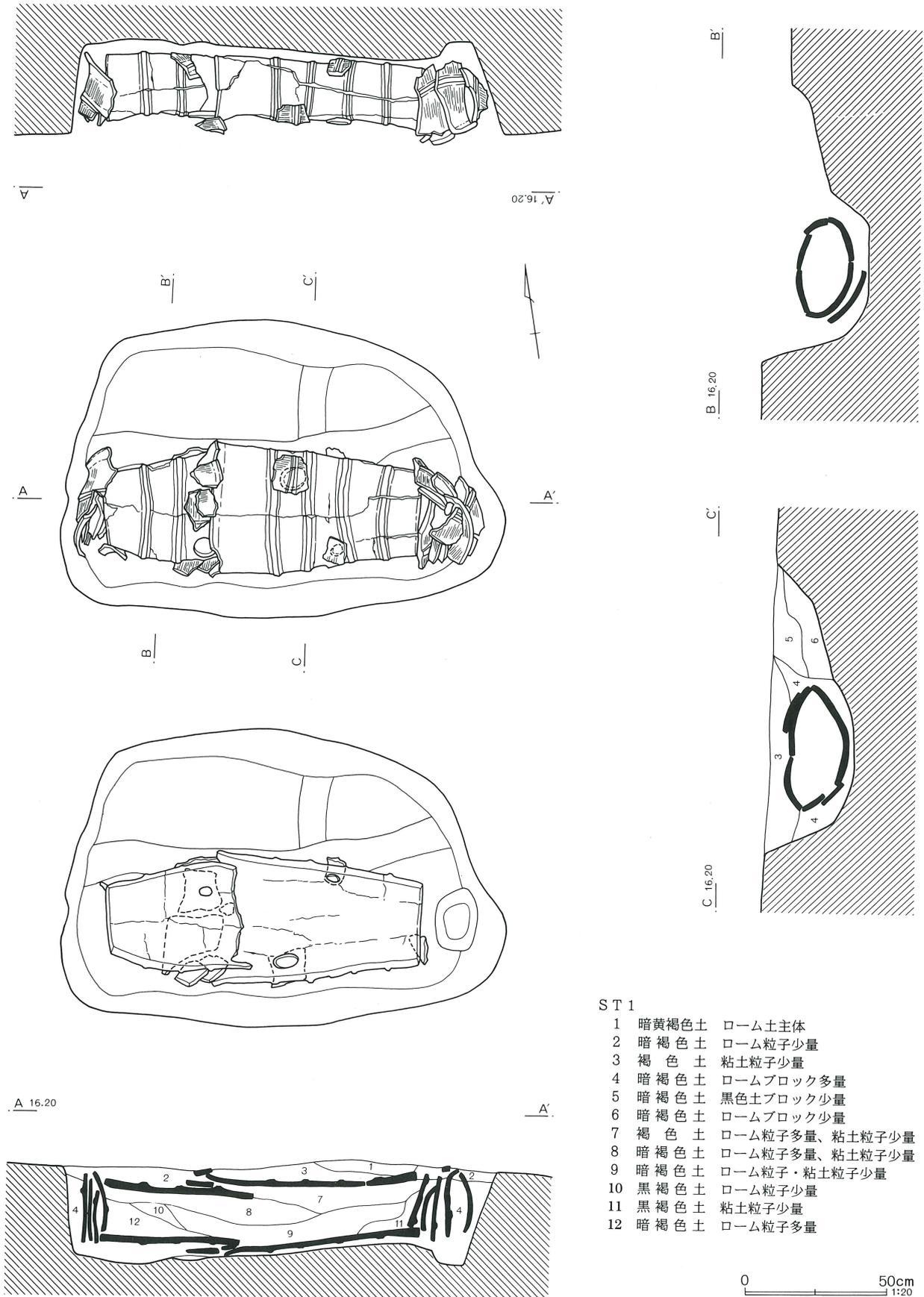
調査区中央部東寄りのI・J-25・26グリッドに位置する。第1号墳の西側に所在し、それと周溝の一部が重複し、切られていた。今回の調査では唯一、古墳との重複の見られたものである。墳丘部分は第73号溝によって大きく壊され、周溝の一部を遺存するのみであった。全容については明確でないが、周溝内径約8.4m、周溝外径約10.8mの小規模な円墳と復元される。

墳丘部は後世の攪乱によって削平され、東側と西側の周溝の一部を残す。墳丘の平面形態はやや矩形に近い。東側周溝の南端が直線的に途切れていることからこの部分がブリッジになるものと推定される。周溝幅1.10~0.78m、深さ0.28mを測り、断面箱形で、底面

は概ね平坦である。周溝覆土は大きく3層に区分される。第1層には浅間A軽石の混入が確認された。

遺物は東側周溝を中心に少量の土師器が出土したにすぎない。第225図1は高坏の坏部の小片である。復元口径18.6cmを測り、胎土には石英、白色粒子、長石、角閃石を含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。残存率10%。内外面とも粗い篋磨きを施す。時期的には和泉期に位置づけられることから、周辺の住居跡からの混入の可能性が強い。

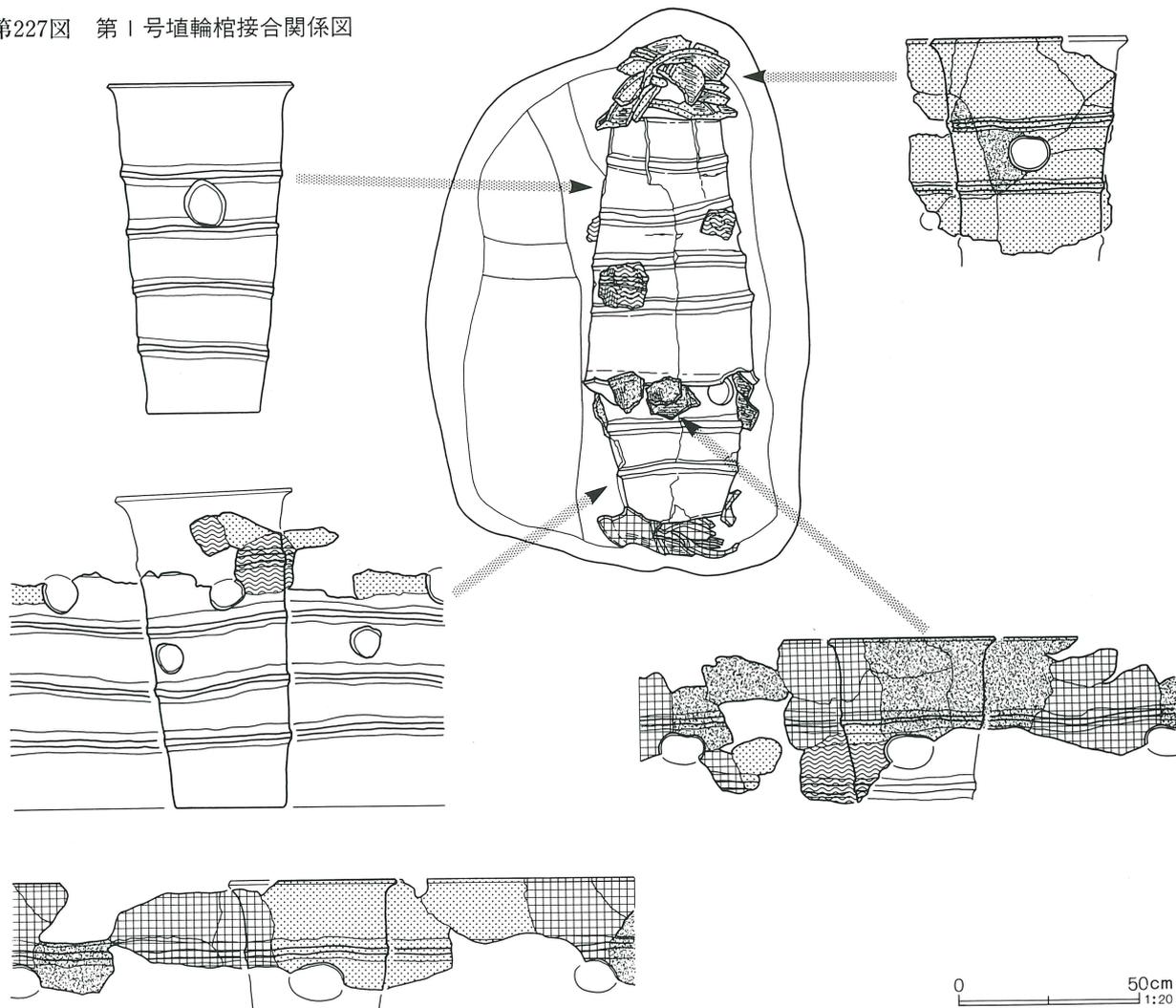
第226図 第I号埴輪棺



- ST 1
- 1 暗黄褐色土 ローム土主体
 - 2 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 3 褐色土 粘土粒子少量
 - 4 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 5 暗褐色土 黒色土ブロック少量
 - 6 暗褐色土 ロームブロック少量
 - 7 褐色土 ローム粒子多量、粘土粒子少量
 - 8 暗褐色土 ローム粒子多量、粘土粒子少量
 - 9 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子少量
 - 10 黒褐色土 ローム粒子少量
 - 11 黒褐色土 粘土粒子少量
 - 12 暗褐色土 ローム粒子多量

0 50cm
1:20

第227図 第1号埴輪棺接合関係図



築造時期については古墳に直接伴う遺物がなく不明であるが、第1号墳との切り合い関係から6世紀中葉以前の所産と推定される。

3. 埴輪棺

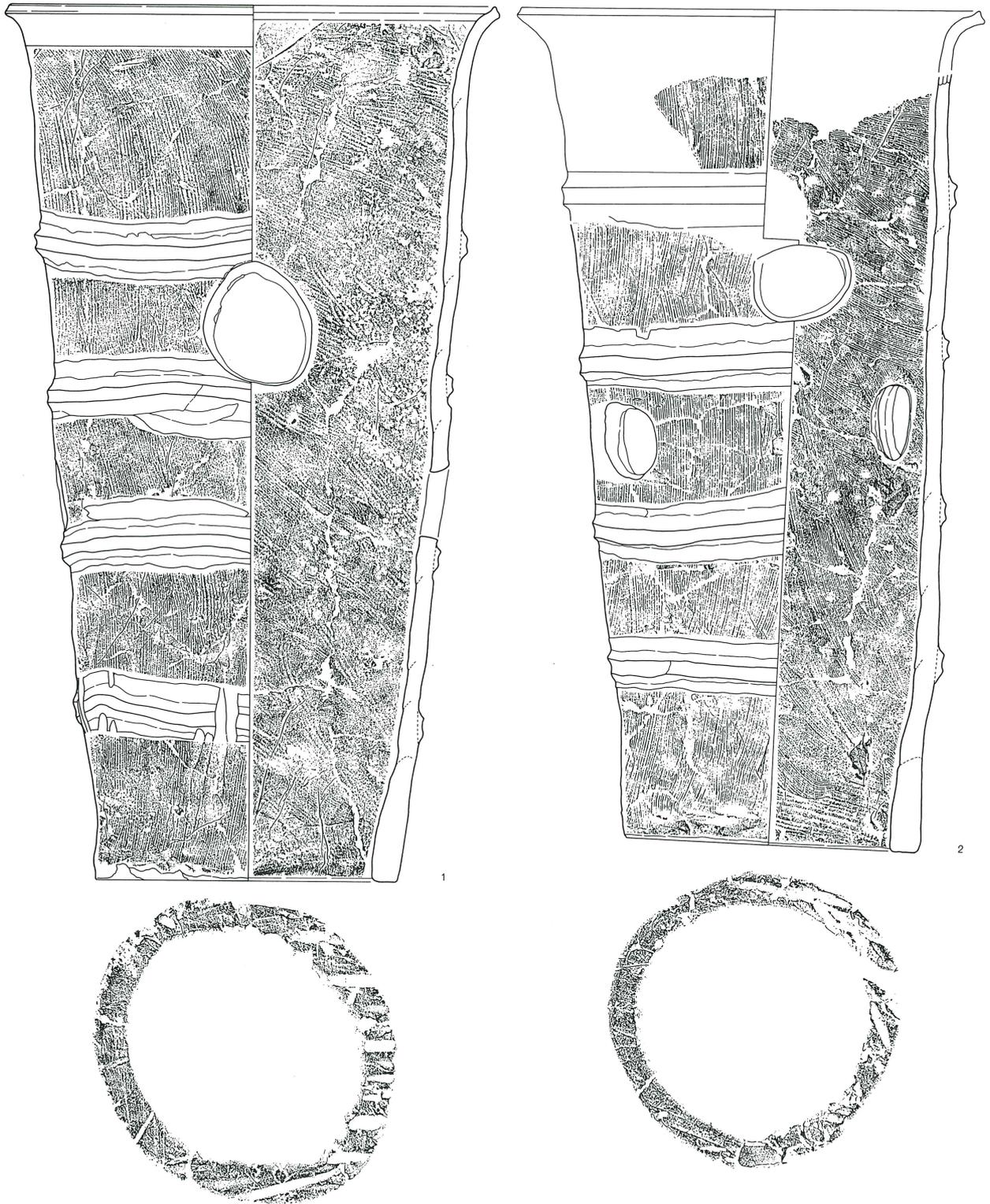
第39号墳の北側のR-20グリッドに位置し、周溝外縁から約1.7mの距離を置いて築かれていた。墓壙の平面形態は不整楕円形を呈し、底面には棺を設置する部分が一段深く掘り込まれていた。規模は長径1.57m、短径1.05m、深さは最深部で0.35mを測る。主軸方向はN-102°-Eを示す。

埴輪棺は、墓壙底面の南側を15cmほど深く掘り込んだ部分に据えられ、棺本体は4条突帯の大型円筒埴輪2個体を使用した複格式である。棺体の構造は完形の円筒埴輪1の口縁部に、別個体の円筒埴輪2の口縁部

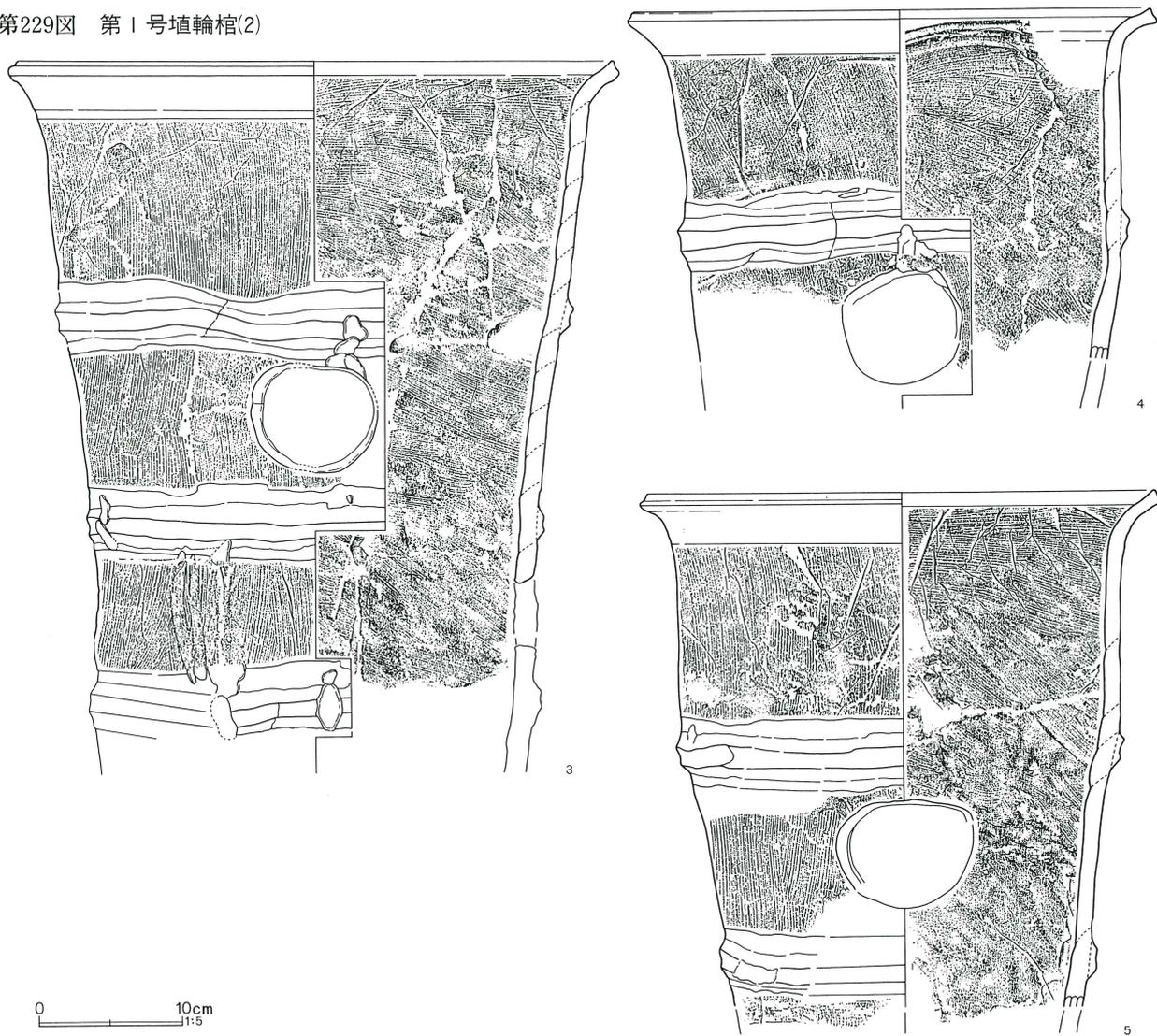
を打ち欠いて、差し込んだものである。棺体の全長は1.13mを測り、小児埋葬ないし改葬用と考えられる。また両小口、合口、透孔の各部分は別の大型円筒埴輪3個体の破片で塞がれ、灰白色粘土を用いて入念に被覆されていた。棺内には粘土・ローム粒子を含む土砂が流入し、人骨及び副葬品等は検出されなかった。

次に、各円筒埴輪の接合関係をもとに棺体設置の手順について説明する。最初に墓壙の東側に口縁部を内側に向けて棺体1が設置され、その後口縁部を打ち欠いて長さを調整した棺体2を、棺体1の口縁部に挿入する。伸展葬を仮定した場合、遺骸の埋葬方法は棺体1に頭から遺骸を挿入して、足元側の長さを棺体2で調整する方法と、棺体1に足元から遺骸を挿入して、頭部側の長さを棺体2で調整する二通りの方法が想定される。しかし、現状では埋葬状況を示す手がかりが

第228図 第1号埴輪棺(1)



第229図 第1号埴輪棺(2)

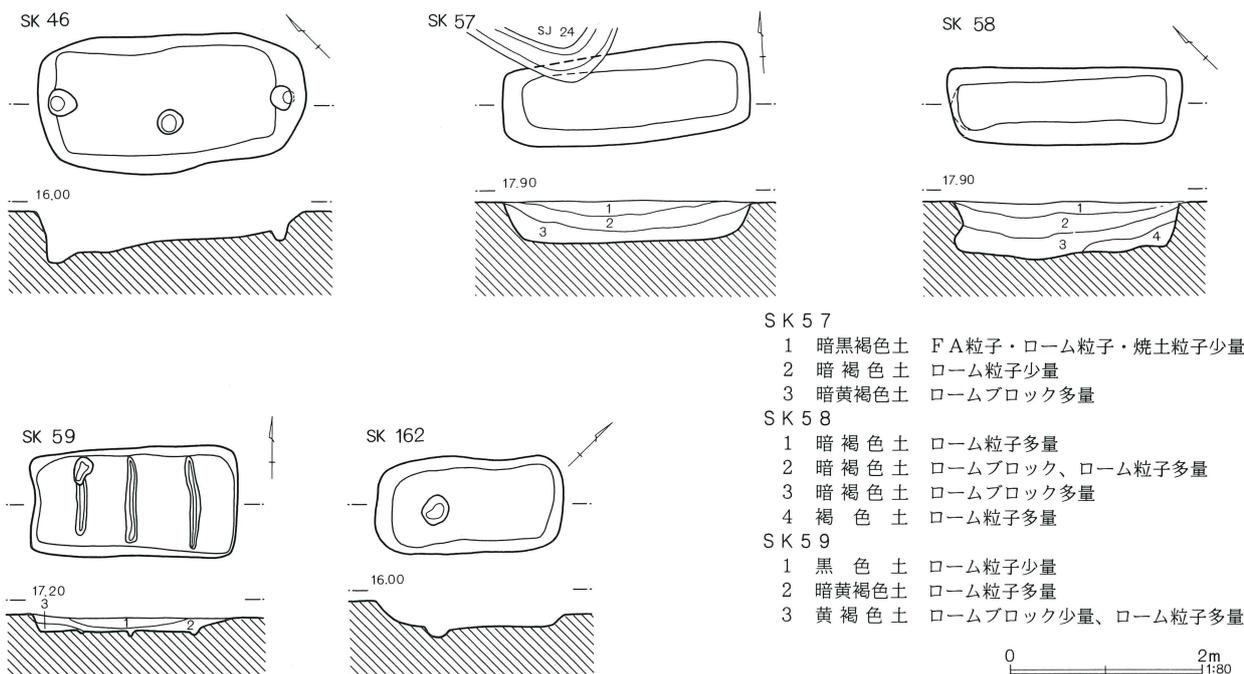


なく、それを判断することは難しい。各部の閉塞は2～5の円筒埴輪の破片を使用している。東小口部は3の破片を主に使って閉塞し、西小口部は4と5の一部を用いて塞いでいる。棺体1の透孔の閉塞は2と5の破片で、合口部は3～5の破片をそれぞれ使用している。閉塞後、各部を粘土で目張りして、ロームブロックを混入する暗褐色土で墓壙内を埋め戻していた。

第228図1は口径41.2cm、底径25cm、器高73cmを測り、ほぼ完形である。胎土は赤色・白色粒子、砂粒を多量に含む生出塚遺跡に特徴的な胎土で、他の個体も共通している。焼成は良好で、色調は暗赤褐色を呈する。寸胴な器形を呈し、口縁部はやや外反する。突帯は断面M字形を呈し、その間隔は第1段と口縁部が他の段間に比べ長い。外面は縦ハケを施し、成形後下半

部に縦方向の亀裂が生じたため、指撫でにより補修を行っている。内面調整は横ないし斜めハケを施し、突帯の内側には指頭圧痕が見られる。透孔は円形を呈し、第3段と第4段に90°ずらして2個穿たれている。なお、器形・突帯・透孔等の特徴は1～5まで概ね共通している。2は口縁部を欠損し、底径24cm、残存高65cmを測る。色調は橙褐色を基調とし、外面に黒斑状の焼きむらが認められる。3は半裁された状態で検出された。復元口径42.8cm、残存高43.5cmを測る。下段の透孔は一回り小さい。焼成がやや甘く、器面には焼きヒビが目立つ。色調は橙褐色で、内外面に黒斑状の焼きむらがある。内外面に指撫でによる補修痕が観察される。4は口径37.2cm、残存高24.6cmを測り、口縁部の外反が他に比べ大きい。色調は暗褐色で、表面に光

第230図 古墳時代後期の土壌墓



沢がある。ハケ目は目が細かく、彫りが浅い。5は口径36.6cm、残存高34cmを測る。色調は橙褐色を基調とし、内外面に焼きむらが目立つ。

棺に使用された円筒埴輪の特徴は、生出塚遺跡II期の様相を示し、時期的には6世紀中葉に比定される。4条突帯円筒埴輪の類例は行田市瓦塚古墳や生出塚2号墳等から出土しており、とくに瓦塚古墳の円筒埴輪A1類に類似した特徴を示し、関連性が窺われる。

4. 土壌墓

古墳時代に属すると考えられる土壌が5基検出された。いずれも伴出遺物がなく、所産時期や性格について明確にすることは難しい。しかし、土壌の形態的な特徴や、覆土の状況、重複関係、占地状況等から古墳群と併行して営まれた土壌墓の可能性の高いものと推定される。墓と判断する根拠に乏しい点是否めないものの、第46号土壌で確認された2柱構造や、底面に横溝を有する第59号土壌等は、いわゆる木棺系土壌墓に特徴的な構造であると指摘されている。また第57号土壌の覆土上層にFA粒子が混入しており、構築時期がFA降下以前に遡ることが確認されている。

分布状況は、円墳群の間の空間地に第59号土壌のように1基単独で営まれたものと、第46・162号土壌、第57・58号土壌のように2基を1単位として近接して営まれたものが認められている。さらに土壌墓の周辺には、小型古墳や埴輪棺、周溝内土壌墓等の従属的な埋葬施設が集中したあり方を示しており、墓域の中で特別な区画として意識されていたようである。

第46号土壌 (第230図)

第39号墳と第41号墳に挟まれた位置に、第162号土壌とともに所在する。第162号土壌との間隔は約2.5mである。R-21グリッドに位置し、古墳前期の第29号住居跡を切って構築されていた。

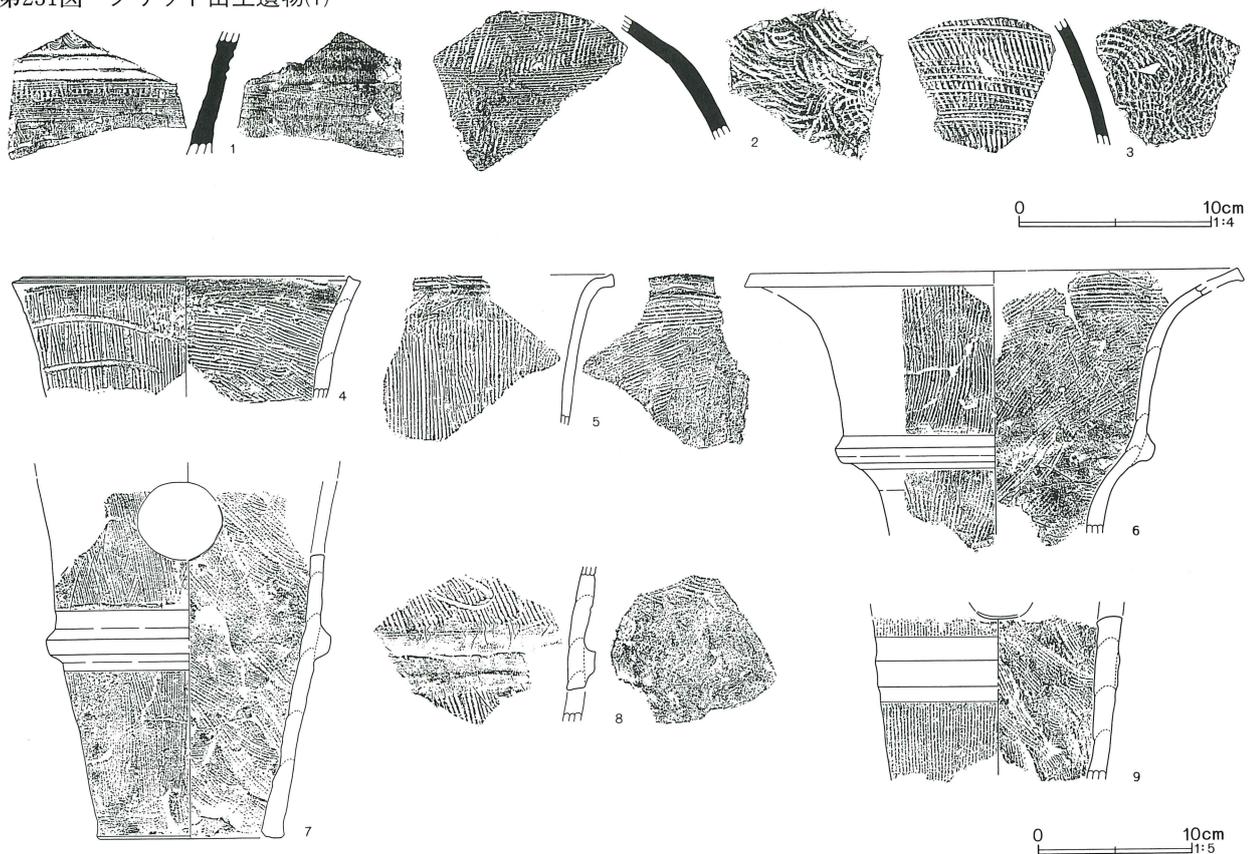
平面形は長方形で、両側の短辺中央にピットを有する2柱構造である。規模は長径2.88m、短径1.48m、深さ0.44mを測る。主軸方向はN-45°-Wを示す。

第57号土壌 (第230図)

L-19・20グリッドに位置し、平安時代の第24号住居跡によって北壁の一部が壊されていた。平面形は長方形を呈し、規模は長径2.64m、短径1m、深さ0.5mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

覆土は3層に区分される。最上層の第1層にFA粒

第231図 グリッド出土遺物(1)



子の混入が認められ、FA 降下以前の構築であることが判かる。第3層はロームブロックを多量に混入しており、人為的な埋戻しと考えられる。

第58号土壙 (第230図)

第57号土壙に隣接した、L-19グリッドに位置する。第57号土壙との間隔は約5 mである。平面形は長方形を呈し、北西側短辺の壁面はオーバーハングしていた。規模は長径2.48m、短径0.84m、深さ0.64mを測る。主軸方向はN-45°-Wを示す。覆土は大きく4層に区分される。第2・3層にはロームブロックの混入が多く、人為的な埋め戻しが考えられる。

第59号土壙 (第230図)

第45号墳から3.5mほど南へ離れた、M-21グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、主軸に直行するように3条の横溝が底面に掘られていた。いわゆる有溝土壙墓である。規模は長径2.2m、短径1.2m、深さ0.2mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。底面の横溝はほぼ等間隔に掘り込まれている。排水を目的と

したものであろうか。

第162号土壙 (第230図)

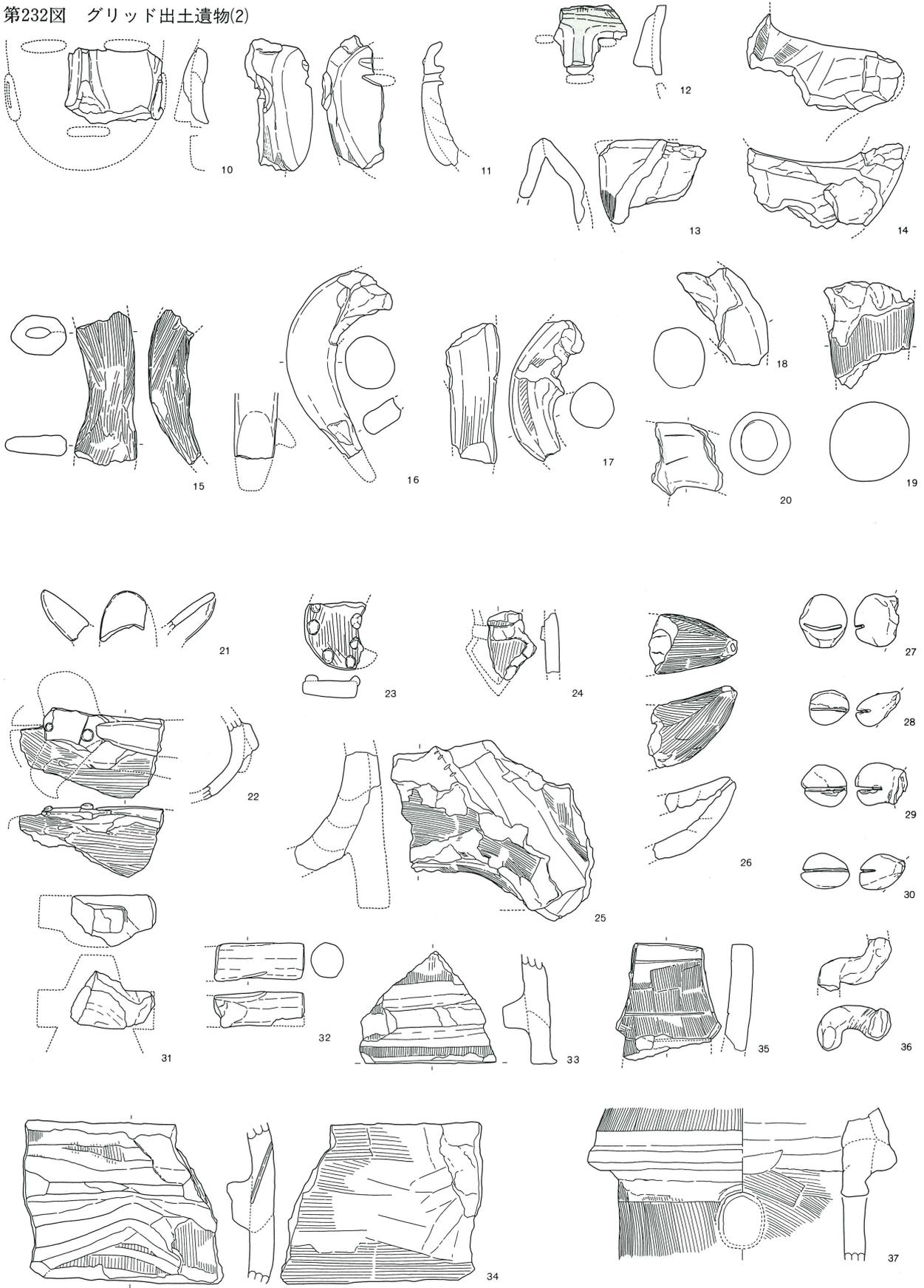
第41号墳の南東約1.5mに隣接し、R・S-20・21グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、底面には小ピットが確認された。規模は長径2 m、短径1 m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-43°-Eを示す。

5. グリッド出土遺物

第231図1～3は須恵器甕の破片である。1は口縁部の破片で、沈線によって口縁部を区画し、櫛描波状文を充填する。胎土は精選され、焼成良好で、色調は青灰色を呈し、断面セピア色である。第39号井戸出土。2・3は胴部の破片である。外面には平行叩き後、カキ目調整を施す、内面は同心円文の当て具痕を残す。2は後世に砥石として2次利用された擦痕を破断面に残す。表採。3はQ-21グリッド出土。

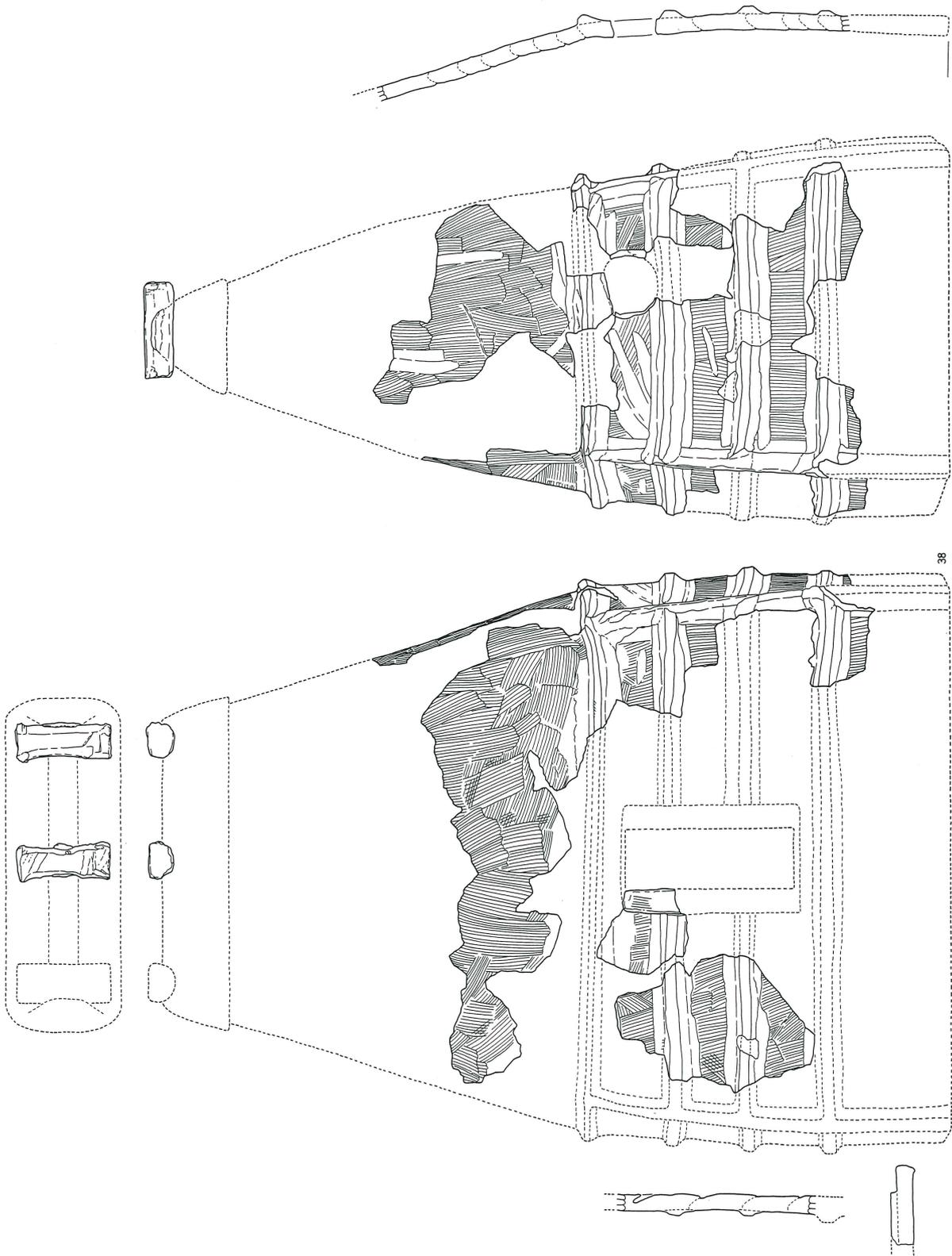
4～9は円筒埴輪で、6のみ朝顔形埴輪である。4は口縁部外面と内面の一部に赤彩を施す。外面に格子

第232図 グリッド出土遺物(2)



0 10cm
1:4

第233図 グリッド出土遺物(3)



状のヘラ記号の一部が認められる。口径21.6cm。U-21グリッド出土。5は口縁端部が急に外反した鈎状口縁を呈する。第55号溝出土。6は朝顔形埴輪の口縁部から頸部にかけての破片である。突帯貼付後に、外面調整の縦ハケを施す。外面には赤彩痕が残る。第55号溝出土。7は底径12cm。須恵質で暗灰色を呈し、基底部外面に横ハケを施す。第45号溝出土。8は外面にヘラ記号の一部が残る。第73号溝出土。9は断面低M形の突帯をもつものである。第73号溝出土。

第232・233図にグリッドから出土した形象埴輪を一括した。10~19は人物埴輪の破片である。10は顔面の破片である。耳は円孔を開け、その周囲に円環を貼付する。11は頭部に髻の剥離痕があることから女子埴輪のと考えられる。顔面の破片で、眉は粘土紐を貼付して表し、耳は円孔の周りに円環を貼付する。12は赤彩を施した顔面の破片である。13は人物埴輪が被る頭布ないし冠帽の破片である。2枚の粘土板を合わせて袋状に作り、裏面には円孔が穿孔されている。

14~20は腕部の破片である。15・20は中空技法、他は中実技法である。14は左腕の付け根部分の破片で、腕を前方に差し出している。15は右腕の破片で、掌は板状となる。16は左腕の破片である。指の表現は拇指のみを別作りとしたミトン形で、板押圧調整が施されている。17は右腕の破片で、掌部分の平坦面を残す。18は小片のため左右の区別は判然としない。19はやや径の太いものであり、腕以外の可能性もある。20は腕の付け根部分の破片と考えられる。中空の腕が胴部に取り付けられている。上面には円孔の一部が残る、外面に赤彩が見られる。

21~30は馬形埴輪の破片である。21は耳の破片で粘土板を断面逆U字形に曲げている。22は頭部の口に近い部分である。残存部分の観察からf字形鏡板付轡を装着していたようである。口は篋で切り込んでいる。23はf字形鏡板の破片で、周縁部に粘土粒を貼付して鋌留を表現する。24は剣菱形杏葉の破片と思われる。

25は馬の腹部及び障泥の破片である。障泥は篋先の刺突により縁取りされている。26は尻尾である。粘土紐を巻き上げ、先端部を絞り込み、先端には空気穴と考えられる小円孔が穿孔されている。27~30は馬鈴である。粘土粒を丸めて成形し、鈴口を切り込む。

31~33は家形埴輪の破片である。31は堅魚木と妻隠板が一体となって表現された寄棟造家の屋根部と考えられる。類例が第4号墳から出土している。32は堅魚木の破片である。上面には指頭による圧着痕が見られ、小口面には板押圧痕が残る。33は壁体部の破片と考えられる。底部付近に断面台形の突帯を貼付する。

34~37は不明形象埴輪の破片である。34は外面に突帯を貼付した板状の破片である。器肉が厚く、内面には成形時の自重による変形を防ぐために差し込まれた補助棒の刺突痕が観察される。35は両側に段を作り出した板状の破片である。外面には3本の線刻が残る。36は粘土紐を撚ったもので、両端を欠損する。37は形象埴輪の円筒台部と想定される。粘土紐を貼付して、着衣の裾を表現した可能性が考えられる。

第233図38は、調査区北側の谷地内に確認された攪乱坑の中に一括して廃棄されていた、寄棟造の家形埴輪である。図上復元で全高65cm、平部長47cm、妻部長32cmを測る。堅魚木は2本残り、本来は3本程度と推定される。堅魚木の上面及び小口面に板押圧痕が顕著で、下面の中央に大棟部分に貼り付けるために指でつまんだ痕跡がある。また妻側の堅魚木の側面には妻隠板の剥離痕が見られる。屋根部の残りは良好でないが、軒先に断面三角形の突帯を貼付する。壁体部は粘土帯成形で、隅角部に縦方向の突帯を貼付した後に、現存部で3条の横方向の突帯を貼り付けている。平壁部分には長方形の入口を設けていたと推定される。入口の周縁には線刻を入れ、段差を作り出していた。妻部には軒に接するように円孔が認められる。外面調整はハケ目をそのまま残し、内面はハケ目後、部分的に指撫でを施しているが、粘土帯の接合痕を残す。

VIII. 平安時代の調査

1. 調査の概要

C区の調査において検出された平安時代の遺構は、竪穴住居跡21軒、井戸跡1基を数える。住居跡は調査区南側の上位段丘面を中心に広く分布し、緩斜面部では分布がやや疎らとなる。下位段丘面では覆土上層に浅間B軽石を含む第25・26号溝等が当該期に所属する可能性が考えられるだけで、住居跡などの明確な遺構は検出されなかった。

調査区内における住居跡の分布は、大きく4群に分けることができる。

A群は第15・16号住居跡の2軒からなり、緩斜面部の標高16mラインに近接して営まれていた。B群は調査区南側の西寄りの標高17mラインに位置し、継続的な立て替えと推定される第20・21号住居跡が単独で所在していた。C群は調査区南側の東寄りに位置し、第22～26・29号住居跡の6軒が狭い範囲に集中して営まれていた。この住居跡群は古墳と古墳の間の狭小な空間に近接して営まれ、古墳の存在に大きく規制された在り方を示していた。D群は上位段丘面の平坦地に10～15mの間隔を置いて散漫な分布状況を示し、第30～39・43号住居跡の11軒と第37号井戸から構成されている。ただし、西側に隣接するD区の調査でも当該期の住居跡が確認されており、今後さらに細かい住居跡群の区分が可能である。

住居跡は一辺が3～4mの規模のものが多く、最小の住居跡は第25号住居跡の2.5×1.9m、最大の住居跡は第16号住居跡の5.4×4.15mである。平面形態は方形が多く全体の3分の2を占め、他は長方形である。カマドは北壁に付設したものが多く、次いで東壁が多い。例外的に第33・36号住居跡では西壁に付設されていた。長方形の住居の場合、カマドの付設された位置は長辺側が多いのに対し、第20・21、22号住居跡では短辺側に付設されていた。カマドは壁外に焼燃部を掘り込み、奥壁寄りに土製支脚を設置するものが多く、中には須恵器蓋や土師器台付甕を支脚に転用した例も

見られた。また1軒に複数のカマドをもつ例が3軒確認された。別の壁に作り替えるものと、同じ壁に並置するものの2者がある。他にカマドの付設が明確でなく、住居内部に炉を設けたものが3軒確認されている。

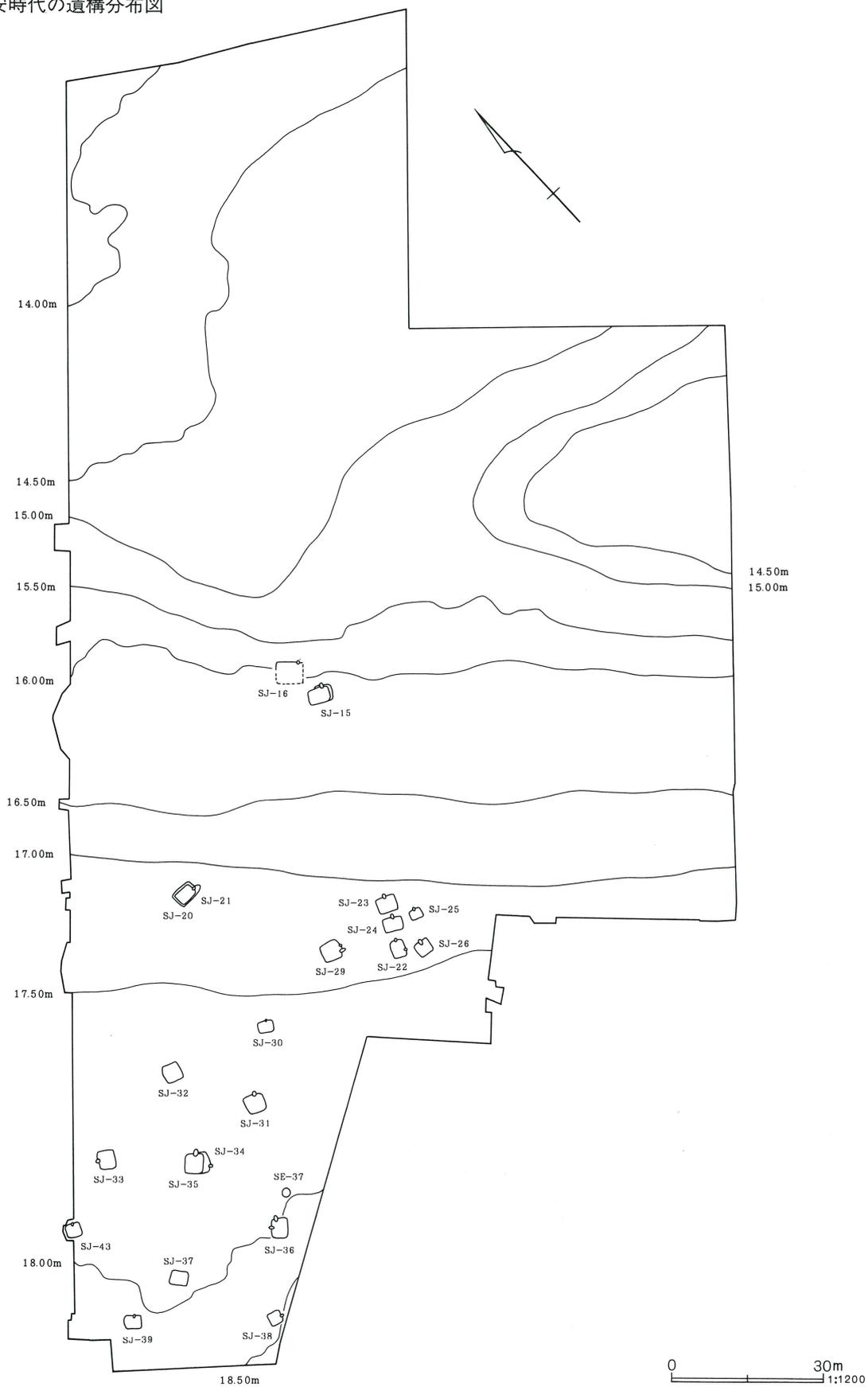
遺物には、土師器杯・鉢・甕・台付甕、須恵器杯・皿・椀・高台付椀・蓋・甕・長頸瓶、灰釉陶器椀、黒色土器杯、紡錘車、刀子、手鎌、土製支脚、砥石、台石、磨石等があり、墨書土器も数点出土している。

土師器は煮沸具であるコの字状口縁の甕や台付甕が主体を占め、杯はわずかに出土しているにすぎない。供膳具の主体は須恵器であり、器種には杯・皿・高台付椀等が認められる。須恵器の供給関係は、集落の継続期間の前半段階では胎土に白色針状物質を含む南比企窯跡群産の杯・椀・蓋等の小型品と甕等の大型品によって占められているが、その後半段階では胎土に長石、石英、片岩、赤色粒子等の夾雑物を特徴的に含む末野窯跡群産、あるいはその周辺で焼かれたと推定される製品が南比企産に変わって主体を占めるように大きく推移している。特に高台付椀・高台付杯・皿等の小型品が主に供給され、甕等の大型品は少ない。

南比企産須恵器は渡辺一氏による鳩山編年のHVII・VIII期を主体とし、年代的には9世紀第2四半期後半から9世紀第4四半期前半に比定されている。また末野産須恵器は酒井清司氏による台耕地遺跡土器編年の第III・VI期に併行し、年代的には9世紀後半から10世紀にかかる時期と想定されている。これにより当遺跡の継続期間が概ね9世紀中頃から10世紀の初め頃を中心に営まれたものであったと推定される。

今までの調査において新屋敷遺跡全体では平安時代の住居跡が第2次調査で1軒、A区で10軒、C区で21軒、D区で69軒が調査され、既に総数100軒を越しており、元荒川流域における中核的な集落であったことを物語っている。このうちA区の調査では第2号住居跡から鍛冶炉が検出され、鍛造剥片、粒状鉄滓、鉄塊、椀型滓、羽口等の鍛冶関連遺物が多数出土し、集落内

第234図 平安時代の遺構分布図



部で小鍛冶が行われていたことが明らかにされた。自然科学分析の結果、鍛錬鍛冶だけでなく、精錬鍛冶滓も一部含まれていることから、遺跡の周辺で砂鉄精錬が行われていた可能性が指摘されている。

このように集落の継続期間が9世紀中頃から10世紀初め頃までの短期間であることから、農業生産の進展に伴う周辺集落の再編成だけを集落の出現要因と想定するには突然であり、いわゆる「計画村落」的な様相が色濃い。前述したA区の小鍛冶遺構等の存在から、元荒川の砂鉄を使った鉄生産や鉄器の生産に係わりをもった製鉄関連の集落としての側面が強いのではなからうか。現状ではこれを裏付けるような精錬炉や鋳型等の製鉄関連の明確な遺構、遺物が確認されておらず、今後に残された課題は大きい。

2. 住居跡

第15号住居跡（第235～237図）

調査区中央のP-21・22グリッドを中心に位置し、北側約2mには第16号住居跡が隣接する。地形的には上位段丘面から下位段丘面に移行する斜面部に立地している。

調査着手時は重複のある住居跡と考えて調査を開始したが、覆土の状態及び遺物の出土状況の検討などからカマドの周囲に棚状の付属施設を有する住居であることが判明した。

平面形態は東西にやや長い長方形を呈し、カマドの両脇から東壁にかけて棚状の施設が作り出されていた。棚状施設を含めた規模は長径4.7m、短径3.05mを測る。また住居の掘り込み部分の規模は、長径3.94m、短径3.16mである。床面までの深さは0.48m前後で、棚状施設は10cm前後と浅く掘り込まれていた。主軸方向はN-27°-Eを示す。

カマドは北壁のやや右寄りに設置され、長さ1.15m、焚口幅0.75mを測る。燃焼部は床面より18cmほど浅く皿状に掘り込み、火床面の残りはあまり良好でなかった。煙道部は急傾斜で立ち上がり、壁外に張り出す。袖部はロームを掘り残して構築したもので、片袖

のみを遺存していた。カマドの覆土の観察によればd層は天井崩落土、g層は掘り方埋土に相当するものと考えられる。なお燃焼部からは16の台石と考えられる偏平な円礫と9の須恵器高台付椀が出土している。

床面はカマドの前面を中心に堅く踏み締められ、緩やかな起伏が認められた。ピットは合計5本検出されている。いずれも径30～40cmと小さく、深度も20cm前後と浅いため、住居に伴うものかどうかは不明確である。土層の観察ではピット2・4に柱痕が確認されている。他に壁溝等の施設は確認されなかった。

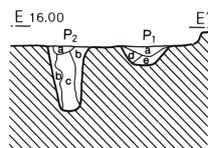
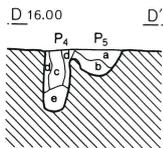
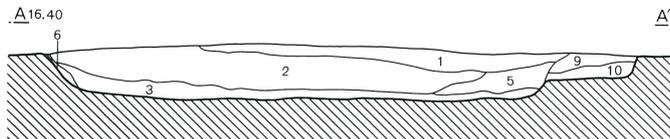
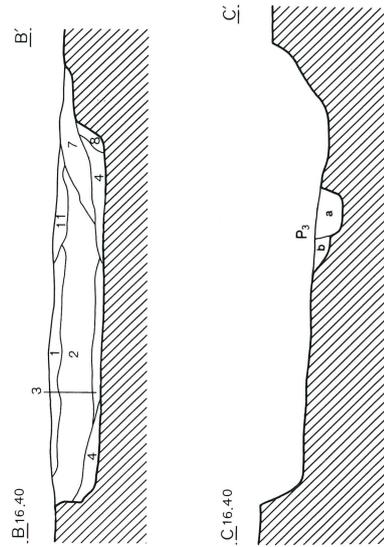
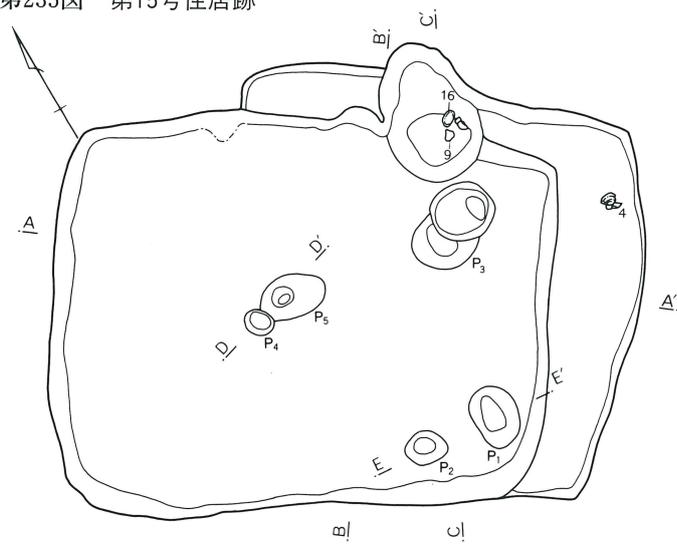
主な出土遺物は、須恵器杯・皿・高台付椀、土師質土器、土師器杯・甕・台付甕、灰釉陶器椀、砥石、台石等が出土している。遺物の出土状況はカマドの前面を中心に出土し、棚状施設からも須恵器皿4、砥石15などが出土している。

第237図1は土師器杯で、須恵器に類似した器形であるが、底部外面及び体部下端に篋削りを施す。2は須恵器と同じ手法で作られているが、胎土に夾雑物の混入がほとんど見られず、焼成も酸化焰に近いことから土師器杯としたものである。3・4は小型の須恵器皿である。直線的に大きく開き、口唇部で反り返り玉縁状に肥厚する。4は見込み部分に糸切り痕が見られる。5は体部が浅く、直線的に立ち上がる須恵器杯である。6～10は高台付椀である。6・9は口径13.2～15cm、器高5.5cm前後を測り、高台は短く、貼り付けがやや粗雑である。一方7・8は口径が14cm前後に縮小し、器高が5cm以下のものであることから高台付杯に分類した方が良いかもしれない。このうち4・7～9には胎土に片岩粒が含まれていることから末野産と考えられる。

11は灰釉陶器の椀である。今回の調査では灰釉陶器の出土はこの1点のみである。淡緑色の釉が口唇部に掛かる。12～14はコの字状口縁の土師器甕である。12は小型であることから台付甕であろう。14はコの字状口縁が崩れ始め、屈曲が弱まる。

15は良く使い込まれた砥石である。16は偏平な円礫で、表面に擦痕が見られる。17は磨石あるいは台石で

第235図 第15号住居跡

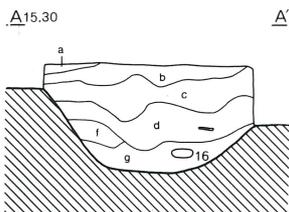
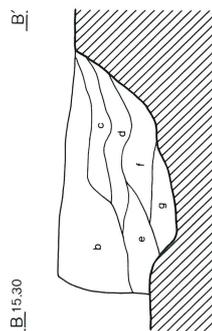
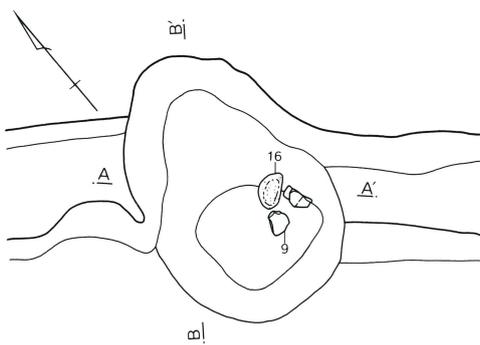


ヒット

- a 暗褐色土 焼土粒子、灰白色粒子少量
- b 明褐色土 ロームブロック少量
- c 黒褐色土 ローム粒子、炭化物粒子少量
- d 暗褐色土 ローム粒子、炭化物粒子少量
- e 暗褐色土 ロームブロック少量

SJ15

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子多量
- 4 明褐色土 ロームブロック、ローム粒子多量
- 5 暗褐色土 ロームブロック少量
- 6 明褐色土 ロームブロック少量
- 7 明褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量
- 8 明褐色土 ロームブロック多量
- 9 暗褐色土 ロームブロック少量
- 10 暗褐色土 ロームブロック多量
- 11 黒褐色土 ロームブロック少量

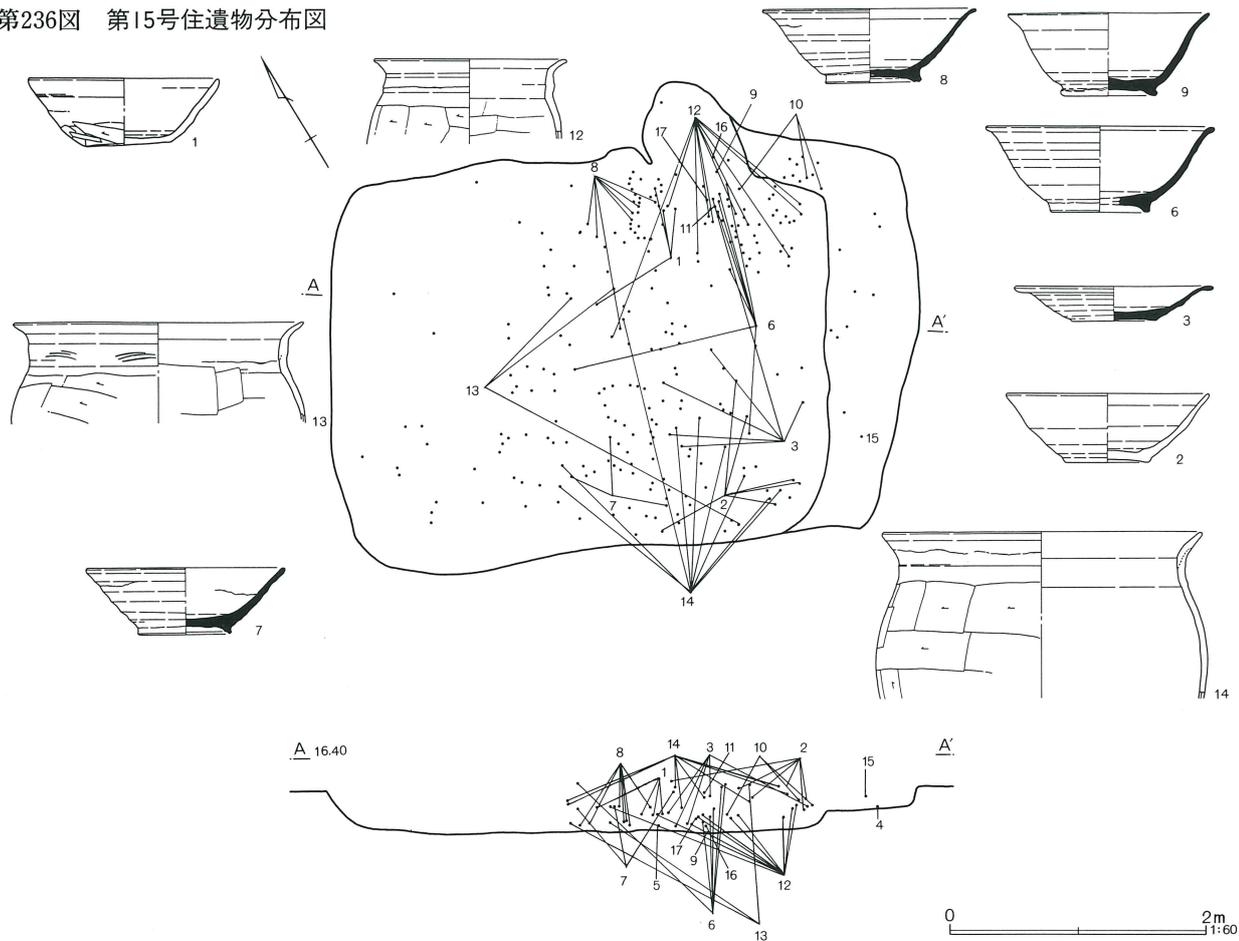


カマド

- a 黒色土 ローム粒子、焼土粒子少量
- b 黒褐色土 焼土粒子多量、炭化物粒子少量
- c 暗褐色土 焼土粒子多量
- d 褐色土 焼土ブロック
- e 黒褐色土 焼土粒子、炭化物粒子多量
- f 暗黄褐色土 焼土ブロック、焼土粒子多量
- g 暗黄褐色土 焼土粒子少量



第236図 第15号住遺物分布図



第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.5)	4.4	5.6	B E F	A	褐	55	
2	坏	(13.3)	4.6	5.4	B C F	A	橙	45	酸化焰焼成
3	皿	12.9	2.4	5.7	B F G	A	灰	70	
4	皿	12.9	2.4	5.7	B F I	A	灰	70	内面糸切痕
5	坏	(12.7)	3.2	(6.5)	B F J	A	灰	20	
6	高台付椀	(15.0)	5.7	(6.5)	B F G	A	灰黄褐	45	
7	高台付椀	(13.0)	4.4	5.9	B G I	A	暗青灰	25	
8	高台付椀	(14.0)	4.9	6.2	B G I	A	暗青灰	40	
9	高台付椀	(13.2)	5.6	6.0	A B I	A	浅黄	35	
10	高台付椀	(2.9)	5.5		A B G	A	オリーブ灰	85	
11	椀	(13.0)	(2.0)		B G	A	灰白	5	灰釉陶器
12	台付甕	12.7	(5.7)		B F G	A	黄褐	45	
13	甕	(19.1)	(6.8)		B F G	A	褐	10	
14	甕	(21.1)	(11.1)		B F G	A	黄褐	15	
15	砥石								長さ(6.60) 幅4.8 厚さ4.4cm 凝灰岩製
16	磨石								長さ15.6 幅12.8 厚さ4.7cm
17	磨石								長さ6.0 幅(9.9) 厚さ7.4cm

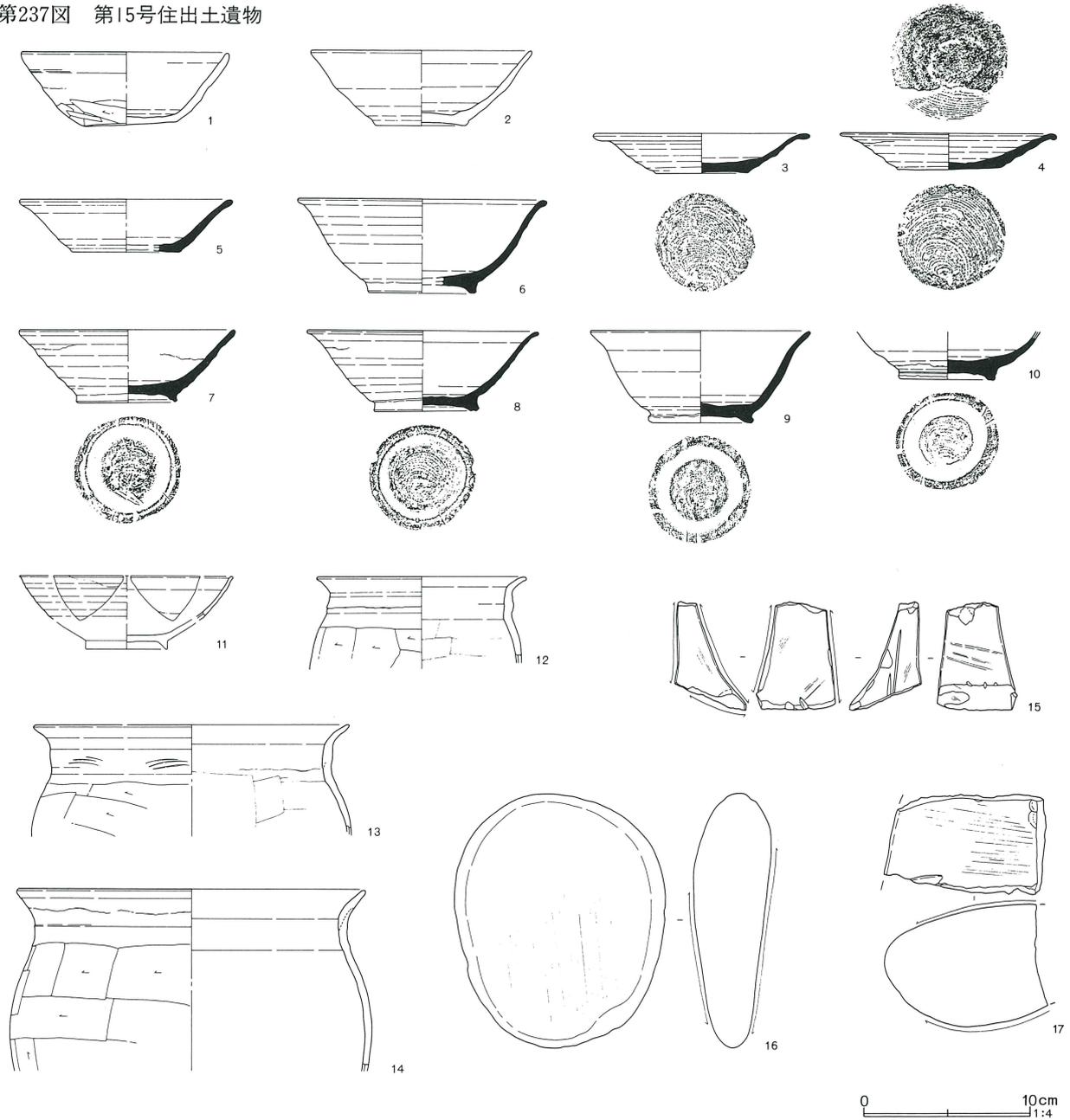
あろう。表面には擦痕が見られる。

須恵器には末野産と推定されるものが多く、皿、高

台付椀ないし高台付坏が出土しており、時期的には新

しく位置づけられ、9世紀末から10世紀初頭にかかる

第237図 第15号住出土遺物



時期と考えられる。

第16号住居跡 (第238図)

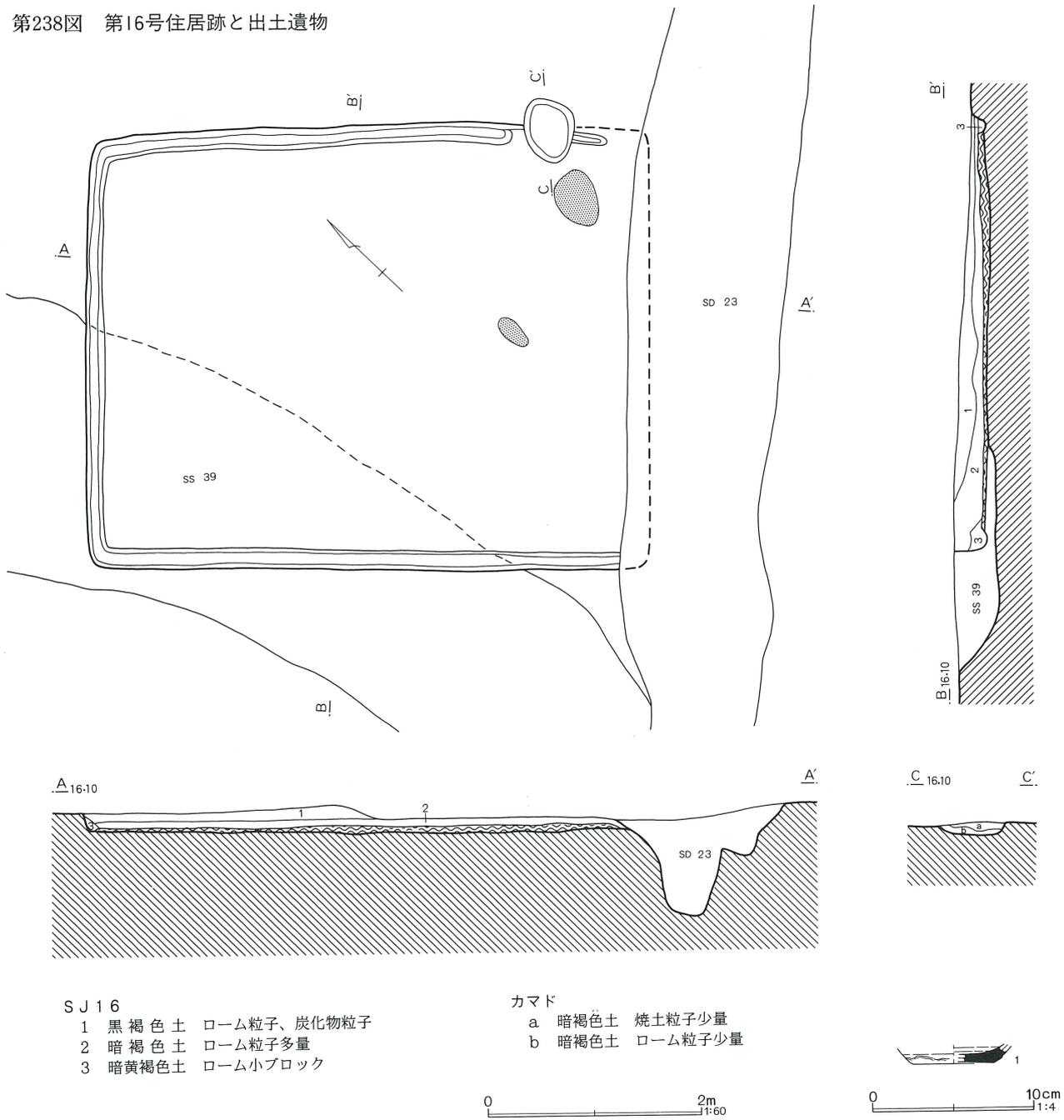
調査区中央のQ-21・22グリッドに位置する。地形的には上位段丘面から下位段丘面に移行する斜面部に立地し、南側に隣接する第15号住居跡とともに住居群を形成する。北西コーナーは第39号墳の周溝と重複し、それを切って構築していた。また東壁は第23号溝によって壊されていた。本来の平面形態及び規模は明確ではないが、東西方向に長い長方形を呈するものと

推定される。規模は遺存部で長径5.4m、短径4.15m、深さ0.33mを測る。主軸方向はN-47°-Eを指す。

カマドは、北壁の東寄りの位置に浅い楕円形の掘り込みが確認されている。この部分は燃烧部の掘り込みと考えられ、長さ0.6m、焚口幅0.33m、深さ0.12mを測る。カマド覆土は焼土粒子を含む暗褐色土を主体とし、火床面はあまり顕著でなかった。

床面は概ね平坦で、ロームブロックを多量に含む暗褐色土によって貼床を施していた。壁溝は床面の遺存

第238図 第16号住居跡と出土遺物

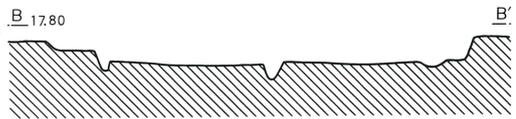
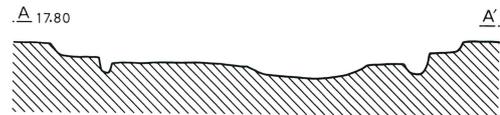
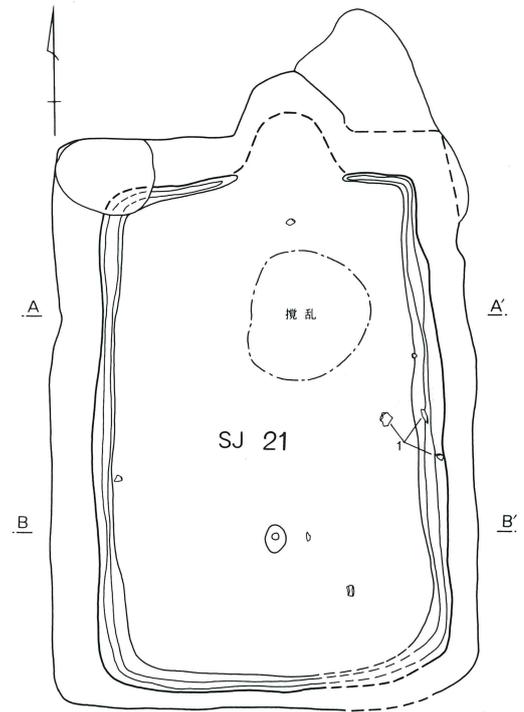
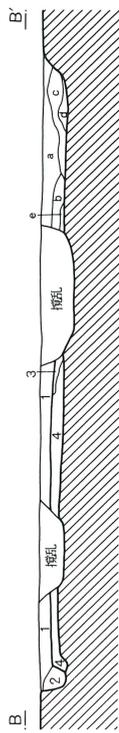
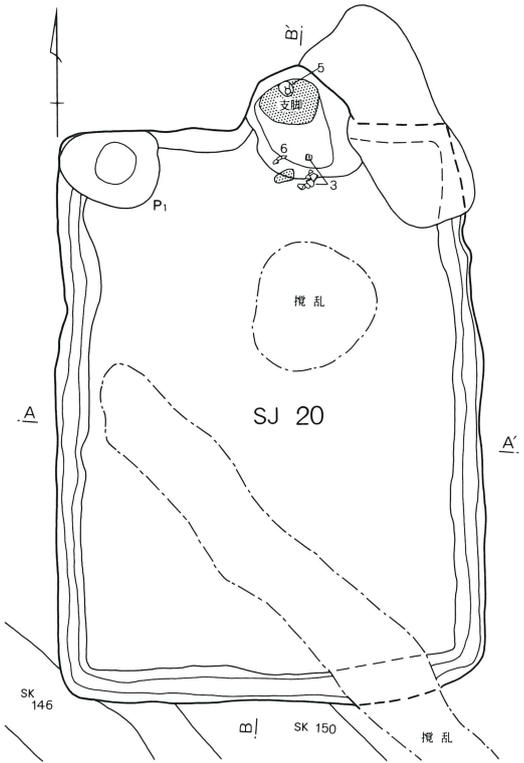


する部分においてほぼ全周し、幅22~17cm、深さ6cm前後を測る。また、カマドの手前に二か所、小規模な焼土の散布が認められているが、床面への掘り込みはほとんどなかった。他にピット等の付属施設は検出されていない。

遺物は須恵器環の底部破片が1点出土しているだけである。第238図1は底径5.2cmに復元される須恵器環の底部破片である。底部調整は回転糸切り離し未調整

である。体部下端には切り離し時に付着したと考えられる、粘土層が認められる。胎土には石英、白色・黒色粒子を含み、焼成良好である。色調は灰色を呈し、残存率10%である。胎土中に白色針状物質の混入は見られないが、色調や焼成具合から南比企窯跡群の製品の可能性が強い。時期については小片のため明確でないが、底径が小さいことから9世紀後半以降の所産と推定される。

第239図 第20・21号住居跡と出土遺物



SJ 20

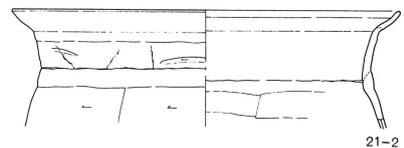
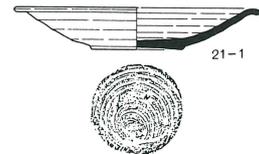
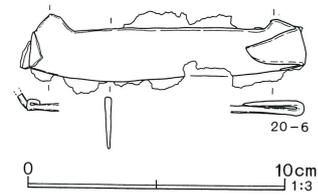
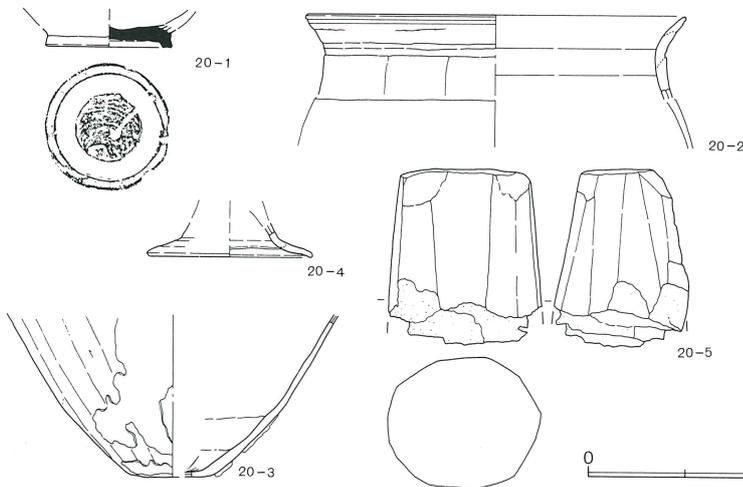
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子少量

SJ 21

- 3 黒褐色土 ロームブロック多量
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量
- 5 暗褐色土 ロームブロック

SJ 20カマド

- a 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- b 暗黄褐色土 ロームブロック多量
- c 暗褐色土 焼土粒子多量
- d 赤褐色土 焼土ブロック
- e 灰白色粘土 焼土粒子



第20・21号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
20-1	高台付椀		(1.2)	6.4	A B F	A	にぶい褐	60	
20-2	甕	(19.8)	(4.3)		B E F	A	明褐	10	
20-3	甕		(8.6)	(4.1)	B E F	A	にぶい褐	20	
20-4	台付甕		(1.8)	(8.5)	B E F	A	にぶい褐	20	
20-5	支脚								長さ(9.4) 幅8.0 厚さ7.0cm
20-6	手鎌						にぶい橙		長さ(11.5) 身幅2.4 棟幅0.25cm
21-1	皿	(12.8)	2.2	4.8	B G I	A	暗灰	55	
21-2	甕	(20.3)	(6.2)		B E F	A	にぶい橙	15	

第20・21号住居跡 (第239図)

調査区中央の西寄りのO-17グリッドに位置する。東側約2 mに古墳前期の第19号住居跡が近接しているが、周囲には同時期の住居の分布が稀薄で、現状では単独で営まれている。南東コーナーは第146・150号土壙等と重複し壁面の一部が壊されていた。

調査当初は重複のない単独の住居跡と認識して調査を開始したが、床面を精査した結果、その下から別の住居の掘り込みが検出されたため建て替えの行われた住居跡であることが判明した。そこで、新しい方を第20号住居跡、古い方を第21号住居跡と呼称して調査を実施した。

第20号住居跡は南北に長い長方形を呈し、規模は長径4.6m、短径3.4mを測る。床面までの深さは0.23mである。床面の一部と北東コーナーが後世の攪乱によって壊され、全体に残りは良好でなかった。

カマドは北壁のほぼ中央に設置されており、規模は長さ0.92m、焚口幅0.75mを測る。燃焼部は壁外に張り出して構築され、奥壁寄りに土製支脚を設置していた。燃焼部の掘り込みは浅く、被熱によって赤色化した火床面が良好に検出された。土製支脚は多面体に面取りを施し、被熱による赤色化のため非常に脆くなっていた。

床面は重複する第21号住居跡部分にロームブロックを混入した暗褐色土で貼床を施していた。壁溝はカマドのある北壁を除いてほぼ全周し、幅30～20cm、深さ19cm前後である。ピットは北西コーナーに接して1本検出されている。長径0.8m、短径0.65m、深さ0.2mを測り、位置的にみて貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は須恵器高台付椀、土師器甕、台付甕、土製支脚、鉄製品等が出土し、全体に少量であった。

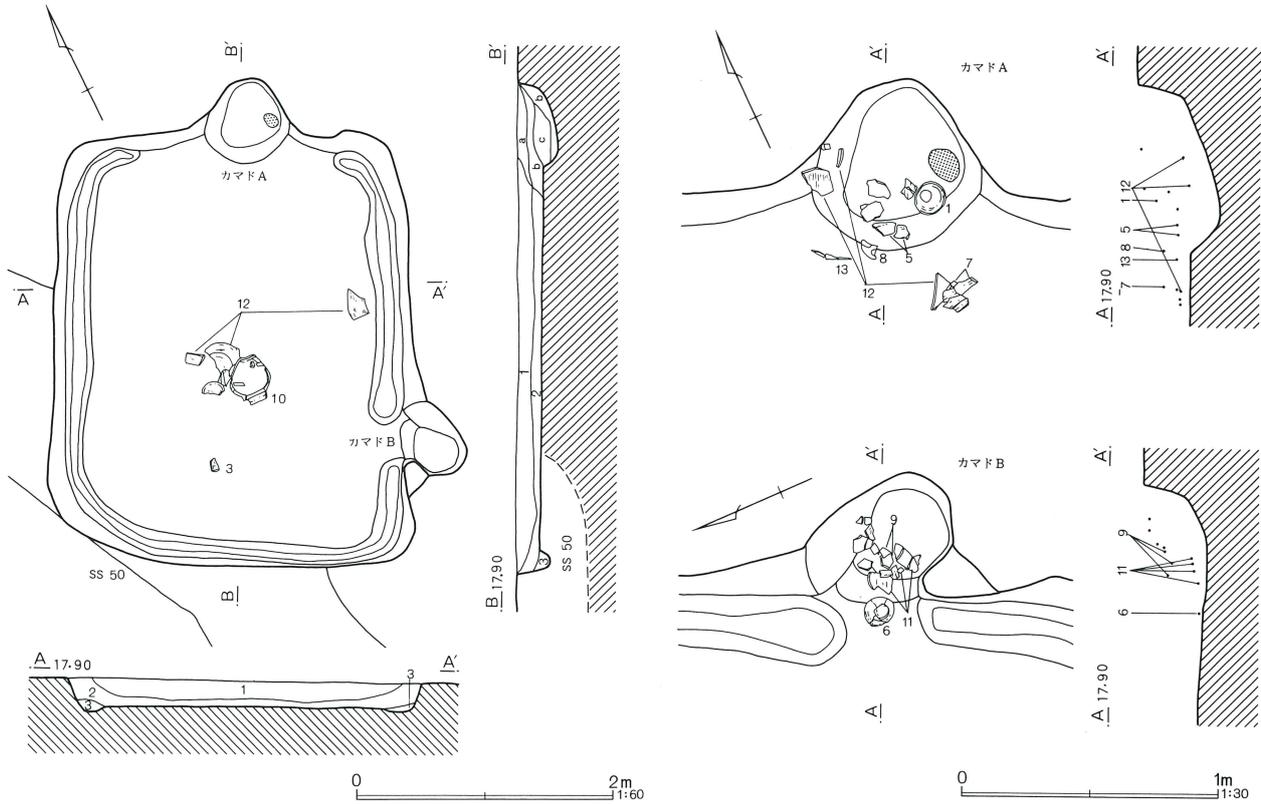
第239図20-1の須恵器高台付椀は、高台が低く端面が浅く凹む。胎土には赤色粒子の混入が目立つ。2はコの字状口縁の甕である。3はコの字甕の胴部下半でカマド手前から出土した。外面に焼土化した粘土が厚く付着する。他にカマドの焚口から手鎌状の鉄製品が出土している。刃の付いたU字形の鉄板の両端部を折り返して装着したものと考えられる。

第21号住居跡は第20号住居跡と入子状に重複しており、その平面形は相似形をなしている。また規模は第20号住居跡よりも一回りほど小さく長径4.2m、短径2.8m、深さ0.2mをそれぞれ測る。

カマドは第20号住居跡に伴うカマドの構築によって壊され詳細は不明であるが、痕跡から北壁のほぼ中央に構築されていたものと推定される。床面はほぼ平坦で、堅く踏み締められていた。壁溝はカマド部分を除いてほぼ全周し、幅約28～9 cm、深さ約20cmである。南壁寄りの床面に径22cm、深さ14cmの小ピットが認められた。深度が浅く、性格については不明である。

出土遺物は、須恵器皿、土師器甕等がわずかに出土している。第239図21-1の須恵器皿は東壁の壁際から破片となって出土した。復元口径12.8cm、底径4.8 cm、器高2.2cmの小型品で底部回転糸切り離し未調整である。底部から大きく開いて立ち上がり、口唇部は外反し玉縁状に肥厚する。胎土に片岩粒を混入しており、末野窯跡群産の製品と考えられる。他に2のコの字状口縁の甕が出土している。土器群の時期は、9世紀末葉前後と推定される。

第240図 第22号住居跡



S J 2 2

- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子
- 2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック

カマドA

- a 暗褐色土 焼土粒子少量
- b 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子
- c 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- d 暗褐色土 焼土粒子多量

第22号住居跡 (第240・241図)

調査区中央東寄りのK・L-19グリッドに位置する。第23~26・29号住居跡とともに一つの住居跡群を形成している。住居跡の南西コーナーは第50号墳の周溝と一部重複し、それを壊して構築されていた。平面

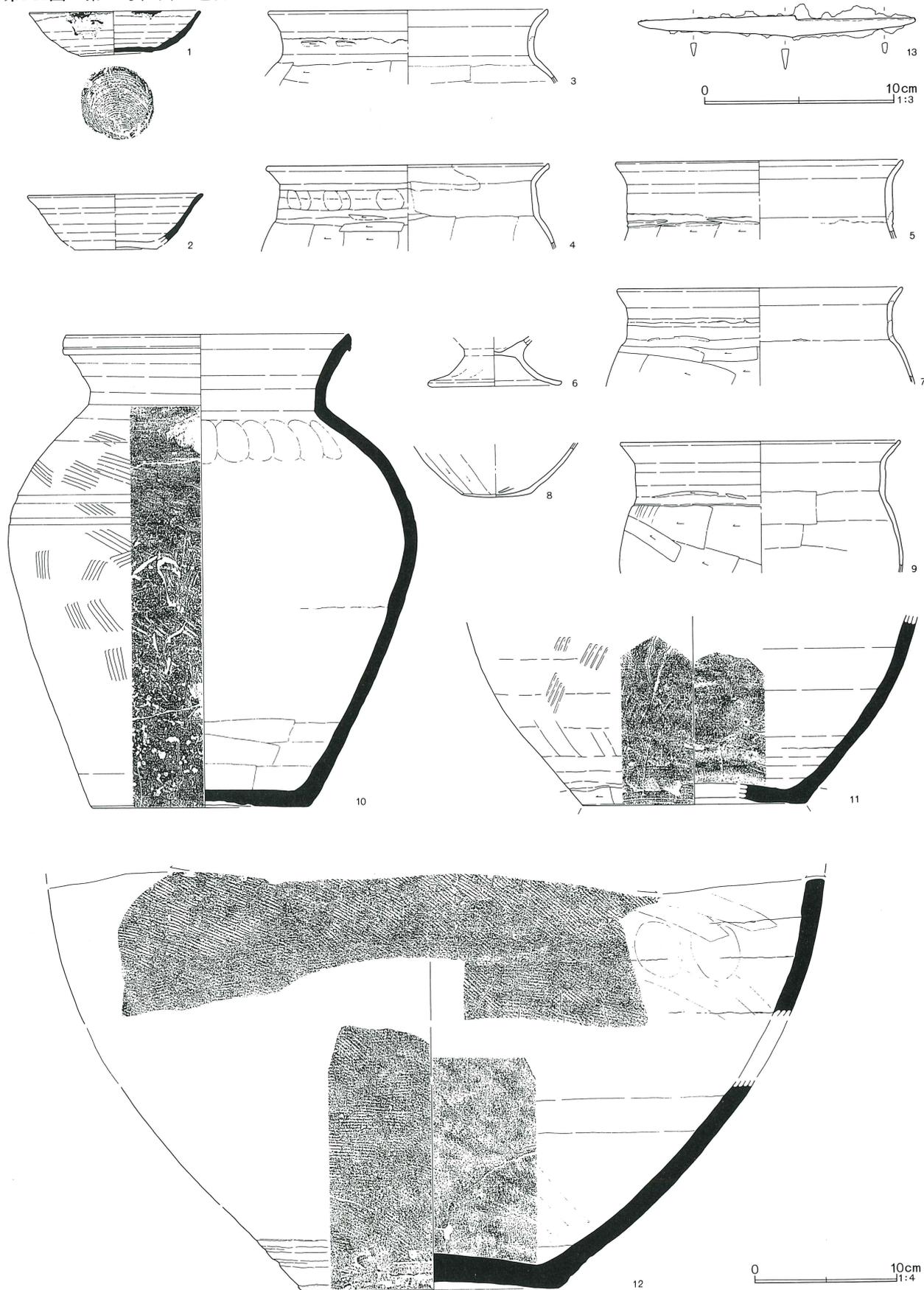
形態は南北に長い長方形を呈し、長径3.8m、短径3m、深さ0.23mを測る小型の住居である。主軸方向は長軸方向を基準に採ればN-24°-Eである。

カマドは北壁と東壁の二か所に設置されていた。北壁のものをカマドA、東壁のものをカマドBと呼称す

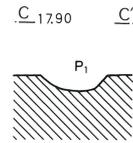
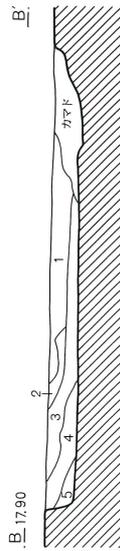
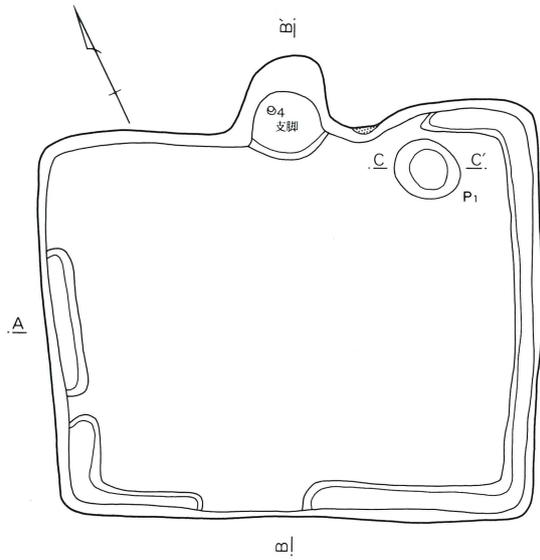
第22号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.2	3.1	5.1	BCG	A	橙	100	油煙付着
2	坏	(12.5)	(3.6)		ABF	A	灰	20	
3	甕	(19.6)	(5.3)		BEF	A	橙	20	
4	甕	(20.0)	(6.1)		BEF	A	にぶい橙	20	
5	甕	(20.0)	(5.6)		BEF	A	明褐	20	
6	台付甕		(3.5)	9.2	BEF	A	明褐	95	
7	甕	(20.0)	(7.0)		BEF	A	明褐	25	
8	甕		(3.8)	5.0	BEF	A	にぶい褐	25	
9	甕	(19.8)	(9.4)		BEF	A	にぶい褐	20	
10	甕	20.2	34.0	15.3	BCE	A	灰白	75	
11	甕		(13.5)	(15.8)	BCE	A	灰	40	
12	甕		(29.0)	18.2	BCE	A	灰	40	破断面研磨
13	刀子								長さ15.0 身幅1.2 棟幅0.4cm

第241図 第22号住出土遺物

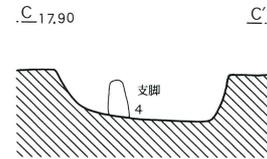
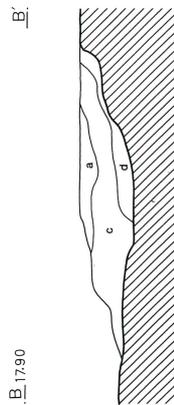
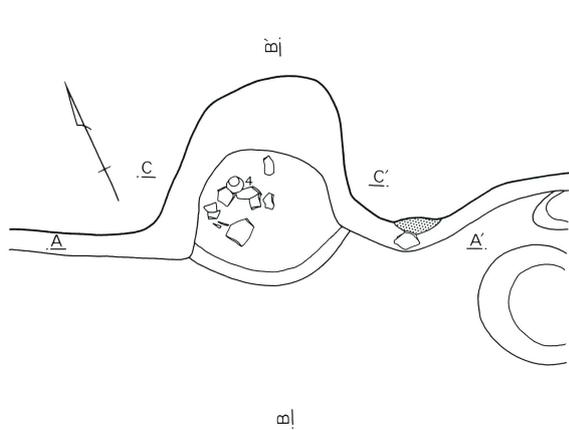
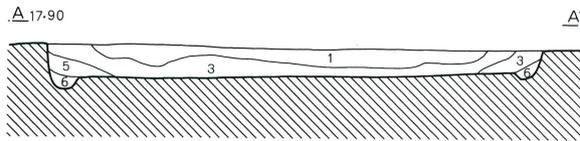


第242図 第23号住居跡



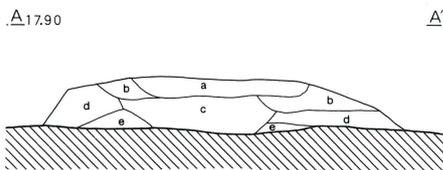
S J 2 3

- 1 黒色土 ローム粒子
- 2 褐色土 ロームブロック
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量
- 4 暗黄褐色土 ローム小ブロック多量
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子
- 6 暗黄褐色土 ローム小ブロック



カマド

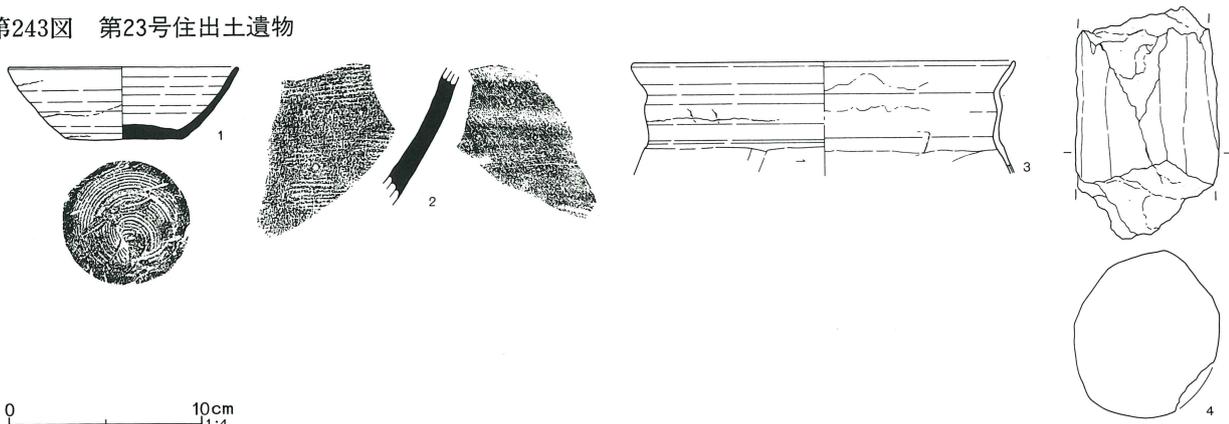
- a 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- b 灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子多量
- c 暗灰褐色土 焼土粒子・粘土粒子多量
- d 暗褐色土 ローム粒子少量
- e 暗黄褐色土 ローム粒子多量



第23号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.9	3.8	6.1	BCG	A	灰	75	
2	甕				BG	A	灰		
3	甕	(20.0)	(6.0)		BEF	A	褐	5	
4	支脚								長さ(12.2) 幅7.6 厚さ8.8cm

第243図 第23号住出土遺物



る。両者の新旧関係は土層断面及び袖部の遺存状態からカマドAが古く、カマドBが新しく作り替えられたものと考えられる。カマドAは北壁のほぼ中央に設置され、袖部はほとんど遺存しておらず、径0.7×0.65mの略円形に掘り込まれた燃烧部のみを残していた。カマドAの土層断面のc層が火床面にあたるものと推定される。壁面の一部に被熱により赤色化した部分が認められた。カマドBは東壁の南寄り設置され、長さ0.55m、焚口幅0.35mを測り、袖部を片側のみ遺存していた。燃烧部は壁外に張り出して構築され、カマドAに比べ床面の掘り込みは浅い。

床面にピットは検出されず、ほぼ平坦で全体に堅く踏み締められていた。図示しなかったが第50号墳と重複する部分には貼床が施されていた。壁溝はカマド部分を除きほぼ全周し、幅30~15cm、深さ26cm前後である。覆土は概ね自然堆積を示していた。

出土遺物は比較的多く、実測・図示できたものは須恵器5、土師器7、鉄製品1を数える。

カマドAの内部からは、カマド流入土に含まれて完形の須恵器坏1が伏せられた状態で出土したほか、カマド手前から刀子13が床直で出土した。カマドBからは土師器甕9、台付甕6と須恵器甕11が出土している。11は小型の平底甕の胴部下半部である。さらに住居中央の床面から少し浮いた状態で須恵器甕10が横倒しになって検出された。その下側からは須恵器甕12が破片となって出土し、カマドAや東壁寄りから出土した破片と接合している。

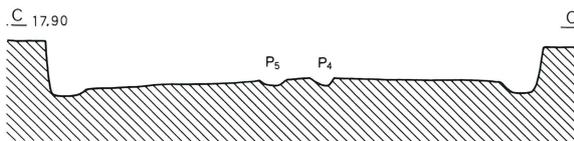
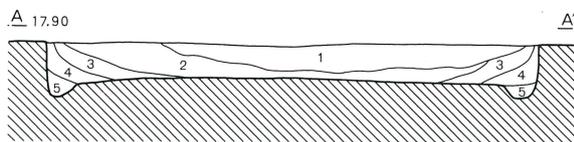
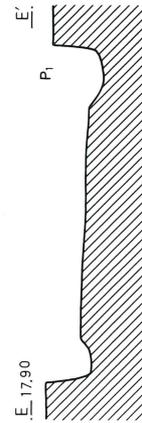
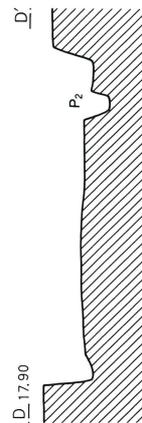
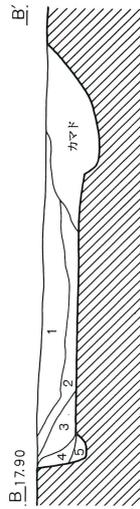
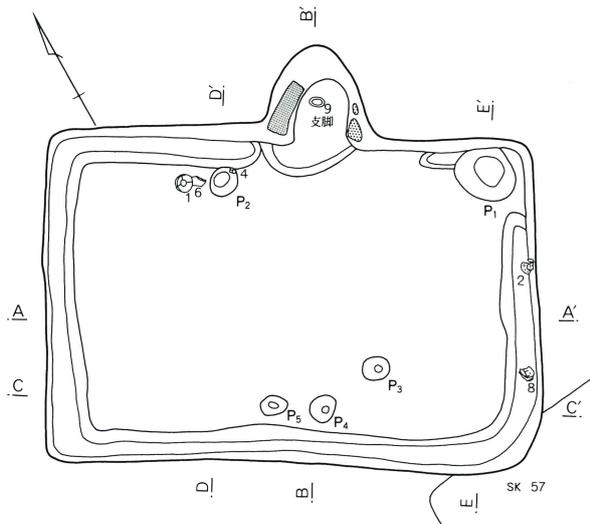
第241図1の須恵器坏は腰に張りをもって立ち上がる浅身のものである。10の平底甕と12の大甕は住居中央の床面から少し浮いた位置で検出されたことから住居廃絶後に意図的に投げ込まれたものと想定される。12は完全に接合しなかったが、残存部の上縁の破断面を故意に擦って再加工を施し、鉢として転用したのと考えられる。1・10~12は胎土に白色針状物質が含まれていることから南比企窯跡群産の製品と推定される。時期的にはHVII期に併行するものであろう。

第23号住居跡（第242・243図）

L-19・20グリッドに位置する。南へ約1.2mに第24号住居跡が近接し、主軸を同じに採る。平面形態は東西にやや長い方形を呈し、北東コーナーがやや外へ張り出していた。規模は長径4m、短径3.35m、深さ0.27mを測る。主軸方向はN-22°-Eを示す。

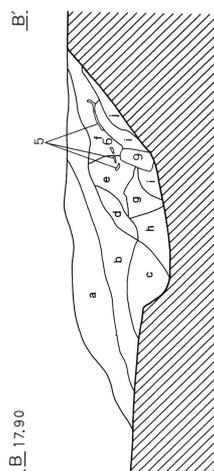
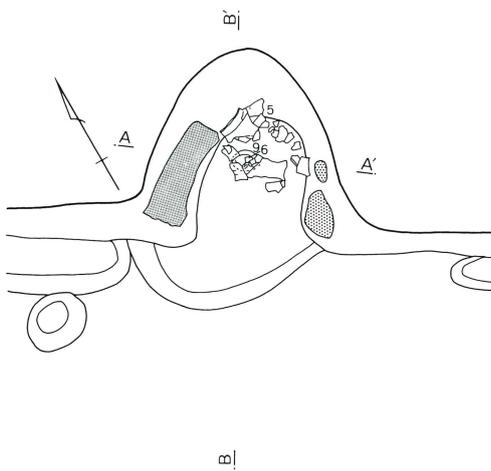
カマドは北壁のほぼ中央に構築され、袖部はほとんど形状をとどめていなかった。規模は長さ0.85m、焚口幅0.6mを測る。燃烧部は壁外に大きく張り出し、床面を皿状に浅く掘り込んでいた。燃烧部奥壁左寄りの位置に土製支脚が原位置で遺存し、その周囲からは土師器甕の胴部片が出土している。土製支脚は円柱状で上端部は被熱により赤色化が進み非常に脆くなっていた。器面は撫でを施し、面取りされる。煙道部は緩やかな段差をもって壁外に立ち上がる。覆土の観察によればa~c層が天井部崩落層に、ローム粒子を混入するd・e層が袖基底部に相当するものと考えられる。またカマド右側の壁面上部に被熱のために焼土化した

第244図 第24号住居跡



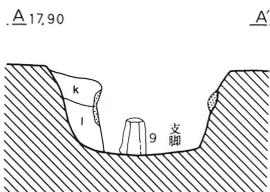
S J 2 4

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック

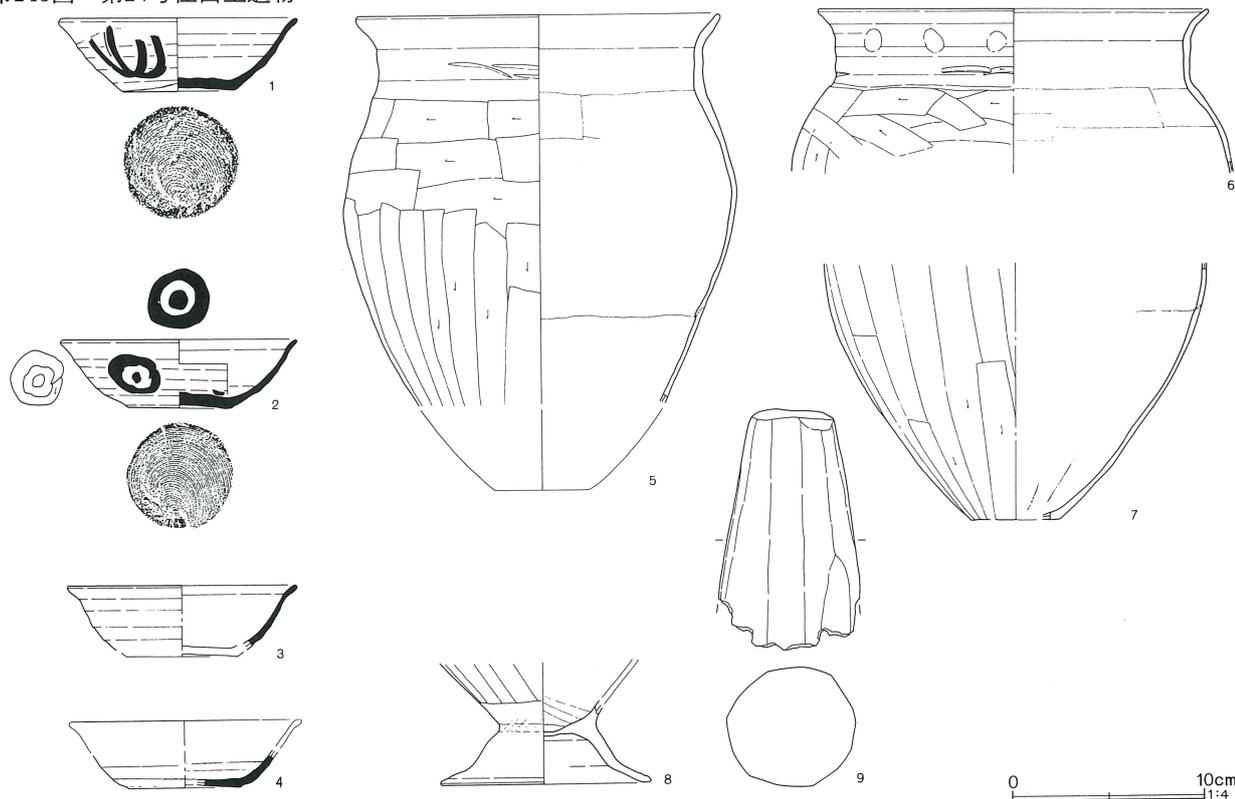


カマド

- a 暗褐色土 ローム粒子多量
- b 暗黄褐色土 焼土粒子・粘土粒子
- c 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子
- d 暗褐色土 焼土粒子少量
- e 灰白色粘土
- f 暗黄褐色土 焼土粒子少量
- g 赤褐色土 焼土ブロック
- h 暗褐色土 焼土粒子多量
- i 暗褐色土 ロームブロック
- j 暗黄褐色土 ロームブロック多量
- k 黄褐色土 ロームブロック
- l 黄褐色土 焼土粒子・粘土粒子多量



第245図 第24号住出土遺物



第24号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.4	3.9	5.8	BCG	A	オリーブ灰	100	墨書土器
2	坏	12.3	3.6	5.4	BCG	A	灰	85	墨書土器
3	坏	(12.0)	(3.5)		BCJ	A	灰	10	
4	坏		(2.0)	(5.9)	BCG	A	灰	35	
5	甕	19.0	(20.5)		BEF	A	橙	70	
6	甕	(20.6)	(8.7)		BEF	A	褐	15	
7	甕		(13.5)	(4.6)	BEF	A	褐	30	
8	台付甕		(6.4)	11	BEF	A	にぶい黄橙	60	
9	支脚								長さ(12.8) 幅7.5 厚さ6.3cm

部分が確認された。

床面は概ね平坦で、壁溝はカマド左脇を除きほぼ全周し、部分的に途切れる。幅30~20cm、深さ10cm前後である。覆土は自然堆積を示す。北東コーナーに直径約0.5m、深さ約0.12mの皿状の掘り込みのピットが確認された。位置的に見て貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は須恵器坏1、甕胴部破片1、土師器甕1、支脚1がある。

第243図1の須恵器坏は覆土中から出土したもので、器肉の厚い底部から緩やかに湾曲しながら立ち上がり口唇部は丸くおさめる。胎土に白色針状物質を混入し

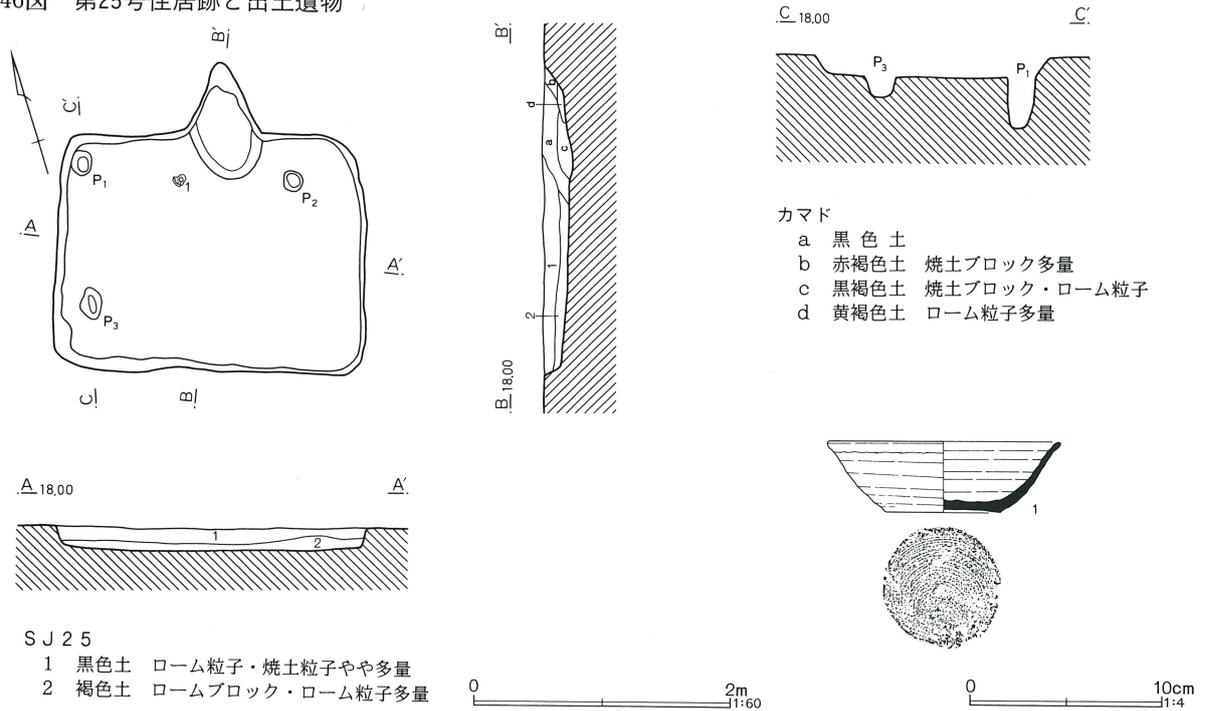
た南比企窯跡群の製品で、HVII期に比定される。時的には9世紀中葉前後であろう。

第24号住居跡 (第244・245図)

調査区中央東寄りのL-19・20グリッドを中心に位置し、北側に第23号住居跡、南側に第22号住居跡、東側に第25号住居跡がそれぞれ隣接する。南東コーナーは古墳時代後期に所属する第57号土壇を切って構築していた。平面形態は、東西方向に長い長方形を呈し、長径4 m、短径2.7m、深さ0.48mを測る。覆土は概ね自然堆積を示す。主軸方向はN-29°-Eを指す。

カマドは北壁のほぼ中央に構築され、長さ1.06m、

第246図 第25号住居跡と出土遺物



第25号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.1	3.8	6.0	BCG	A	灰	65	

焚口幅0.95mを測り、燃烧部は床面を皿状に浅く掘りくぼめ、奥壁寄りに土製支脚が原位置で遺存していた。土製支脚は截頭円錐形を呈し、二次被熱により赤色化し、器面は丁寧に面取りされている。煙道部は緩やかに壁外に立ち上がる。袖部は住居内にはほとんど遺存していなかったが、壁面に貼られた粘土部分を確認できた。カマド覆土の観察によればb～f層が天井部崩落土、h・g層が火床面に相当する。

床面は概ね平坦で、カマド前面を中心に堅く踏み締められていた。壁溝はほぼ全周し、幅35～23cm、深さ15cm前後である。ピットは合計5本検出された。カマド右脇の北東コーナーに位置するピット1は、直径約0.5m、深さ0.46mの略円形を呈し、貯蔵穴と推定される。ピット4・5は南壁中央の壁際に並列して位置し、直径約20cm、深さ5～3cmと小規模であるが、入口施設に関連したものと考えられる。

出土遺物は須恵器坏4、土師器甕3、台付甕1、土製支脚等である。第245図1・2の須恵器坏は墨書土器

である。1は体部外面にUの字を二つ重ねたような記号が書かれている。2は体部外面と底部内面の二か所に●の記号が記されている。1はカマド左脇のピット2周辺から出土し、2は東壁際から出土した。またカマド内より5・6の土師器甕が出土した。両者ともコの字状口縁で、5はカマドに掛けられた状態で潰れて検出された。出土土器の様相は、須恵器坏はいずれも胎土に白色針状物質を含んだ南比企産の製品によって占められている。時期的には9世紀後葉を中心とする、HVIII期に位置づけられる。

第25号住居跡 (第246図)

調査区中央東寄りのL-20グリッドに位置し、西側に第24号住居跡が近接する。平面形態は東西に長い長方形を呈し、長径2.5m、短径1.9mの小型住居である。床面までの深さは0.2mと浅く、覆土は自然堆積を示す。主軸方向はN-17°-Eを指す。

カマドは北壁のほぼ中央に設置され、長さ0.95m、焚口幅0.42mを測り、壁外に大きく張り出す。燃烧部

は床面を浅く掘りくぼめ、煙道部は壁外に緩やかに立ち上がる。覆土はb層が天井崩落土、c層が火床面に相当する。床面はほぼ平坦で、カマドの手前を中心に硬質面が広がる。ピットは合計3本検出された。いずれも直径約20cm、深さ40cm前後の小ピットであるが、覆土の状態等から住居に伴うものと考えられ、南東コーナーを除く各コーナーに配されている。

出土遺物は、カマド左脇から第246図1の須恵器坏が出土している。器形は底部から湾曲して立ち上がり、口唇部で外反する。胎土には白色針状物質を含み南北企産と考えられる。口唇部が玉縁状に肥厚し始めていることからHVII～VIII時期に比定される。

第26号住居跡 (第247図)

調査区中央東寄りのK・L-19・20グリッドに位置する。西側に第22号住居跡が隣接し、古墳時代前期の第40号住居跡を切って構築されていた。平面形態は方形を呈し、長径3.25m、短径2.95m、深さ0.17mと浅い。主軸方向はN-3°-Eを指す。

カマドは北壁の中央に設置され、長さ1.6m、焚口幅0.4mを測り、袖部は褐色粘土を用いて構築されていた。燃烧部底面を2段に掘り込み、奥壁寄りに須恵器蓋を伏せ置きして支脚に転用していた。カマド覆土はa～e層が天井崩落土、f層が灰層、g層が火床面、h層が掘り方埋土に相当する。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み締められていた。壁溝はカマド部分を除きほぼ全周し、幅30～13cm、深さ25cm前後である。ピットは認められなかった。

出土遺物は須恵器蓋・坏、土師器坏・甕・台付甕、石製紡錘車等である。カマド内部からは支脚に転用された須恵器蓋1が、カマド左脇から滑石製紡錘車7が出土している。また西壁の壁際から土師器甕4が破片となってまとまって出土した。

第247図1は無鈕の蓋である。口径18.4cm、器高2.9cmを測り、椀の蓋であろう。天井部は丸く膨らみ、外面に回転篋削り調整を施す。胎土に白色・黒色粒子を含み、白色針状物質は混入していない。2の坏は体部が直線的に開いて立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。

3は平底の土師器坏で、底面に篋削り調整を施し、体部外面に指頭圧痕を残す。4はコの字状口縁の甕である。7は滑石製紡錘車で、2次被熱を受け黒く変色している。出土した土器群の時期は、1の蓋の類例がHVIII期に位置づけられる柳原A-1号窯から出土していることから9世紀後葉前後と推定される。

第29号住居跡 (第248・249図)

調査区中央のL-18グリッドに位置する。第22～26号住居跡のグループから9mほどの距離を置いて構築されている。平面形態は方形を呈し、規模は長径3.85m、短径3.8mを測り、床面までの深さは0.3mである。東壁に2基のカマドを並置していた。主軸方向はN-108°-Eを示す。

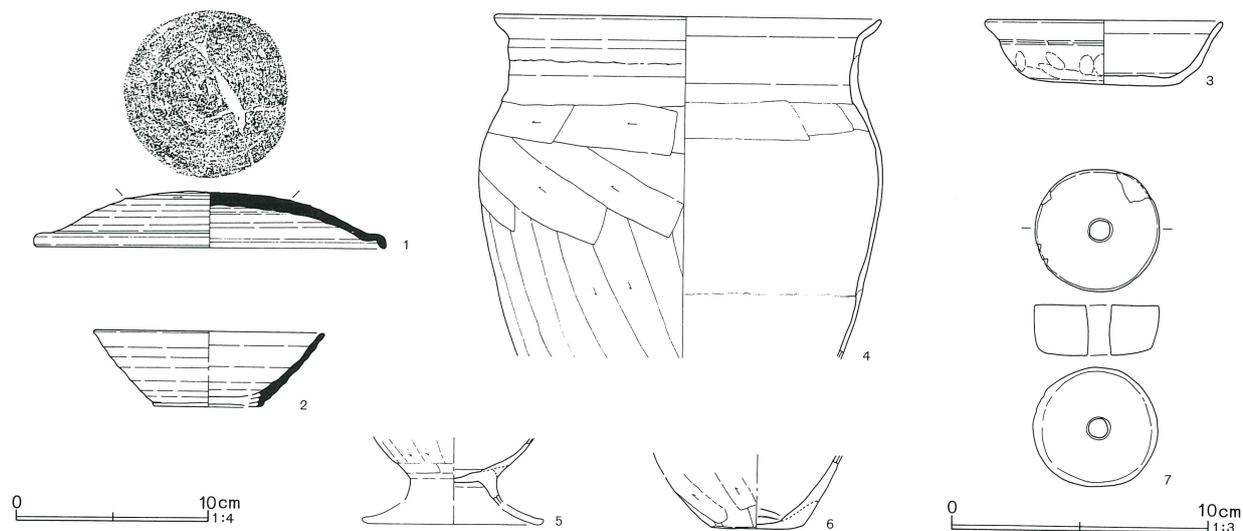
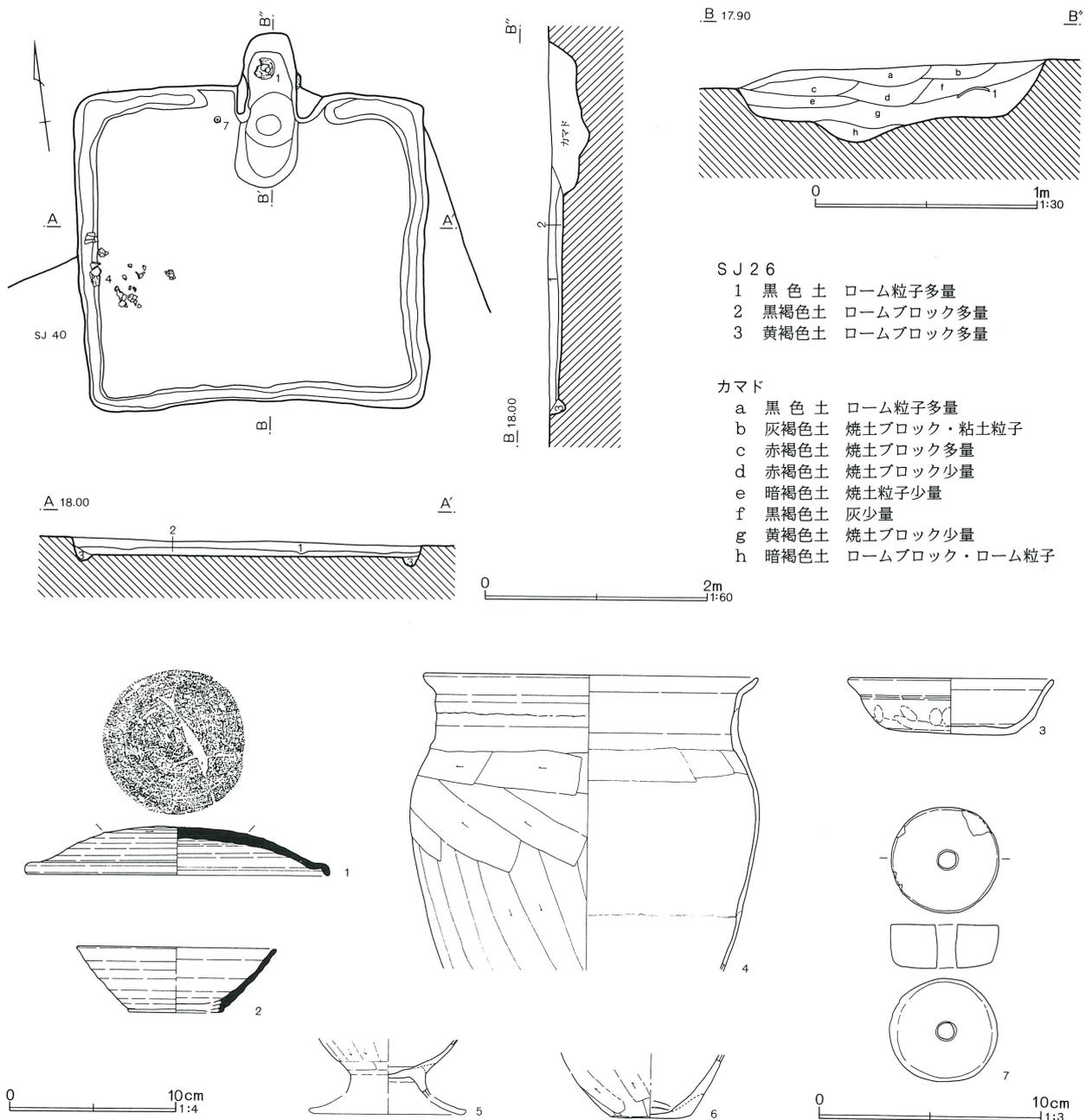
カマドAは東壁の南寄りに位置し、長さ1.6m、焚口幅0.95mを測る。燃烧部は浅く皿状に掘り込まれ、煙道部は壁外に緩やかに立ち上がる。袖部は遺存していない。覆土に火床面と考えられる焼土ブロック層と焼土ブロックを多量に含むd層が確認された。

カマドBは東壁の北寄りに位置し、長さ0.82m、焚口幅0.95mを測る。燃烧部の床面への掘り込みはほとんどなく、直径約20cm範囲の火床面が確認された。袖部は地山を掘り残して基部を作り出していた。カマドの土層断面の観察によればカマドBの覆土をカマドAが切っていることから、両者の先後関係はカマドAが新しく、カマドBが古いものと推定される。

床面は概ね平坦であり、カマド前面を中心に堅く踏み締められていた。壁溝は西壁と北壁を部分的に巡り、幅30～12cm、深さ16cm前後を測る。ピットは南壁のコーナーに2本検出されたが、住居に直接伴うものであるかは明確でない。

出土遺物は須恵器蓋・坏・高台付椀、土師器甕・台付甕、砥石等が出土した。カマド付近から甕9、台付甕12が出土し、床直上から高台付椀7・8、台付甕11が検出された。第249図1は無鈕の蓋で、復元口径15.4cm、器高2.7cmを測り、天井部は糸切り離し未調整である。高台付椀の蓋であろう。胎土に白色針状物質を含まず産地は明確でない。2～6の坏は底径が小さく、

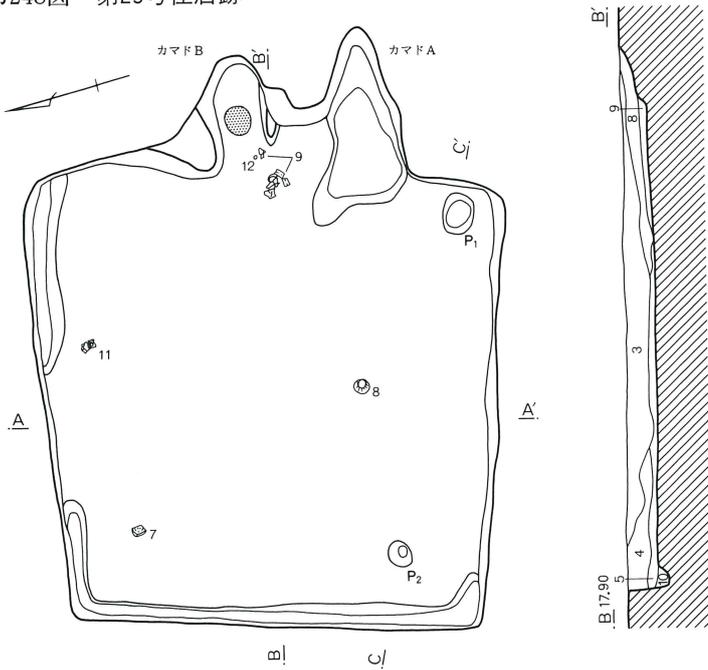
第247図 第26号住居跡と出土遺物



第26号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋	18.4	2.9		BG	A	灰	85	無鈕
2	坏	(12.0)	4.0	(5.0)	BCG	A	灰	40	
3	坏	12.2	3.4	7.9	BCF	A	にぶい褐	85	
4	甕	20.2	(18.0)		ABEF	A	明褐	65	
5	台付甕		(3.6)		BEF	A	褐	40	
6	甕		(3.9)	4.8	BEF	A	明褐	40	
7	紡錘車								外径5.1 孔径1.0 厚さ2.1cm

第248図 第29号住居跡



S J 2 9

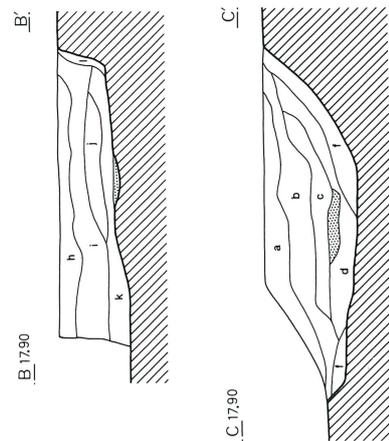
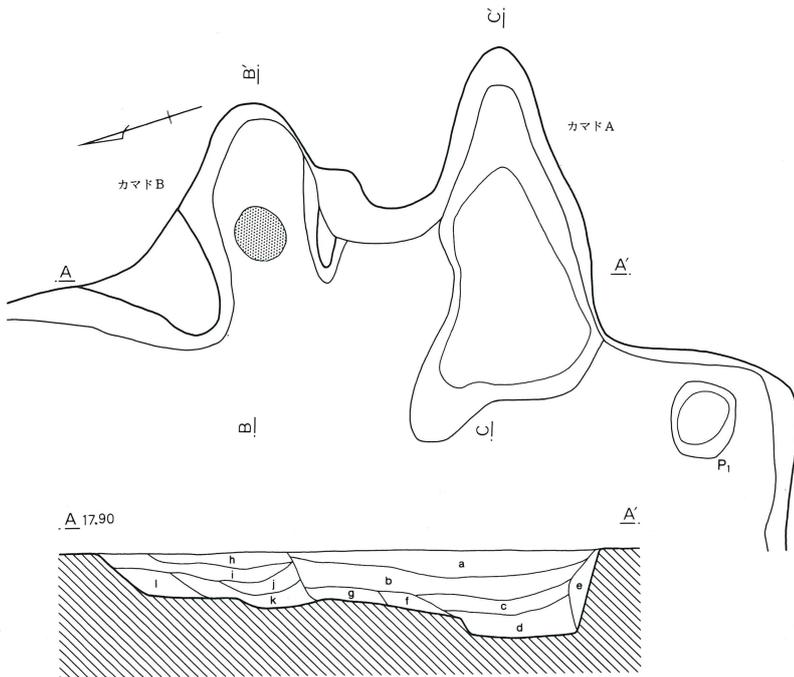
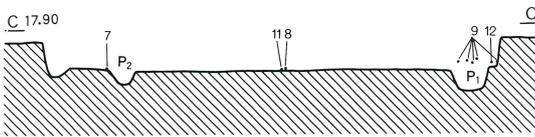
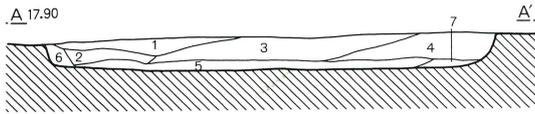
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色土 ローム粒子多量
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック・焼土粒子多量
- 4 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- 5 暗褐色土 ローム小ブロック多量
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック・炭化物粒子
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック
- 8 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子多量
- 9 暗黄褐色土 焼土粒子多量
- 10 暗黄褐色土 ローム粒子多量

カマドA

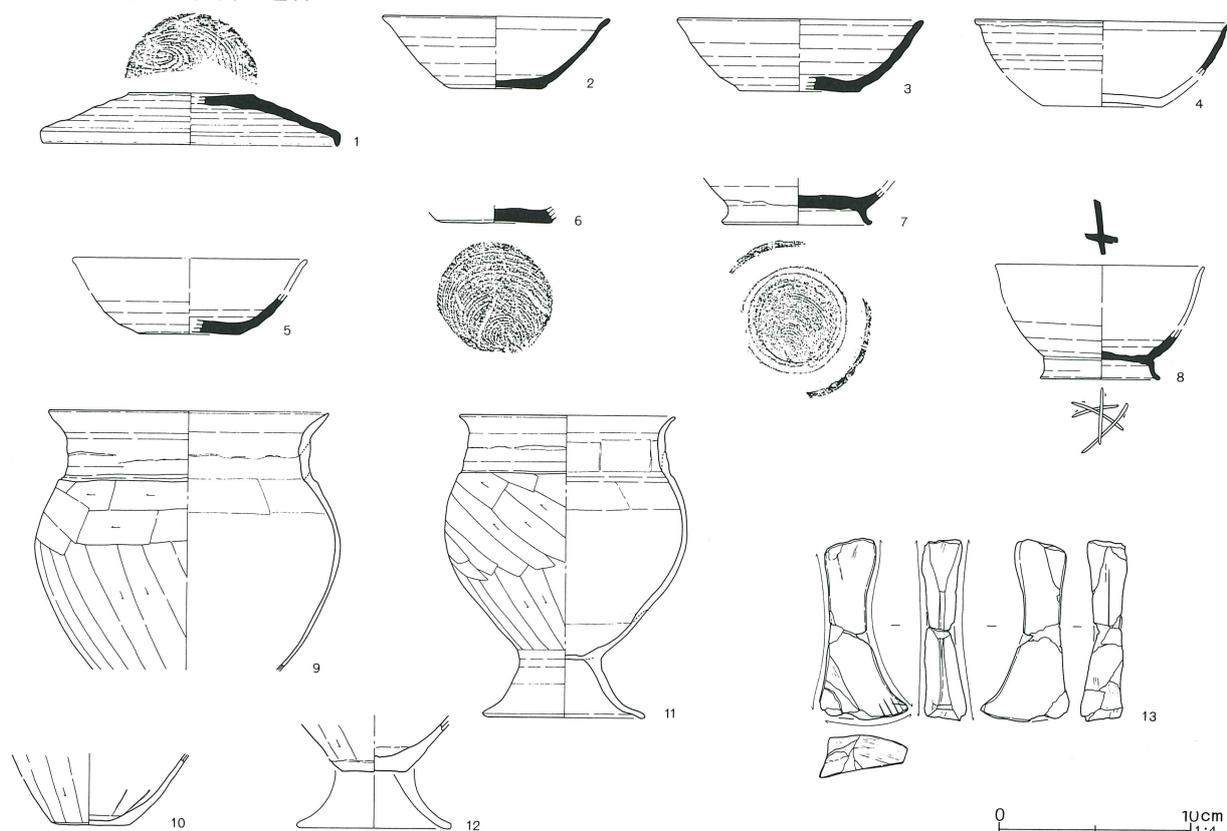
- a 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子多量
- b 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子多量
- c 暗赤褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- d 暗赤褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多量
- e ロームブロック
- f 暗黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- g 暗黄褐色土 焼土粒子多量

カマドB

- h 暗褐色土 焼土粒子・粘土粒子少量
- i 暗褐色土 焼土小ブロック・粘土粒子少量
- j 褐色土 焼土ブロック・粘土ブロック多量
- k 褐色土 焼土粒子多量
- l 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量



第249図 第29号住出土遺物



第29号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋	(15.4)	(2.7)		B G	A	灰白	40	
2	坏	(11.8)	3.8	4.8	B C G	A	灰	25	
3	坏	(12.8)	3.8	(6.4)	B C G	A	灰	35	
4	坏	(13.4)	(2.8)		B C G	A	灰	25	
5	坏		(2.2)	(5.3)	B C G	A	灰	20	
6	坏		(0.9)	5.7	B C G	A	灰白	95	
7	高台付椀		(2.4)	7.6	B F G	A	灰黄	70	
8	高台付椀		(3.8)	6.2	B C G	A	灰	80	篋記号 墨書土器
9	甕	14.5	(13.7)		B E F	A	褐	55	
10	甕		(3.8)	3.8	B E F	A	にぶい赤褐	35	
11	台付甕	(11.2)	(16.0)	(8.1)	B E F	A	にぶい黄褐	30	
12	台付甕		(3.0)		B E F	B	にぶい黄褐	25	
13	砥石								長さ9.6 幅4.7 厚さ2.3cm 凝灰岩製

口唇部が玉縁状に肥厚するものが主体を占める。いずれも胎土に白色針状物質を含み、南比企産と考えられる。時期的にはやや古相を残す3がHVII期、他はHVIII期に位置づけられる。7はハの字に開く底径の大きな高台付椀の破片である。胎土に白色針状物質を含まず、赤色粒子の混入が目立つ。8の高台付椀の内面には十字形の墨書が残り、底面には篋描きが認められる。長

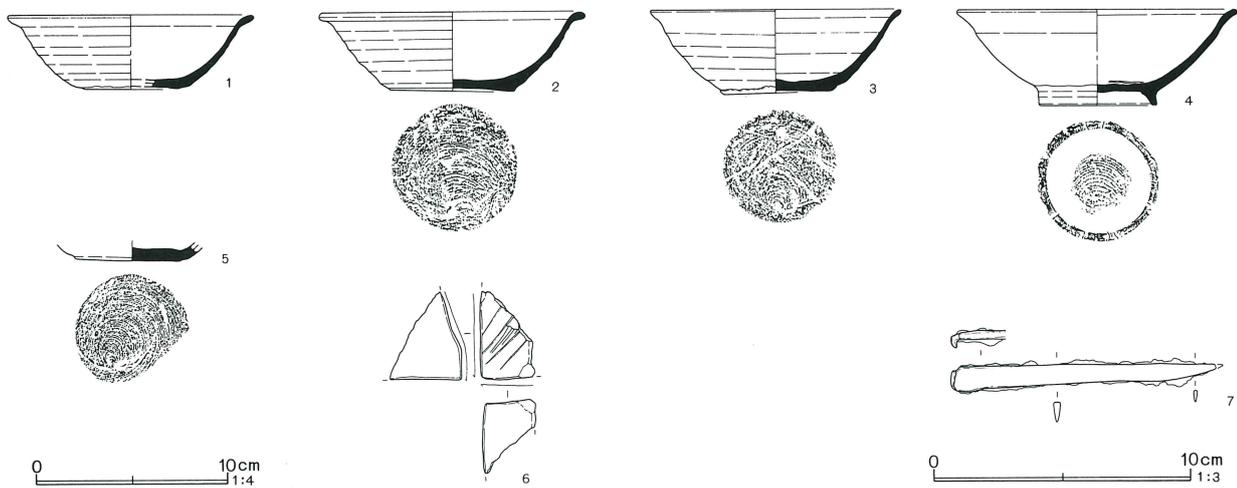
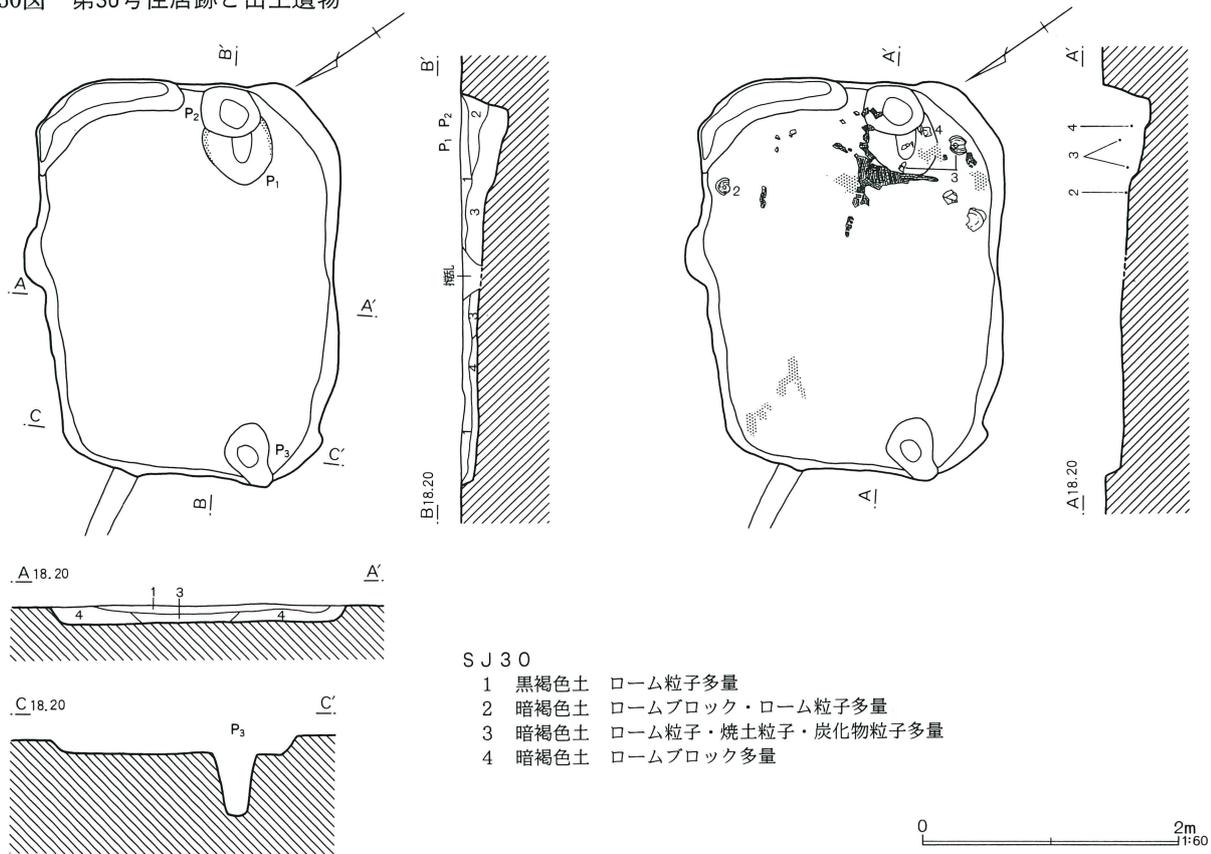
くハの字に開いた高台をもつ小振りの椀であろう。胎土に白色針状物質を含む南比企産の製品である。

第30号住居跡 (第250図)

調査区南側のL-16グリッドに位置する。南側へ約12m離れて第31号住居跡が所在しているが、周辺における住居跡の分布はやや散在的な在り方を示す。

平面形態は東西方向に長い長方形を呈し、長径3.25

第250図 第30号住居跡と出土遺物



第30号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.8)	3.9	(5.0)	B F	A	灰	20	
2	坏	13.4	4.15	6.5	B F G	A	灰	90	
3	坏	12.9	4.4	5.7	B F G J	A	褐灰	90	
4	高台付坏	(14.4)	5.1	6.1	B G I	A	青灰	45	
5	坏		(1.1)	5.6	B F	A	灰	80	
6	砥石								長さ(4.7) 幅(2.9) 厚さ(3.9) cm
7	刀子								長さ10.6 身幅1.1 棟幅0.3cm

m、短径2.4mを測り、コーナーに丸味をもつように掘り込まれていた。床面までの深さは0.15mと浅く、カマドは検出されていない。主軸方向は南壁を基準に採れば、N-126°-Eを示す。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み締められ、東壁に壁溝を部分的に巡らしていた。ピットは合計3本が検出された。ピット1は直径約50cm、深さ約10cmを測り、ピット2と重複する。壁面は被熱により赤色硬化しており、小鍛冶炉の可能性も考えたが鉄滓等の鍛冶関連の遺物が検出されておらず、その性格は明確にし得なかった。ピット2・3は直径約45cm、深さ25~50cmを測り、覆土の状況から住居に伴うものと考えられる。やや片側によっているが、配置から考えると棟持ち柱とも推定される。

覆土及び床面上に多量の炭化材と焼土ブロックが検出され、特にピット1の周辺が顕著で焼失住居の可能性が高い。また第2・4層は多量のロームブロックを含むことから人為的な埋め戻し層と考えられる。

遺物は須恵器坏・高台付坏、砥石、刀子等が出土し、ピット1周辺にまとまっていた。

第250図1~3・5は須恵器坏である。底部調整は回転糸切り離し未調整である。体部は内湾して立ち上がり、口唇部は玉縁状に肥厚する。口径12.8~13.4cm、底径5~6.5cm、器高3.9~4.4cmを測り、胎土には白色針状物質の混入は見られず、白色粒子・赤色粒子等の混入が目立つ。4は高台付椀に比べ体部が浅身であることから高台付坏に分類した。高台はハの字に開き、撫で付けはやや不十分である。胎土に片岩粒の混入が目立ち、末野産の製品と考えられる。7の刀子は覆土中からの出土である。切先は研ぎ減りのため細長い。関が無く、刃部と茎の区分は不明瞭である。茎尻は短

く折れ曲がっていた。

第31号住居跡（第251図）

調査区南側のK-15グリッドを中心に位置し、第4号掘立柱建物跡に切られる。平面形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は長径4.25m、短径3.65m、深さ0.4mを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方向はN-25°-Eを指す。

カマドは北壁のやや東寄りに構築され、長さ1.2m、焚口幅0.6mである。燃烧部は底面をピット状に掘りくぼめ、煙道部は緩やかに壁外に立ち上がる。袖部は灰白色粘土を用いて構築されており、比較的良好に遺存していた。カマド覆土の状況はa~c層が天井崩落土、d・e層が火床面、f層が掘り方埋土に相当するものと思われる。

床面は緩やかな起伏があり、カマドの手前を中心に堅く踏み締められていた。壁溝はカマド部分を除いてほぼ全周し、幅45~15cm、深さ10cm前後である。ピット等の施設は確認されなかった。覆土は4層に分けられる。概ね自然堆積を示しているが、第3層にロームブロック、焼土粒子、炭化物粒子が混入しており、人為的な埋め戻しの可能性も考えられる。

出土遺物は全体に少なく、実測・図示できたのは須恵器坏、土師器甕・台付甕、刀子等である。

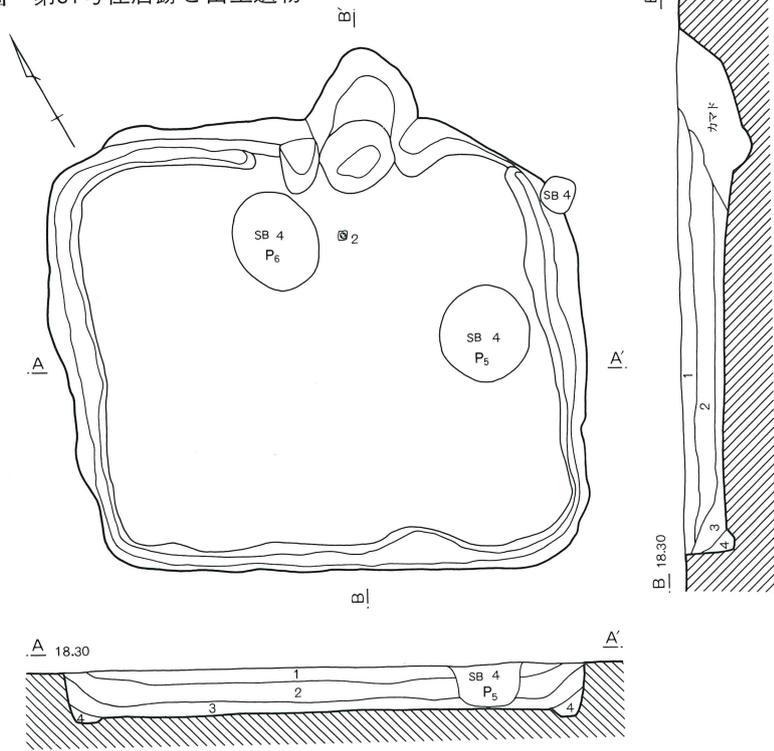
第251図2は須恵器坏の底部である。底径6cmを測り、南比企窯跡群の製品である。6の刀子は切先及び茎を欠損する。片関で、意図的に切先が折り曲げられていた。覆土中からの出土である。同様に切先を折り曲げた刀子が第44号墳からも出土しており、古墳からの混入の可能性も十分ある。

住居の時期は出土遺物が少なく明確でないが、須恵器坏の特徴から9世紀後半に位置づけられる。

第31号住居跡出土遺物観察表

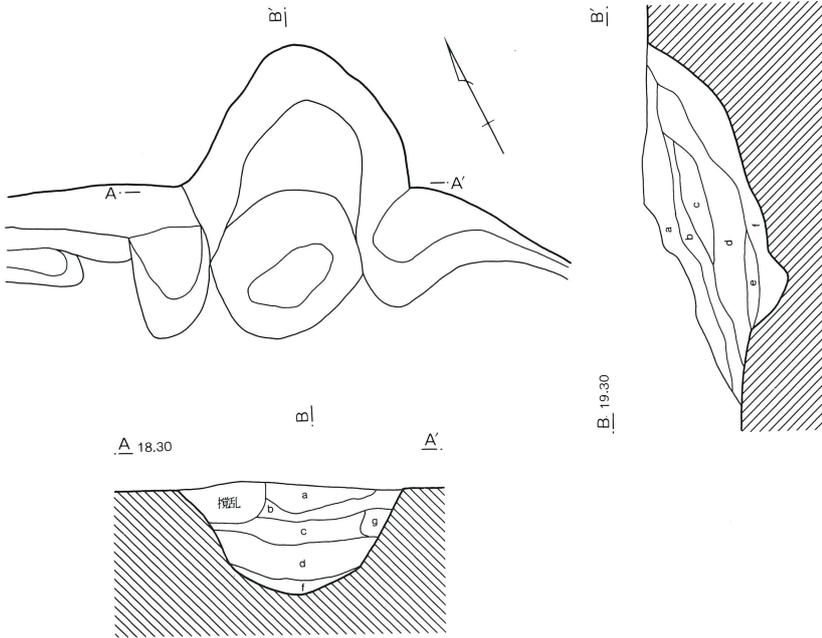
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏		(1.3)	5.5	A B F	A	灰	30	
2	坏		(1.7)	6.0	B C G	A	浅黄	80	
3	台付甕		(2.2)	(9.2)	B E F	A	橙	30	
4	甕		(10.5)	(4.3)	B E F	A	にぶい褐	25	
5	甕		(4.2)	(4.0)	B E F	A	橙	65	
6	刀子								長さ(6.8) 身幅1.2 棟幅0.35cm 刀部変形

第251図 第31号住居跡と出土遺物



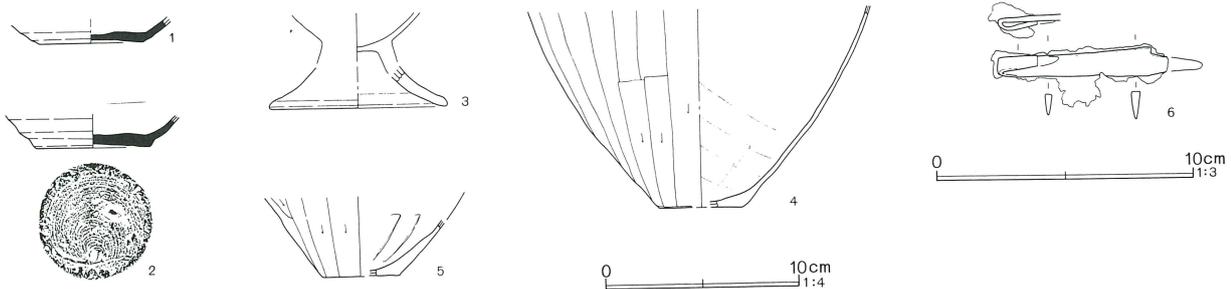
SJ31

- 1 暗黒褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量
- 3 褐色土 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化物粒子少量
- 4 暗黄褐色土 ローム小ブロック多量

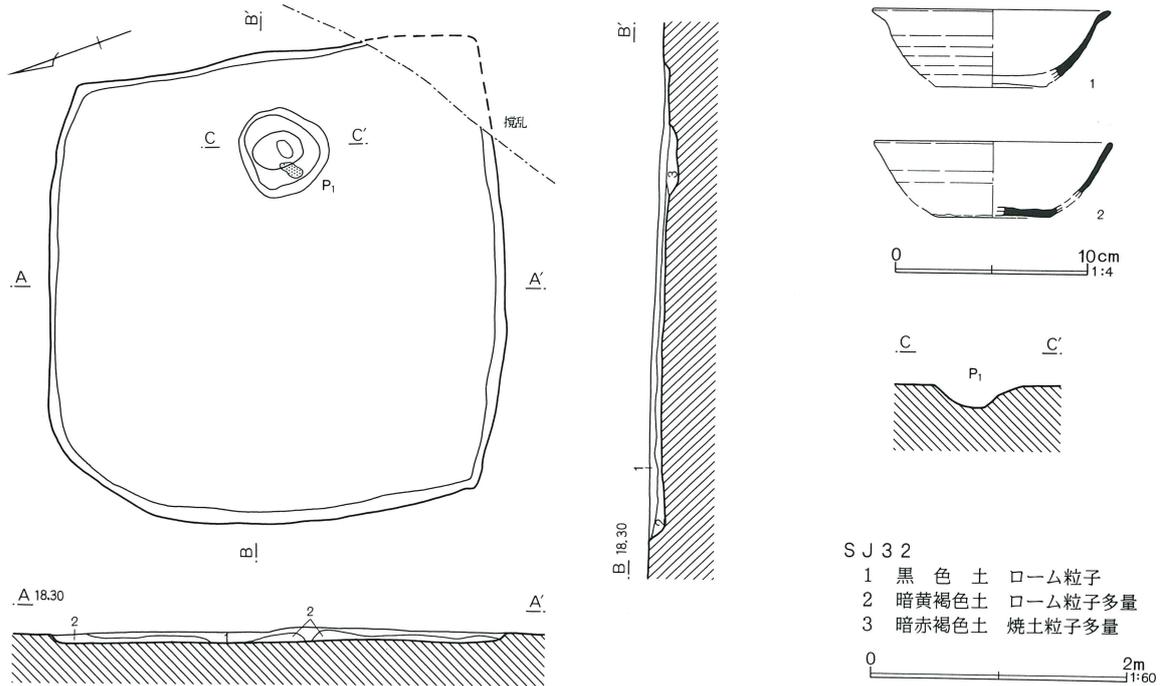


カマド

- a 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子少量
- b 暗褐色土 焼土粒子多量
- c 暗灰褐色土 焼土粒子・粘土ブロック多量
- d 暗赤褐色土 焼土ブロック・粘土粒子多量
- e 赤褐色土 焼土ブロック多量
- f 暗黄褐色土 ロームブロック多量
- g 黄褐色土 焼土ブロック少量



第252図 第32号住居跡と出土遺物



第32号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.5)	(3.7)		B F I	A	灰	10	
2	坏	(12.3)	(4.0)	(6.0)	B C G	A	灰	10	

第32号住居跡 (第252図)

調査区南側のL・M-14グリッドに位置し、北東側で第48号墳と接する。南東コーナーは後世の攪乱により壊されていた。平面形態は北西コーナーが膨らんだ、歪んだ方形を呈する。規模は長径3.8m、短径3.65m、深さ0.1mを測り、全体に床面の遺存状態は良好でなかった。主軸方向は南壁を基準とすれば、N-110°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、全体に軟らかく硬質面は確認できなかった。壁溝等は検出されなかったが、東壁寄りに直径約0.7m、深さ16cmの略円形のピットが検出された。底面に被熱による焼土面がわずかに残っていたことから炉跡の可能性が強い。

出土遺物は覆土中から須恵器坏の破片が少量出土したにすぎない。第252図1・2は須恵器坏である。1は胎土に片岩粒を含むもので、末野窯跡群産と推定される。2は白色針状物質を含むもので、南比企窯跡群産

と推定される。時期的にはHⅧ期の様相を示す。

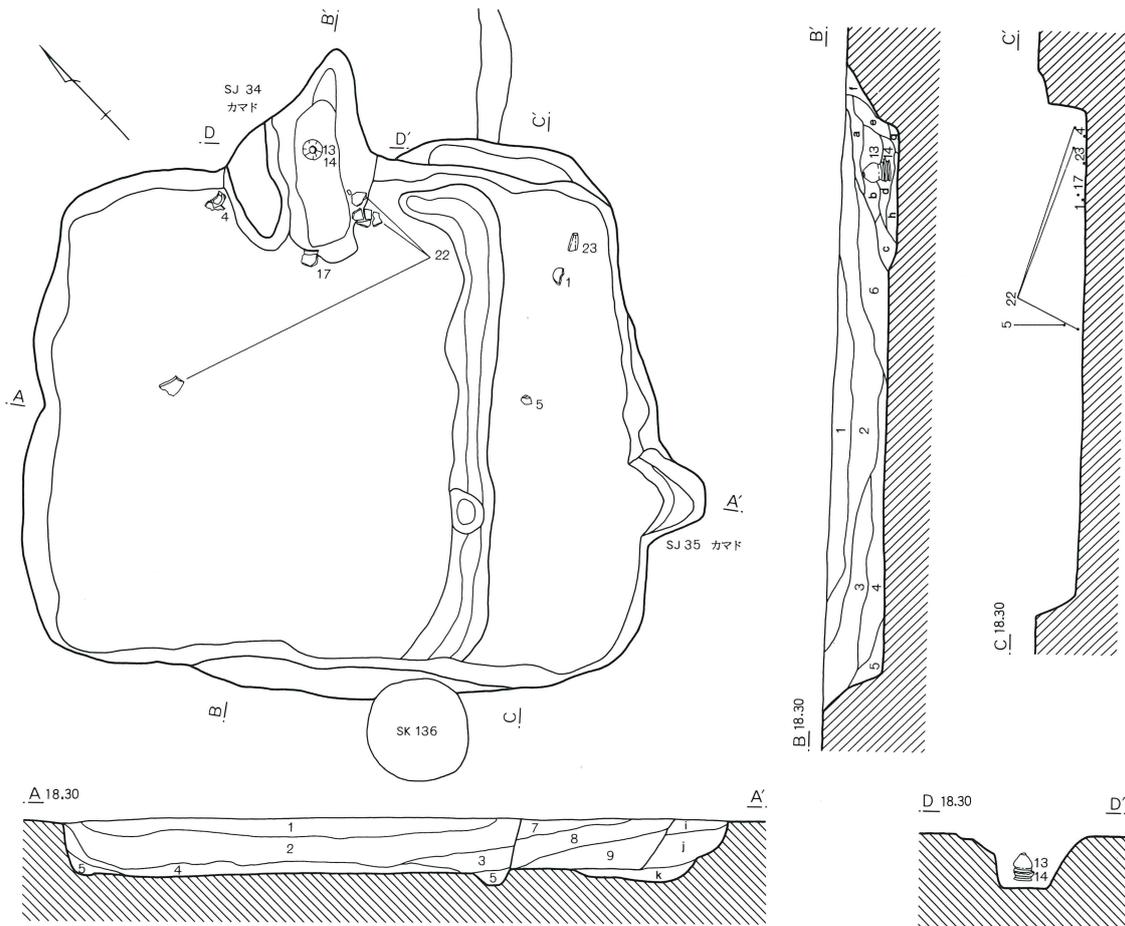
第33号住居跡 (第253図)

調査区南側のL-12グリッドに位置し、南壁の一部は第161号土壙によって切られていた。平面形態は南北方向にやや長い方形を呈し、長径4m、短径3.45m、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-60°-Wを指す。

カマドは西壁のほぼ中央に構築され、長さ1.07m、焚口幅0.7mを測る。袖部はロームを掘り残して基底部を構築したものである。燃焼部は浅く皿状に掘り込み、奥壁寄りに土製支脚を設置していた。支脚は断面方形を呈し、上面は2次被熱により非常に脆くなっていた。煙道部は急傾斜で壁外に立ち上がる。覆土の観察によればC層が火床面と考えられる。

床面は概ね平坦で、壁溝はほぼ全周しているが、部分的に途切れる。幅40~15cm、深さ10cm前後である。ピットは住居の中央に1本だけ検出された。ピット1は直径0.6m、深さ0.55cmを測り、覆土の観察から本住

第254図 第34・35号住居跡



S J 3 4 ・ 3 5

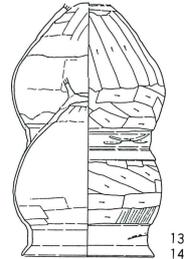
- 1 黒色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子多量
- 5 黄褐色土 ロームブロック多量
- 6 暗褐色土 焼土粒子・粘土粒子・炭化物粒子
- 7 暗黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量 (S J 3 5 覆土)
- 8 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量 (//)
- 9 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量 (//)

S J 3 4 カマド

- a 暗褐色土 / ローム粒子・焼土粒子少量
- b 暗赤褐色土 焼土粒子・粘土粒子多量
- c 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- d 赤褐色土 焼土粒子多量、粘土粒子少量
- e 暗黄褐色土 焼土ブロック多量
- f 暗黄褐色土 ロームブロック多量
- g 赤褐色土 焼土粒子・粘土粒子多量
- h 暗褐色土 ロームブロック多量

S J 3 5 カマド

- i 暗灰褐色土 焼土粒子多量、粘土粒子少量
- j 灰褐色土 焼土粒子少量、粘土粒子多量
- k 暗褐色土 焼土粒子・粘土粒子多量



第34・35住居跡 (第254・255図)

調査区南側のK-13・14グリッドに位置し、周囲に同時期の住居跡が散在している。調査当初は重複のない単独の住居と認識していたが、床面精査及び土層断面の観察によって住居の重複を確認したため、新しい方を第34号住居跡、古い方を第35号住居跡と呼称して調査を実施した。

第34号住居跡は、北壁のほぼ中央にカマドを設置し、平面形態は比較的形の整った方形を呈する。規模

は長径3.95m、短径3.75m、深さ0.5mを測る。主軸方向はN-44°-Eを示す。

カマドは長さ1.7m、焚口幅0.5mの比較的大型のものである。袖部は灰白色粘土を用いて構築しており、左袖のみが良好に残り、右袖は既に流失していた。燃焼部は床面を浅く掘りくぼめ、奥壁をもって煙道部に移行する。煙道部は緩やかに傾斜して壁外に立ち上がる。燃焼部奥側やや左寄りに台付甕2個体を逆位に重て支脚に転用していた。台付甕14を下に置き、その上

第255图 第34・35号住出土遺物

